

関西NGO大学のあゆみ

「市民による学びの場」の30年



関西NGO大学運営委員会

【目次】

はじめに	数字で見るNGO大学	・・・ 2
第1章	NGO大学とは？ 全体テーマ/キャッチフレーズの変遷から考える	・・・ 4
	1. NGO大学は当初、何をめざしたのか	
	2. 第1期の講座内容～NGOスタッフ養成講座～	
	3. 第2期～7期の講座の変化～スタッフ養成講座から第三世界理解講座へ～	
	4. 第7期以降の変化～課題理解から「私とのつながり」「足元を見つめ直す」へ～	
	5. NGO大学の目的	
	6. NGO大学の実施概要	
	7. 講座内容～第23期関西NGO大学の場合～	
	8. 講座の特徴・ポイント	
	9. NGO大学30年間の講座一覧	
	10. NGO大学は何を目指し、何を学んできたのか～各回テーマと発題者の分析～	
	11. NGO大学の終盤	
	12. 発題者/修了生のコメント	
	13. 数字で見るNGO大学～参加者、運営委員、助成団体、発題者～	
	14. 浜本裕子氏(元関西NGO大学副校長)へのインタビュー	
	15. 番外編～アドバンスドコース～	
第2章	NGO大学という“学びの場”の作り方	・・・ 46
	1. NGO大学の組み立て方	
	1年間の作業行程 / 運営委員の構成 / 各回担当 / 合宿 / 広報戦略 / 報告書作成 / 講座後の運営委員会 / 評価会	
	2. NGO大学の軸～その考え方、組み立て方、手法について～	
	「気づき→学び→行動」のプロセス / 学びの手法 / ワークショップという言葉	
	グループディスカッション / ウーリーシンキング / 貿易ゲーム・N大バージョン	
	3. 行動へのしかけ～グループワーク～	
	4. 多様な行動のかたち～グループワークから見るNGO大学～	
	5. 何に取り組んだのか～グループワークの分析～	
	微力は無力ではない/足元の問題に取り組む/“マイノリティ”というテーマ / 当時の社会背景に関連したテーマ/講座内容に影響されてきたグループ / その後のNGO大学の運営に影響したグループ/NGO大学の運営について考える	
第3章	さらなる学びを求めて 運営委員会という“人材育成”の場	・・・ 66
	1. 運営委員とは	
	役割の変遷 / 組織運営を学ぶ場 / 運営委員の役割 / 運営委員の実際 / NGO大学におけるファシリテーションについて / 数字で見る運営委員	
	2. 運営委員を経験して～学んだこと・今につながっていること・印象的だったこと～	
第4章	私にとってのNGO大学	・・・ 79
資料編	メディア掲載資料、パンフレット、並列年表、参考文献、引用資料など	・・・ 100
あとがき	「ひとまずの終わりに」 藤野達也	・・・ 115
編集後記	「人のつながり」が持つ力」「もうひとつの“編集後記”～つなぐということ～	・・・ 116

【N大コラム】

- ・ 関西NGO協議会について
- ・ N大と関西NGO協議会加盟団体とのかわり
- ・ NGO大学の開催場所
- ・ さらなる学びの場～交流会について～
- ・ 広報のやりくり
- ・ N大運営の細かな工夫
- ・ 今後のつながり
- ・ NGO大学のロゴについて

はじめに

この冊子は、1987年から2016年まで開催された、「関西NGO大学」の30年間のあゆみをふりかえり、まとめたものである。関西NGO大学は、市民の国際理解をすすめ、国際社会がかかえる課題に取り組むNGO(非政府組織)の活動に関わる人材を育てることを目的として、関西NGO協議会の主催により実施してきた「参加者主体」の講座である。

主に国際協力、NGO、ボランティアに関心がある方を対象に、開講以来、発題者(講師)による講義の他に、グループディスカッション、ロールプレイ、シミュレーションなどのワークショップを取り入れた「参加型」で進め、「気づき→学び→行動」のプロセスを大切にしてきた「市民の学びの場」である。市民の国際理解や地球的な課題への理解を深め、国際協力活動をはじめとした市民活動の主体は一人ひとりにあるとの認識のもと、各自が果たすべき役割について考え、行動できる人材を育てることを願って実施されてきた。参加者は関西だけでなく、新潟・東京・愛知・石川・徳島・岡山・広島・大分など幅広い地域から集まった。NGO大学参加者や修了生の多くが、NGO・NPOや企業のCSR部門、国際機関などで活動している。また、学びを行動に移すべく、修了生が関わる様々なセミナー、イベントなどが各地で開催されてきた。



【キーワード】 修了生 NGO大学は年6回の連続講座。そのうち4回以上の参加者を修了生と呼ぶ。

導入としてNGO大学について大まかに捉えるのに、以下の4つの数字をあげてみたい。

【 30 】 【 176 】 【 319 】 【 6908 】

【 30 】 … 30年

関西NGO大学は1987年6月に設立された関西のNGOネットワーク組織「関西国際協力協議会」¹の最初の事業として1987年9月に開講した。その後、2017年2月まで30年間、途切れることなく実施された、歴史と実績のある講座である。

【 176 】 … 176講座

NGO大学は年度ごとの9月にスタートし、毎月1回実施。翌年2月が最終回の全6回の連続講座²である。それぞれの講座は基本的に1泊2日³で行われ、じっくりと多角的な学びを目指した。NGO大学30年のうち、第30期(2016年度)のみ2回の開催であった。

つまり、NGO大学は30年間で **6回×30年－4回＝176回** の講座が企画され、開催された。

¹ 関西国際協力協議会：1994年に「関西NGO協議会」改称。2003年に非営利活動法人(NPO法人)認証。詳しくは6頁のコラム「関西NGO協議会について」参照。

² 全6回の講座は連続性を意識して企画され通し参加が原則であるが、単発参加も可能。

³ 1泊2日が基本だが例外的に日帰りの講座もあった。

【 319 】 … 319名の発題者(ゲスト・講師)

NGO大学が30年間、176回の講座で協力いただいた発題者はのべ319名。関西NGO協議会の加盟団体をはじめ各分野のNGO関係者、大学教員、専門家、ジャーナリスト、海外からのアーティスト、映画監督、落語家、漫画家、企業関連、社会活動家、国際機関、コンサルタント、政治家、猟師・・・など、多様な立場、所属の方にご登壇いただいた。その内容も講演・講義のみならずワークショップや対談、パネルディスカッション、ライブ、落語、現地報告など、幅広い学びのスタイルがあった。(発題者の分析、テーマの分析は後述)

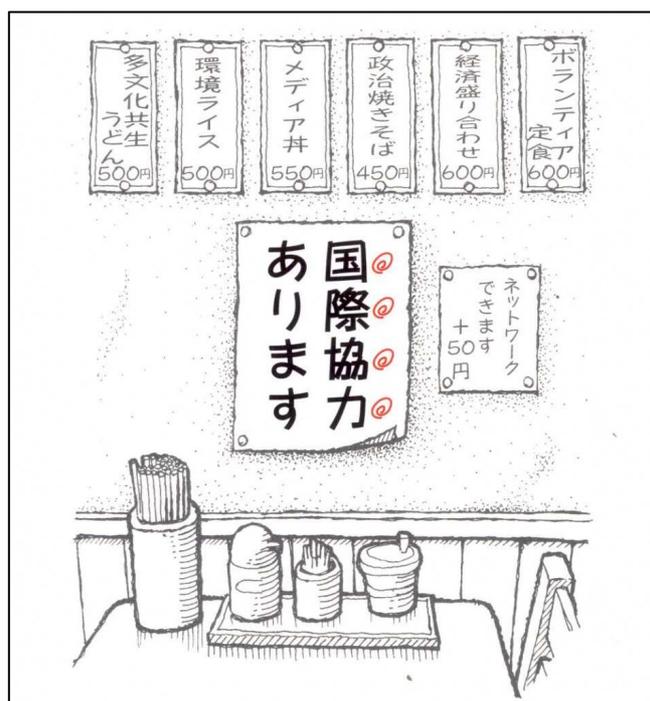
【キーワード】 発題者 NGO大学では、「教える→学ぶ」という一方通行の関係ではなく、参加者と発題者、参加者同士が対話し、お互いに学び合う、という「相互性」を重視してきた。そのため、講師・ゲストを「先生」とは呼ばず、「発題者」と呼んでいる。

【 6908 】 … 6,484名の参加者(のべ)+424名の運営委員(のべ)

30年間ののべ参加者数は6484名。この中には複数期にわたってリピート参加した参加者も含まれる。加えて運営委員が参加してきた。NGO大学の企画・運営・評価を担ってきた「運営委員会」は、主にNGO大学の修了生と加盟団体スタッフから構成されている。その運営委員の実数は167名(のべ人数は424名)。つまり、30年間の総参加者数は、参加者と運営委員を合わせたのべ6908人となる。

【キーワード】 運営委員会 運営委員会は、講座を統括する校長・副校長の他、10~20名の運営委員で構成され、NGO大学の企画・運営・評価を担ってきた。運営委員会は基本的に、主催団体である関西NGO協議会の加盟団体からのスタッフと、NGO大学修了生で構成されている。

この冊子では、NGO大学が取り上げた先駆的かつ多角的なテーマ・内容、多様で多彩な発題者(ゲスト)、講座スタイル、「気づき→学び→行動」のプロセスを大切にした講座の組み立て方、学びを行動につなぐしかけ「グループワーク」、修了生を中心とした運営委員会による企画運営のノウハウ、参加者のその後の国際協力への関わり、関西をはじめ全国のNGOや「市民の学びの場」への影響や役割、などについて俯瞰、分析しまとめた。また、修了生から「NGO大学と私とこれから」というテーマで、NGO大学に参加し、何を学び、それが今にどう活かされているかについて寄稿を呼びかけ、掲載することで、NGO大学の学びとはなにかをふりかえる。



第1章 NGO大学とは？ 全体テーマ/キャッチフレーズの変遷から考える

1. NGO大学は当初、何を目指したのか

30年続いたNGO大学のコンセプトは、第8期以降、ほぼ方向性が確定している。それは「世界に目を向け、自分の足元を見つめる講座」である。第8期以降のNGO大学のねらい(学びの構成)は、「気づき」→「学び・知る」→「行動」のキーワードで表すことができる。

- ①地球が抱えている様々な課題は、それぞれが独立して存在しているのではなく、直接的、間接的、または構造的に関連していることを理解する
- ②それらの課題が他人事ではなく、自分とつながっていることへの気づき **【気づき】**
- ③世界の課題を自分の問題として捉え理解を深める **【学び】**
- ④それらの課題の解決に向けて、自分にできることを考え行動につなげる **【行動】**

しかし、1987年の開講当時を振り返ると、そのねらい・方向性が少し異なっている。開講当初、NGO大学は何を目指したのか。

NGO大学の主催者である関西国際協力協議会は1987年に設立された。それまでNGOはそれぞれの個性的な理念や多様な活動内容のため、ネットワーク組織を作りにくかったが、NGO活動が盛んになってきた1985年、情報交換、課題の共有、共同事業の展開などを目的に、関西のいくつかのNGOが集まり「関西NGO連絡会」が発足した。その後、さらにNGOの運動を協力して発展させようと、関西の11のNGOが集まって1987年6月に「関西国際協力協議会」に発展。1994年には「関西NGO協議会」と改称、2003年に特定非営利活動法人として認証された。NGOが相互に協議を深め、途上国における貧困からの解放、社会正義の実現、人間の基本的ニーズを充足させる活動を協力してすすめることを目的とした。当時のNGOの多くが小規模のため、人材面、財政面、福利厚生面、支援活動に関するスキル面などでの問題を抱えており、そうした共通の課題を分かち合い、共に解決への協力をしながらNGO全体の新しい方向性、展望を拓くことが、関西国際協力協議会が設立された当初の課題であった。

こうした背景のもと、協議会が設立された3ヶ月後に第1期関西NGO大学が開講されている。以下に第1期関西NGO大学のパンフレットにある「NGO大学のご案内」という設立の趣旨が記載された文章を引用する。



(「1987年度 関西NGO大学～民間国際協力団体スタッフ養成講座～」パンフレットから引用)

【関西NGO大学のご案内】

日本の政府開発援助が40億ドル(約1兆円)を超え、フランスを抜いて名実共に米国に次ぐ第2位の援助供与国となりました。しかし、そろそろ政府の大型規模「カネとモノ」の援助だけでなく、きめの細かい「人と人との交流」を大切にするNGO(非営利・非政府組織)の働きが重要視されつつあります。事実日本の海外協力を携わるNGOは法人・任意団体を合わせ約200～230団体と言われてはいますが、事務局を置いて継続的に活動している団体は40～50団体と推定されています。関西では20団体を超えるまでになっています。



その状況を踏まえ、ここ数年来、関西NGO連絡会を行ってきています。そこでの交流を通じて、開発協力に携わるNGOの相互の情報交換や啓発を行い、NGO間の「連帯」や協力を追求しようという動きが生まれ

【N大コラム】「関西NGO協議会について」

高橋美和子(特定非営利活動法人 関西NGO協議会事務局長)

関西NGO協議会は、人道的動機に基づき、市民のイニシアティブにより設立され、かつ民主的に運営されている非営利の市民組織として設立された国際協力分野のネットワークNGOです。開発・人権・環境などの分野における国際協力活動を目的とするNGO間の協力関係を促進し、これらの団体の健全な発展に寄与するとともに世界平和に貢献することをミッションとして活動しています。

さて、その組織としての起源は古く、1985年に設立された「関西NGO連絡会」まで遡ることになります。当時、従来からつながりのあった関西のNGO関係者が集まり、「関西NGO連絡会」として学習会や交流会を重ねていました。しかしながら一歩進んだ積極的かつ実務的なネットワーク団体を発足しようとする機運が徐々に高まっています。その過程には個々のNGOの活動が充実・発展していくことで、当時ODAが抱えていた問題に対して、NGOの立場から主体的にかかわろうとする意識の変化、また全国でも同じように設立が進んでいた各地域のネットワークNGOとの実務的な連携の必要性などが背景にありました。

1987年には、NGO同士が、日本や世界のNGOと連携を強め、NGO同士のネットワークを形成し連帯することで、NGOの活動がより充実し発展することを目的としたネットワークNGOとして「関西国際協力協議会」が発足されました。また、時を同じくして、NGO組織の運営方法やスタッフの育成の需要を見越して、日本で初めて「民間国際協力団体のスタッフ養成講座」としてNGO大学第1期が開講されました。その後、関西NGO協議会は1994年9月には現在の名称に変更し、2003年には特定非営利活動法人格を取得、関西のネットワークNGOとして現在に至ります。その間、NGO大学では、時宜にかなったテーマを市民の視点で掘り起こしながら、学びの場を提供し、多くのNGOスタッフを輩出しただけでなく、思いを行動に移す市民を育ててきました。そうした市民に支えられながら関西NGO協議会が市民社会組織として発展してきましたことは言うまでもありません。

現在、関西NGO協議会では、ネットワーキング、政策提言活動、啓発活動、人材育成活動の4つの柱からなる活動を通じて、関西を中心とする多くのNGOやCSO、そして、NGO活動を支援するODAや民間の助成機関、教育機関、企業の方々とつながりを大切に、関西から国際協力、そしてSDGsの推進と達成に向けて事業を展開しています。そしてそれらのあらゆる活動のすべてを支えているのは、市民の“思い”であり市民の“参加”です。NGOの国際協力活動の主体は、一人ひとりの市民にあります。関西NGO協議会は、いままでも、そしてこれからも私たち市民の意思を直接に受けて行動するNGOであり、共に生きていくための地球市民社会を創り出すことが共通の願いです。



2. 第1期の講座内容～NGOスタッフ養成講座～

「民間国際協力団体スタッフ養成講座」としてスタートしたNGO大学。具体的にはどのような講座内容だったのか。第1期(1987年)の講座内容を表にまとめた。講座スタイルは1泊2日、年6回開催。このスタイルは30年を通して基本的に同じである。

【第1期関西NGO大学講座一覧】(講師の肩書は当時のもの)

回	期間	テーマ研修 / 講師・ゲスト(※)	実務研修
1	9/22～9/23	NGOと地域開発 / 村上公彦(アジア協会アジア友の会事務局長)	・会議運営 ・スタディツアーの運営
2	10/24～10/25	第三世界の貧困 / 津田守(大阪外国語大学助教授) 第三世界と貧困 / 草地賢一(PHD 協会総主事)	・機関紙の編集 ・プログラム・運動の組織化
3	11/7～11/8	開発と環境 / 池住義憲(アジア保健研修所主任主事) / 岸根卓郎(京都大学教授)	・資料収集・分析 ・ファイリング
4	1/14～1/15	難民と女性 / 小野了代(カンボジア難民救援会代表)	・英和文コレスポネンス ・渉外 ・接遇
5	2/10～2/11	アジアにおける差別と人権 / 李清一(在日韓国基督教会館幹事)	・募金 ・メンバーシップキャンペーン
6	3/12～3/13	アジアの民衆と開発 / 平田哲(関西セミナーハウス所長) アジアの工業化と開発 / マノジユ・シュレスタ(京都大学大学院経済学研究科)	・人事と財務 ・ボランティア・トレーニング

(※)第7期以降は「発題者」と表記

上記一覧のように、第1期では大きく内容が「テーマ研修」と「実務研修」に分けられている。NGO大学の設立目的であった「NGOに関わるスタッフや職員の人材育成」という観点から、援助対象地域が抱える課題を学ぶ「テーマ研修」と、実際の現場で求められる実務を学ぶ「実務研修」の2つの切り口で講座が構成された。テーマ研修では「地域開発」や「第三世界の貧困」「環境と開発」などをテーマに大学教授やNGOの現場スタッフなどが講演し、参加者全員で議論し合った。「実務研修」は事務局機能が比較的充実し、職員を一定数抱えている中堅NGOのスタッフが講師となり、会議運営や機関紙編集、人事・財務といった事務局としての基本的なスキルや、スタディツアーの運営や、募金、会員組織、ボランティア育成など、NGOが活動していく上で必要な知識を学んだ。

このように、NGO大学のスタートである第1期の講座は、まさに国際協力NGOのスタッフ養成講座として実施された。当初、定員 30 名程度を予定していたが、予想外に反響が大きく 50 名近くの“入学者”があった。

3. 第2期～7期の講座の変化～スタッフ養成講座から第三世界理解講座へ～

NGOのスタッフ養成講座としてスタートしたNGO大学であるが、1980年後半、NGOの数そのものはそれほど多くなかった。関西国際協力協議会の加盟団体を見てみると、設立年の1987年は11団体、以降1988年は14、1989年は18、1990年は20という団体数である。このうち多くのNGOは小規模で、経済的に十分な数の専従職員を雇うことが難しく、職員が1～3名という団体が多かった。中には常勤職員を雇うことが難しいため、週1～3日の非専従職員を1名置いている、というNGOもある。さらには常勤、有給の職員を持たず、ボランティアベースで運営しているNGOも存在した。つまり1980年代後半、関西のNGO業界では、有給・常勤の職員

はそれほど多くなかったのである。「スタッフ養成講座」として始まったNGO大学であるが、このような背景から、ターゲットとしているNGOスタッフの参加は先細っていくことが予想された。実際、年を追うごとにNGOスタッフの受講者は減少していく。

そこで第2期、第3期頃から受講者の対象を広げていくことになる。将来、NGOのみならず、国連やJICA(国際協力機構)などの国際機関で活動したいという人も含めることにした。また援助や国際関係について研究に取り組んでいる学生や研究者にも参加を呼びかけた。さらに途上国が抱える課題や国際協力に関心のある一般の人にも対象を広げた。

一般の人とNGOの実務者とでは、求める内容が異なるため、必然的に講座内容も変化していく。NGOスタッフに求められる実務的な内容よりも、NGOが取り組んでいる援助対象地域の問題やその背景などの「課題」を知り、学び、その解決について考える内容が増えていった。参加者もNGOスタッフよりも市民、学生、NGOで活動するボランティアなどの立場の人が増えていく。それに伴い、募集のパンフレットに掲載されるキャッチフレーズも変化していった。NGO大学がどのように変化していったのか、キャッチフレーズを開催年ごとに見ていくとわかりやすい。以下、NGO大学が採用してきた30年間のキャッチフレーズおよび受講対象者の変遷を表にした。

【関西NGO大学の「キャッチフレーズ」の変遷】

開催期	年度	キャッチフレーズ	ターゲット(受講対象者)
1	1987	民間国際協力団体スタッフ養成講座	NGOスタッフ・関係者
2	1988	民間国際協力団体スタッフ養成講座	NGOスタッフ、ボランティア 将来NGOで働きたい人
3	1989	民間国際協力団体スタッフ養成講座	第三世界の問題に関心のある方
4～8	1990 ～1994	第三世界理解講座	第三世界の問題に関心のある方 (初めて参加される方、全回参加される方を優先)
9～17	1995 ～2003	国際理解・国際協力入門講座	国際理解、国際協力に関心のある方 (初めて、全回、1泊2日の参加が可能な方優先)
18～26	2004 ～2012	世界に目を向け、 自分の足元を見つめる講座	国際理解・国際協力やNGOに関心のある方。 年齢制限なし。(全回、1泊2日参加優先)
27～ 28	2013 ～2016	世界の今を知り、これからを考え、 行動につなげる講座	国際理解・国際協力やNGOに関心のある方。 年齢制限なし。(全回、1泊2日参加優先)

第1～2期の「スタッフ養成講座」から、3期以降は「第三世界」の課題を取り上げる方向に変化していく。講座内容にも「貧困」や「開発」「環境」「人権」「国際社会」といったNGOが取り組むべき課題が取り上げられるようになった。第4期から第8期まではストレートに「第三世界理解講座」となっている。第5期の講座パンフを見てみると「少数民族」や「難民」「環境問題」「援助を問う」といった、より具体的な課題が取り上げられている。



【第5期関西NGO大学パンフレット(一部抜粋)】

◆スケジュール・内容・会場

回	日程	テーマ	講師	内容	場所
1	9/28(土) 29(日)	第三世界の豊かさ	長峯 晴夫 草地 賢一 村上 公彦 石田 進	本当に豊かなのは日本で、貧しいのは第三世界の人々なのだろうか。私たちの基本的な考え方を問い直し、自分と他者とのつながりを考える足掛かりとしたい。	服部緑地ユースホステル (大阪・豊中市)
2	10/19(土) 20(日)	第三世界と自己発見	池住 義憲	第三世界の貧困の原因を構造的にとらえ、その構造の中で日本、また自らがどのように関わっているのかを問い直し、発見していく作業を行なう。	服部緑地ユースホステル (大阪・豊中市)
3	11/9(土) 10(日)	少数民族と人権	蔵田 雅彦 松野 明久	冷戦構造の崩壊後、世界の至る所で顕在化し始めた少数民族問題。彼らの置かれている状況を理解し、日本国内に潜在する被差別問題にも目を向ける。	神戸学生・青年センター (神戸・灘区)
4	11/30(土) 12/1(日)	難民と開発	山下 政一 アジア学院 (3名)	内戦や政治紛争、不安定な経済状況により生み出された難民。自国の保護を望めない苦難の状況を知り、援助のあり方を学び、開発との関わりを考える。	YMCA六甲 研修センター (神戸・六甲山)
5	1/15(水) <公開講座>	開発と環境問題	宇井 純 古賀 賢次 杉野 二郎	歴史の僅か一瞬の間に人間は地球を危機的な状況にまで悪化させてしまった。地球的視野から環境問題が他の様々な問題とつながりを持つことを学び我々の対応を探る。	大阪国際交流センター (大阪・上本町)
6	2/15(土) 16(日)	援助を問う	松井やより 若狭 恵一 国際ボランティア 貯金推進室	ODAに対する批判が具体的事例となって現われる一方、政府による援助のあり方も徐々に変化を見せている。誰の為の援助なのか。NGOの援助のあり方を考える。	関西セミナーハウス (京都・左京区)

◆講師・パネリスト (順不同)

長峯 晴夫 (名古屋大学教授)	古賀 賢次 (松下電器産業労働組合)
池住 義憲 (アジア保健研修所)	杉野 二郎 (サヘルの会代表)
蔵田 雅彦 (桃山学院大学講師・アムネスティーインターナショナル)	草地 賢一 (PHD協会総理事)
松野 明久 (大阪外国語大学助教授・東チモール独立に連帯する会)	村上 公彦 (アジア協会アジア友の会事務局長)
山下 政一 (世界教会協議会(WCC)カンボジアプログラム代表)	石田 進 (ネパール教育協会代表)
宇井 純 (沖縄大学教授)	平田 哲 (関西セミナーハウス所長)
松井やより (朝日新聞論説委員)	若狭 恵一 (外務省広報課)
アジア学院より研修生3名	国際ボランティア貯金推進室 (郵政省)

また、受講対象者を比較してみると、同じくNGO大学がどのように変化していったのかがわかる。第1期、第2期の頃はスタッフ養成講座として位置づけられていたこともあり、対象者もNGOスタッフや関係者であるが、第2期以降から「将来NGOで働きたい人」が加えられ、さらに第3期以降は「第三世界に関心のある方」と一般に門戸を広げている。また第4期あたりから受講者が増えたため、「初めての参加者」「全6回参加できる人」を優先的に受け付けるようになった。

4. 第7期以降の変化～課題理解から「私とのつながり」「足元を見つめ直す」へ～

初期のNGO大学が目指した「第三世界理解講座」。その方向性が第7期あたりから変化してくる。第7期の募集パンフレットに記載された「全体テーマ」は、「国際社会から問われている私」。第8期の全体テーマは「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」。さらに第10期は「生活に根ざした開発と協力」とある。

ただ、これらの全体テーマと同様に、それまでの第2期から6期までの間も、課題と自分とのつながりについて構造的に考える回は、必ず1回は設けられていた。「第三世界と自己発見」というテーマの回で、講師(発題者)は、すべてアジア保健研修所(当時)の池住義憲氏であった。第5期の募集パンフレットの「第三世界と自己発見」の回の「呼びかけ文」は「第三世界の貧困の原因を構造的にとらえ、その構造の中で日本、そして自分がどのように関わっているのかを問い直し、発見していく作業を行う」とされている。

つまり、初期のNGO大学の「課題理解」に向かっていたベクトルが、第7期以降は明確に「私とのつながり」「足元を見つめ直す」に向けられるというように転換したと言える。「第三世界」が抱える問題はその地域の問題である(私たちの暮らしとは関係がない)という捉え方を否定し、地球が抱える問題は相互に関連していて、そのつながりの中に私たちも存在していること、そしてその解決のために自らの生き方を問い直すという方向性が7期以降に顕著になってきたのである。

この明確な方向性の転換は、イギリスへの留学から帰国したのち、NGO大学の校長となった藤野達也さんの影響が大きい。詳しくは、長く副校長を務めた浜本裕子さんへのインタビューをご覧ください。

第9期(1995年)には「国際理解・国際協力入門講座」となり、このキャッチフレーズは第17期(2003年)まで使用されている。講座内容もこのあたりから、課題理解のみならず、「国際協力と毎日の生活」といった、国際協力や世界の開発問題が私たちの足元の生活とつながっているという視点を持つようになった。



8期以降にしばしば登場する「経済」「情報・メディア」「平和」「歴史」「政治」「グローバリゼーション」といった講座テーマは、NGO大学が国際協力をどう捉えてきたかを特徴づけるキーワードだと言える。(※講座テーマに関しては資料「NGO大学30年の講座一覧」を参照)

さらに1999年以降は、「世界につながる私の行動」という第13期の全体テーマにも見られるように、課題解決のためには私たち一人ひとりの行動が大切であるという視点が重要視されるようになった(第13~30期)。第27期以降のキャッチフレーズは「世界の今を知り、これからを考え、行動につなげる講座」となり、課題解決のための行動により重きを置くようになった。ちなみに最も長く使われたキャッチフレーズは「世界に目を向け、自分の足元を見つめる講座」で第18~26期(2004~2012年)まで使われた。

5. NGO大学の目的

すでに述べたように、NGOのスタッフ養成講座としてスタートしたNGO大学であるが、次第に対象をNGOだけではなく市民にも広げ、内容も第8期以降、市民による国際協力活動のあり方を模索する講座へと変化して行き、その方向性や目的も固まっていく。第25期(2011年度)の実施計画書に記載されているNGO大学の目的を以下に紹介する。

【第25期関西NGO大学 目的】

日本のNGOは1980年代後半から数多く組織され、取り組むべき課題も貧困、人権、環境、平和など多岐にわたっている。また活動のフィールドも世界各地に広がり、活動内容も個々のプロジェクトから政策提言まで幅広く展開している。しかし近年、グローバル化が加速していく中で、市民による国際協力活動も新たな在りようが求められている。以上の問題意識のもと、本講座においては、下記のような事項を目指して開講する。

- 市民による国際協力活動の主体は一人ひとりにあるとの認識のもと、地球市民として取り組むスタイルや担うべき課題は、多種多様に存在することに気づき、その中において各自が果たすべき役割について考え、判断できる人材の育成を目的とする。
- NGOとは何かを理解し、国内外に起こる多くの問題を構造的にとらえる視点を養うためのプログラムづくりを行う。
- 国内外を問わず、社会正義の実現のために志を同じくする人々とのネットワークの形成を目指す。

6. NGO大学の実施概要

NGO大学の実施・運営体制、スケジュール、募集要項など実施の概要を、第23期の講座の募集パンフレットから抜粋する。

【第23期関西NGO大学(2009年度)の募集パンフレットから抜粋】

主 催	特定非営利活動法人 関西NGO協議会
企画・運営	関西NGO大学運営委員会
講座日程	9月から2月にかけて、毎月1回、全6回の開催 土曜日 19:00～日曜日 15:00(1泊2日)
対 象	国際理解・国際協力に関心のある方ならどなたでも。年齢制限はありません。
定 員	50名 ※全6回、1泊2日の全日程に参加できる方を優先します。 ※各回ごとの参加も可能です。
会 場	小林聖心女子学院ロザリオヒル(兵庫県宝塚市)
参加費	以下の①と②が必要です。 ① 受講料 各回 6,000 円/一括前納割引 30,000 円(全 6 回分) ② 施設利用・宿泊料 各回 5,500 円(宿泊、朝・昼食付き)
タイム テーブル	【1日目】 18:30～19:00 受付(夕食を済ませて集合) 19:00～21:30 セッション1 21:30～ 交流会(自由参加)、入浴、就寝 【2日目】 8:00～9:00 朝食 9:00～11:30 セッション2 11:30～12:30 昼食 12:30～15:00 セッション3
その他	託児および介助が必要な方は、事務局までご相談ください

1泊2日(土曜の午後に始まり、日曜の午後に解散)、年6回の開催、という講座日程はNGO大学の30年間にわたって引き継がれた。(数回は日帰り講座が実施されたこともあった) 基本的に全6回、1泊2日の全日程に参加できる方を優先していたが、実際は途中から参加する受講生や部分参加者も多かった。会場については、初期の頃は大阪、神戸、京都、奈良など、毎回違う場所で開催していた。これは関西各地で開催することで多くの人が参加しやすくし、受講者の裾野を広げようというねらいがあったと思われる。しかし事務局の負担軽減や費用面、使い勝手(深夜まで使える、交通の便がいい、台所が使える、機材が整っている)などの点から、第21期(2007年)からは宝塚市の会場に固定された。「交流会」「託児・介助」については後述する。

【N大コラム】「NGO大学の開催場所」

佐久間量子(関西NGO大学運営委員)

NGO大学は、第21期(2007年)から、小林聖心女子学院(兵庫県宝塚市)にあるマイヤーホールという教育施設で行いました。それ以前は、六甲 YMCA、神戸学生青年センター、長居ユースホステル、関西セミナーハウス(京都)、カトリック野外礼拝センター(奈良)、その他企業の研修施設など、その都度別の会場を利用していました。会場近辺の雰囲気を味わいながら往復するのも楽しかったのですが、開催場所を固定することで、運営側としても施設内の備品や建物の様子がわかった場所で行うことで手間が省け、安心感がありました。

阪急今津線小林(おばやし)駅の西口を出て坂を上り、学院正門とは反対側の坂をさらに進むと白い建物が見えてきます。街灯が少なかったため、11、12月頃の日の短い冬の夜、怖い思いをして会場に向かった参加者も少なくなかったのではないのでしょうか。

施設には講座を運営するための十分なスペースがありました。天気の良いときは、建物の前の広い芝生でグループワークの話し合いを行い、車座でお弁当をいただきました。手入りの行き届いたキッチンには数十人分の食事が調理できる設備が整っています。おかげで学びがより豊かなものになり、旨味が加わりました。

この環境を私たちが使用するに至ったのは、第3期の修了生でその後、運営委員だった和田みのりさんの働きかけがありました。みのりさんは戦前の国民学校の1期生。4年生の時に、ご実家のある東京から静岡と青森に学童疎開されました。静岡では建物がぺちゃんこになるくらいの地震があって、「みんな無事だったけれどそれさえも軍事機密で知らせられないような時代よ」。東京に戻ると家も学校もすべて焼けていて、兵舎の一部を使っただけの学校生活再開。食糧がなくお米も食べられなくて本当にひどい思いをされたそうです。

湾岸戦争の時、キリスト教会関係者と一緒に支援物資を戦争で被災した人たちに届けるツアーに参加してヨルダンを訪問。ご自身が子どものころ経験したのと同じように、毎日の食事が十分食べられない状況を見たそうです。NGO大学のことは新聞の告知記事で知って参加され、「その後、どっぴりはまっちゃったわよ〜」。おしゃべりしながらお聞きしたお話ですから、みのりさんストーリーは少し事実と異なるかもしれません。

第24期のテーマは「力を持つ人、奪われる人」。発題者は小柳伸顕さん(釜ヶ崎キリスト教協友会)。そ



の著書『低きに立つ神』の“釜ヶ崎とキリスト教”の中で、NGO大学がお借りしていた小林聖心女子学院の初代校長であるマザー・マイヤーがフランスの愛徳姉妹会に要請して1993年に3名のシスターが来日し、釜ヶ崎でさまざまな社会福祉活動を行ったことが紹介されています。私たちは学院関係者ではありませんが、そのことを小林聖心女子学院のマイヤーホールで知るというのも少なからずご縁を感じた瞬間でした。

7. 講座内容～第23期関西NGO大学の場合～

【第23期関西NGO大学講座一覧(2009年度)】(発題者の肩書は当時のもの)

- <キャッチフレーズ> 世界に目を向け、自分の足元を見つめる講座
 <第23期テーマ> 続けること、変えること ～世界とよくつながるために、私ができること～
 <テーマ文> 持続可能な社会が求められています。でも、なにが続くことが望ましいのでしょうか。Changeが叫ばれています。でも、なにをどう変えればいいのか。流れに踊らされず行動するには、知り、考える必要があります。そのための6回の出会いが、ここにあります。

回	期間	テーマ / 発題者(※)	呼びかけ文
1	2009年 9/26～9/27	ようこそNGO大学へ ～まずは知っておきたい国際協力のこと～ 中田豊一さん (参加型開発研究所代表、シャプラニール ＝市民による海外協力の会代表理事) 関西NGO協議会加盟団体より (AM ネット、PHD 協会、JIPPO のスタッフ)	なにかしたい、と考えている私。でも、あるべき国際協力がどんなもの??国際協力とはなにか、NGOとはなにか、またどんな関わり方があるのかを、現場で活動している人とともに考えます。
2	10/17～ 10/18	カネは天下のまわりもの?! ホンマに? ～いまこそ学ぼう世界の経済～ 石川康宏さん (神戸女学院大学教授)	100年に一度といわれる経済危機。世界同時不況…。私たちの暮らしもその影響を受け、国内外ではさらに格差が広がっています。世界経済の現状としくみを知り、今後のゆくえ、新たな可能性について考えます。
3	11/14～ 11/15	流す人、流される人 ～情報を読み解く力が社会を変える～ 野中章弘さん (アジアプレス・インターナショナル代表、 立教大学大学院教授)	世の中にあふれている情報。それらの情報に私たちは少なからず流されています。誰がどのような目的で流しているのか、情報を発信する側の意図を読み解き、メディアとのよりよいつきあい方を考えます。
4	12/19～ 12/20	とつてもええこと?“エコ”活動 ～エコ活動の表と裏～ 田中優さん (未来バンク事業組合理事長、 日本国際ボランティアセンター理事)	エコ替え、エコポイント、エコグッズ、エコカー…。ちまたではエコが大流行。でもその名のもとに、私たちは過剰にモノを消費していませんか?表面的なエコではなく、その背後のしくみを知り、私たちがどうかかわるかを考えます。

5	2010年 1/16～1/17	いつでも・どこからでも・はじめられるよ ～多様な実践に学ぶ～ 藤村靖之さん (発明家、非電化工房・発明起業塾主宰) 荒木宏之さん (クロスロードカフェ店主、 伊丹まちづくり会議事務局) 能勢加奈子さん(株式会社フェリシモ) 下村俊彦さん(関西よつ葉連絡会)	社会にはたらきかける方法はたくさんあります。個人で、仲間と、学校で、職場で、地域で……。いろいろな立場で活動している人のお話をヒントに、あなただができることを見つけませんか？きっと社会を変える力になるはず！
6	2/20～2/21	私の学びを行動へ ～アクションプラン発表～ 発題者：参加者グループ ゲスト：関西NGO大学修了生	NGO大学での半年間、さまざまな課題と自分とのつながりに気づき、ともに考え行動する仲間も得たはず。よりよい社会をつくるために、意思を持ってあなたの一步を踏み出しましょう！

※第4回以降、参加者同士でグループを作り、課題への取り組みを考え、第6回に発表します。

※講義だけでなく、ワークショップやディスカッションなどの参加型プログラムを取り入れてすすめます。

8. 講座の特徴・ポイント

募集パンフレットに記載されている「関西NGO大学とは」からその特徴を読み解くことができる。

●参加者主体の講座です

各回のプログラムは講義だけでなく、ワークショップ形式の参加型プログラムを取り入れて進めます。また、参加者同士でグループを作って課題への取り組みを考える「グループワーク」を取り入れています。

●歴史のある講座です

1987年以降毎年実施し、今年で23回目を迎えます。修了生からはNGOや国際機関、政府機関の職員になったり、大学・大学院で市民活動や国際問題を研究する人などを多く輩出しています。

●NGOの担い手を育てます

国際社会が抱える課題に取り組むNGO(非政府組織)の活動に関わる担い手を育てます。講座には、関西地域で活動するNGO/NPOのメンバーが様々な形で参加します。

●じっくり学びます

1泊2日×全6回の講座では、多様な角度から世界の課題に触れ、身近にひきつけて考えます。「気づき」「学び」「行動」という3つのプロセスを踏まえて、講座内容を構成しています。

NGO大学では、各回の講師・ゲストについて、参加者への気づきをうながし、参加者自身が学んだことをどのように生かしていくのかを考えるための問題提起を依頼する、という視点から「発題者」と呼んでいる。

これまでの修了生からは、NGOや国連や国際機関のスタッフになったり、大学・大学院レベルで市民活動や国際問題に取り組む人材を多く排出している。そうした修了生を発題者として講座に招聘することにより、多様な形で国際協力活動に取り組む人から、その取り組みや体験談を直接聞くことのできる機会を作っている。

また、講座内容では一方的に発題者から講義を聞くだけでなく、ロールプレイ、シミュレーション、ワークショップ、グループディスカッションなどを取り入れ、参加者のより深い気づきや学びを促すことを重視し、実践した。

「グループワーク」とは、自らの社会に対する関心を整理し、同じ関心を有する参加者どうしでグループを作って、課題への取り組みを考えるプログラムである。グループワークでは、自分の考えを他者に伝えることや、違う意見との合意形成の困難性に気づき、それを乗り越えて、解決の方法を探ること、他者と協力することによって一人ではできない発想や取り組みが生まれる体験をすることを重視した。

募集パンフレットに記載されている参加者の感想や、「こんな点をおすすめします！」を読むと、NGO大学が目指しているものや講座の雰囲気が伝わってくる。

<こんな点をおすすめします！>

- 世界の動きや仕組みを知ることができる。
- NGOや国際協力のことをじっくり学べる。
- ワークショップ等で主体的に学び、1泊2日の時間の中で議論を深められる。
- 多様な視点や意見を聞ける。
- 何かをはじめめるキッカケを得られる。
- 開かれた場であり、誰でも受け入れる雰囲気がある。
- いろいろな人と出会え、さまざまな背景を持った人とネットワークができる。

<参加者の感想>

- たくさんの出会い、これが一番です！
- 身近なことが国際問題や国際協力につながっていることに気づきました。
- 多角的なものの見方、考え方を知り、視野が広がった。
- 何かしたい、それをカタチにしてくれる仲間ができました。
- さまざまな人たちが集まると、たくさんの発想が生まれることがわかった。
- 夜の交流会は最高！泊まりなのでお酒も交えて深い話ことができました！



9. NGO大学30年間の講座一覧

NGO大学が30年間の講座を通して、何を学び、何を考え、何を伝えようとしてきたのか。まずは30年間の講座の一覧を提示してみたい。

【第1～30期の講座一覧 発題者一覧、全体テーマ、各回のテーマ、発題者・ゲスト】（肩書・所属は当時のもの）

	関西NGO大学 30年間の流れ(1987～2017年) ～世界の今を知り、これからを考え、行動につなげる講座～	
期(実施年度)・全体テーマ	各回テーマ	発題者・ゲスト
1期 (1987年度) 「民間国際協力団体 スタッフ養成講座」 ディーン： 加盟団体スタッフ 持ち回り	① 地域開発 (会議運営、スタディツアーの運営) ② 第三世界の貧困 (機関紙編集、プログラム・運動の組織化) ③ 開発と環境 (資料収集、文献ファイリング) ④ 難民と女性 (英和文コレスポネンス、渉外、接遇) ⑤ 差別と人権 (募金、メンバーシップキャンペーン) ⑥ 民衆と開発 (ボランティアトレーニング、人事財務)	村上公彦 (アジア協会アジア友の会) 藤野達也 (PHD 協会)、南仁 (神戸YMCA) 津田守 (大阪外国語大学)、草地賢一 (PHD 協会) 市川徹 (アジア協会アジア友の会) 福地邦子 (大阪YWCA) 岸根卓郎 (京都大学) 石田進 (ネパール教育協力会) 池住義憲 (アジア保健研修財団-AHI) 小野修 (同志社大)、小野了代 (カンボジア難民救援会) 斎藤千宏 (大阪YMCA)、高田茂 李清一 (在日韓国基督教会館) 浜田進士 (ユニセフ協会) マノジュ・シュレスタ(京都大学大学院生) 平田哲(関西セミナーハウス)、真嶋克成 (大阪YMCA) 降旗高司郎 (大阪国際交流協会)
2期 (1988年度) 「第三世界の 民衆と開発」 ディーン： 加盟団体スタッフ 持ち回り	① ODAとNGO ～国際協力論、ボランティア論～ ② 第三世界と自己発見 ③ 在日外国人留学生との交流 ④ アジアの植民地支配と民族独立運動 ⑤ 貧困と人権 ⑥ 民衆と開発	松井やより (ジャーナリスト・朝日新聞社) 平田哲 (関西NGO協議会) 池住義憲 (アジア保健研修財団-AHI) 草地賢一 (PHD 協会) 高見敏弘 (アジア学院学長) 斎藤千宏 (シャプラニール=市民による海外協力の会) 村井吉敬 (上智大学教授) 山口光朔 (神戸女学院大学学長) 塩沢美代子 (アジア女子労働交流センター所長) 小柳伸顕 (関西労働者伝道委員会) 塩月賢太郎 (明治学院大学教授)
3期 (1989年度) 「第三世界の貧困と 日本の貧困」 ディーン： 草地賢一	① 第三世界と自己発見 ② 「食」と「農」からみえるもの ③ なぜ今、外国人労働者問題なのか ④ アジアの女性と解放 ⑤ 援助・国際協力を考える ⑥ NGOの現状と今後の方向	池住義憲 (アジア保健研修所) 保田茂 (神戸大学)、アジア学院研修生 小柳伸顕 (関西労働者伝道委員会) 水野阿修羅、リサ・ゴー (フィリピン問題資料センター) 松田瑞穂 (日本キリスト教婦人矯風会、女性の家HELP) ワニラ・ワナビラ 村井吉敬 (上智大学教授) 八木沢克昌 (曹洞宗ボランティア会) 小野了代、草地賢一、黒住格 (アジア眼科医療協力会) 石田進、小坂雄二 (バヌアツに医療を送る会)
4期 (1990年度) 「第三世界の人々と 私の生き方」	① 第三世界の豊かさと貧しさ ～私たちの日常生活とのかかわりの中で～ ② 自己発見とライフスタイル① ③ 市民が担う新しいネットワーキング ～あなたが今からできること～	長峯晴夫 (名古屋大学教授) 池住義憲 (アジア保健研修所) PHD協会研修生 高見敏弘 (アジア学院)、FIWC、日本リザルツ、KIDS、JEE ネパール教育協力会、山本忠義 (海外教育協力隊)

ディーン： 村上公彦	④ 環境とライフスタイル②	宇井純（沖縄大学教授） 関西リサイクル市民の会、岩田久人
	⑤ 新しい隣人 ～外国人労働者と共に生きる～	村田稔（バハイニマリア） 子どもの里
	⑥ 援助を考える ～ODAとNGO～	村上公彦（アジア協会アジア友の会） PHD 協会、海外教育協力隊
5期 （1991年度） 「第三世界理解講座」 ディーン： 草地賢一 ※後援： 外務省	① 第三世界の豊かさ	長峯晴夫（名古屋大学）、草地賢一（PHD 協会）、外務省 村上公彦（アジア協会）、石田進（ネパール教育協力会）
	② 第三世界と自己発見	池住義憲（アジア保健研修所）
	③ 少数民族と人権	蔵田雅彦（桃山学院大学講師、アムネスティ） 松野明久（大阪外国語大学助教授、東チモールの独立に連帯する会）
	④ 難民と開発	山下政一（世界キリスト教協議会カンボジアプログラム代表）、アジア学院研修生
	⑤ 開発と環境問題（公開講座）	馬橋憲男（国連広報センター）、杉野二郎（サヘルの会） 福井勝義（国立民族学博物館）
	⑥ 援助を問う	松井やより（朝日新聞社）、山本忠義（海外教育協力隊） 外務省、郵政省
6期 （1992年度） 「第三世界理解講座」 ディーン： 山下政一 ※後援： 外務省 ※庭野平和財団助成金事業	① 第三世界の豊かさと言しさ	中村尚司（龍谷大学教授）
	② 第三世界と自己発見	池住義憲（アジア保健研修所）
	③ 開発と人権	山下明子（日本キリスト教協議会宗教研究所） 粟野真造（アムネスティ日本支部大阪事務所代表）
	④ 第三世界と農	菊地創（アジア学院） アジア学院研修生
	⑤ 開発と環境（公開講座）	高木善之（地球村）、植田和弘（京都大学） 守恭助（三菱商事環境室室長）
	⑥ NGOを問う	神田浩史（ODA調査研究会） 外務省、郵政省
7期 （1993年度） 「国際社会から 問われている私」 ディーン： 山下政一	① 国際社会から問われている私たち ～なぜカンボジアに行ったのか～	山下政一（関西NGO大学ディーン）
	② 国際社会から問われている私たち ～なぜ国際協力をするのか～	平田哲（関西国際協力協議会）、小坂雄二 黒河内繁美（国際子ども権利センター）
	③ 私たちの食べているものは	本野一郎（神戸市西農業協同組合） 横川修（ジャーナリスト）
	④ 先住民族の人権 ～環境問題と精神文化～	上村英明（市民外交センター） 堀越由美子（セイクレッド・ラン日本事務局）
	⑤ 性が売り買いされるわけ ～日本の中の女と男の関係から～	水野阿修羅（アジアの買売春に反対する男たちの会） 松井やより（アジアの女たちの会、ジャーナリスト）
	⑥ 私自身を問う	山下政一（関西NGO大学ディーン）
8期 （1994年度） 「私にとっての地域、 私にとっての開発、 私にとっての行動」 校長： 藤野達也 副校長： 榛木恵子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① そもそもNGOとは・・・	伊藤道雄（NGO活動推進センター） 嶋美（元JVC）、藤野達也（PHD 協会）
	② 私にとっての開発	ポール・シロモニ（インドの人材開発指導者） ベノ・カメオ（PHD 研修生・パプアニューギニア）
	③ 実はこんなにインターナショナル	村井吉敬（上智大学教授） ベノ・カメオ（PHD 研修生・パプアニューギニア）
	④ 市民の声を！ もっと国際協力を	神田浩史（ODA調査研究会） 片山舜平（岡山県加茂川町長） 粟野真造（とよなか国際交流協会）
	⑤ すきやねん ボランティア	早瀬昇（大阪ボランティア協会） 浜田進士（国際子ども権利センター）
	⑥ これからどうする？	関西NGO協議会加盟団体

9期 (1995年度) 「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」 校長：藤野達也 副校長：榛木恵子 ※外務省 NGO事業補助金事業 ※グループワーク始まる	① 私はだあれ？	雨森孝悦（とよなか国際交流協会）
	② 豊かさせて何だろう？	THE REKS BAND（パプアニューギニア） 神田浩史（地域自立発展研究所）
	③ 足元から見直そう	宮内泰介（福井県立大学）
	④ 私にとっての国際協力	辻村方孝（ウータン・森と生活を考える会） 東牧陽子（北河内ボランティアセンター）
	⑤ できることからボランティア	早瀬昇（大阪ボランティア協会）
	⑥ あなたはどうする？	沼尻勉（朝日新聞社） 関西NGO協議会加盟団体 各参加者グループ
10期 (1996年度) 「生活に根ざした開発と協力」 校長：藤野達也 副校長：榛木恵子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① 私はどこにいる？	中村尚司（龍谷大学） 福田紀子（国際理解教育センター）
	② こんなこと、あんなこと、そんなこと	鶴飼誠一（神戸国際協力センター） 林達雄（市民フォーラム 2001） 斎藤千宏、松井淳太郎（大阪ガス）、横川修（朝日新聞）
	③ 多文化・異文化・楽しいやんか！	田村太郎（多文化共生センター） ソルー・アンソニー・スバム（パプアニューギニア）
	④ 私の価値観はどこから・・・	中田豊一（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン） 前島宗甫（関西学院大学教授）、秋田光彦（應典院住職）
	⑤ 消費者(わたし)が世界を変える	暉峻淑子（埼玉大学名誉教授） 堀孝弘（環境市民）
	⑥ あなたの行動が必要です	関西NGO協議会加盟団体 各参加者グループ
11期 (1997年度) 「生活の中にある国際」 校長：藤野達也 副校長：榛木恵子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① わたしたちの世界は困難(こんなん)～くらし発、世界は今～	村井吉敬（上智大学） 浜田進士（国際子ども権利センター）
	② ごっつ一元気なNGOいらっしゃい！	星野昌子（日本国際ボランティアセンター） 鳥居賢二（日本ユニセフ協会）、 西岡良夫（ウータン）、井関永子（地球ボランティア協会）
	③ ときめき アジアンサウンド	Tots Tolentino（フィリピンのサクソ奏者） Romeo Alberto Jorolan（フィリピンのギタリスト・歌手）
	④ 旅は道づれ 世は・・・？	足立照也（阪南大学）、小吹岳志（アジア協会） ディベンドラ・パハリー（ネパール人留学生）
	⑤ 依存と自立のイイ関係	神田浩史（地域自立発展研究所）
	⑥ わたしたちの行動は Do Now? (どんなん)	関西NGO協議会加盟団体 各参加者グループ
12期 (1998年度) 「国際協力と毎日の生活」 校長：藤野達也 副校長：榛木恵子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① 地球を動かすわたしのおカネ～世界経済タネ明かし～	神田浩史（地域自立発展研究所）
	② NGO? なんか ごっつう おもしろそう	中田豊一（元セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン） 本橋栄（シェア）、菊池健（松下電器社会文化部）
	③ ガマンよりマンガ	Vijay N.Seth（インドの風刺漫画家） ありむら潜（漫画家）、JICA研修員 10名
	④ 世界と日本のおいしい? 関係	大野和興（農業ジャーナリスト）
	⑤ 世界と日本のクサイ仲	田中優（市民フォーラム2001）
	⑥ わたしの可能性 未来の財産	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体

13期 (1999年度) 「世界につながる私の行動」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① 世界を動かす はじめの一歩	ポール・シロモニ（インドの人材開発指導者）
	② 誰がすんねんNGO	サング・ペウ、関西NGO協議会加盟団体 機能聡子（シェア＝国際保健協力市民の会）
	③ 「金持ち」の言い訳「貧乏」の理由	田中優（市民フォーラム2001）
	④ 笑いが力に 想いは世界に	林家染語樓（落語家）
	⑤ 平和の担い手は誰？ ～へいわっていいわあ～	安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム）
	⑥ 咲きほころん 旅立ちのとき 未来へと	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体
14期 (2000年度) 「世界が待ってる私の行動」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① 気づこう、学ぼう、踏み出そう ～実はあなたは力持ち～	ジョン・ジョージ（THREAD 代表/インドのNGO）
	② 国際協力まるかじり ～あなたにもできるNGOのススメ～	関西NGO協議会加盟団体
	③ What's 平和？ ～あなたと平和とNGO～	安斎育郎（立命館大学国際平和ミュージアム）
	④ 伝える！伝わる！伝え合う！ ～映像はええぞ～	河瀬直美（映像作家）
	⑤ やってびっくり貿易ゲーム ～知ってるほど世界経済～	神田浩史（AM ネット、ODA連絡会）
	⑥ こだわり極めてNGO ～あなたの行動待ってます～	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体
15期 (2001年度) 「社会をつくるのはわたしです」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※外務省 NGO事業補助金事業	① NGOってなに？	三輪敦子（元国連女性開発基金）
	② ライブ!! 南太平洋 ～音楽・ジャングル・村づくり～	ボンガス・ガンゴ（パプアニューギニアのミュージシャン） ヘルペ・ヨーワ（NGOワーカー）
	③ 知ってるほど世界経済 ～得する側、損する側、あなたはどっち?～	神田浩史（ODA改革ネット、AM ネット）
	④ 歴史に問いかける～過去と現在の対話～	川北稔（大阪大学大学院文学研究科教授）
	⑤ 現場に行こう、活動から学ぼう！	※フィールドワーク （被災地障害者センター、あおぞら財団 尼崎公害、震災・まちのアーカイブ）
	⑥ 学びを糧に飛び出そう！ ～新しい社会をつくっていくのはあなたです～	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体
16期 (2002年度) 「NGOが社会をゆさぶる」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子	① NGOを理解するための基礎知識	雨森孝悦（日本福祉大学経済学部助教授）
	② NGOの理想と現実、可能性と限界	高橋清貴（日本国際ボランティアセンター） 中田豊一（参加型開発研究所） 新津久美子（福島瑞穂国会議員秘書）
	③ 世界を良くするために、 今の常識を疑うことから	ダグラス・ラミス（政治学者）
	④ 一人ではできないことは、集まれば、できる	藤野達也（PHD 協会） 浜本裕子（大阪 YMCA）
	⑤ 足元の活動から、 経験からの学びと元気をもらおう	※フィールドワーク （空堀商店街、在日韓国民主人権協会、 子どもと遊びのネットワーク八尾、釜ヶ崎支援機構）
	⑥ ここで一度まとめ、 そこからそれぞれの道を考えよう	各参加者グループ 関西協議会加盟団体

17期 (2003年度) 「私が社会をよくする一人」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※財団法人俱進会助成事業	① 人が人として生きていくためには？	武者小路公秀 (中部大学教授、反差別国際運動日本委員会理事長)
	② 「国際協力」はホントに役立っている？	カマル・フィヤル(地域開発ファンリテーター/ネパール)
	③ 世界の貧富のからくり ～もうひとつのあり方を考えよう～	田中優(未来バンク事業組合理事長、 日本国際ボランティアセンター理事)
	④ I commitment からじまる ～私自身の問題として動くために～	平山恵(結核研究所フェロー)
	⑤ グローバリゼーションの中の日本、そして私	松尾真(京都精華大学)
	⑥ 「私」が社会を変えていく力	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体
18期 (2004年度) 「私は意思をもって社会とつながりたい」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※庭野平和財団助成事業	① NGOって何？ NGOって必要？	平田哲(アジアボランティアセンター代表) 藤野達也(PHD 協会)
	② これでいいのか！？ 世界の経済・日本の経済	佐久間智子(「環境・持続社会」研究センター)
	③ やり過ぎさないこと、考えつづけること ～政治と私のつながり～	岡田憲治(専修大学法学部助教授)
	④ 流す人、流される人 ～情報に流されない読み解き方～	野中章弘(アジアプレス・インターナショナル代表) 浜本裕子(大阪 YMCA)
	⑤ 「こだわり」が社会を変える	大岩剛一(ナマケモノ倶楽部)、ビック・イシュー日本版、 パタゴニア大阪ストア、應典院寺町倶楽部
	⑥ 未来をつくる 新たな(オルタナティブ)つながり	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体
19期 (2005年度) 「私にとっての国際協力」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子	① そもそも「国際協力」ってなに？	壽賀一仁(日本国際ボランティアセンター)
	② なぜ格差は生まれるのか ～グローバル経済のからくり～	神田浩史(AM ネット) JICA研修員
	③ 出かけてみよう！身近な世界の現場へ ～歩いて、見て、感じる世界と私のつながり～	※フィールドワーク (RINK、コリアンタウン、熱帯木材輸入現場、桶谷石鹸)
	④ いま問い直す「平和」	高橋哲哉(東京大学大学院、NPO前夜共同代表) 浜本裕子(大阪 YMCA)
	⑤ 私のチカラの可能性 ～「想い」を形にするために～	吉田絵美(ザ・ボディショップ)、浅井千夏(大阪 YWCA) 田淵篤(京都自由学校)、宗田勝也(難民ナウ)
	⑥ 私らしい国際協力のはじまり！	各参加者グループ 関西NGO協議会加盟団体
20期 (2006年度) 「もっと私がかかわれば きっと世界はよくなる」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※パナソニック 市民活動支援金 ※20期以降は運営委員による自主運営。	① たいへんやけど、おもしろい!? NGOの真実	関西NGO協議会加盟団体
	② グローバル経済ってなあに？ ～つくられている経済格差～	佐久間智子(「環境・持続社会」研究センター)
	③ 私と「日本という国」の関係！？	清水耕介(龍谷大学国際文化学部准教授)
	④ 伝わらなくちゃ始まらない	J.NAM MC(ラッパ)
	⑤ 日常にある世界へのトビラ	竹本徳子(カタログハウス) 山口節子(生協連合会きりり会長) 松野晴美(住まいと住環境コーディネーター)
	⑥ 私の選択が世界を変える	参加者グループ、関西NGO大学修了生 関西NGO協議会加盟団体

21期 (2007年度) 「世界とよく つながるために 私ができること」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※大阪コミュニティ財団 助成事業 ※パナソニック 市民活動支援金	① ようこそNGO大学へ ～国際協力ことはじめ～	長畑誠(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク代表、 シャブラニール=市民による海外協力の会理事)
	② アナタハ クミコマレテイル ～グローバル経済のからくり～	佐久間智子(「環境・持続社会」研究センター)
	③ 「美しい国」に生まれて ～私の生活と政治の関係～	清水耕介(龍谷大学国際文化学部准教授)
	④ メディアが変える私たち？私たちが変えるメ ディア？～情報を読み解く力が社会を変える	広河隆一(フォトジャーナリスト、DAYS JAPAN 編集長)
	⑤ 「世界を動かすあなたのこだわり ～多様な実践に学ぶ～	坂西卓郎(水俣病センター相思社) 下之坊修子(映像発信てれれ) 代島裕世、中西宣夫(サラヤ株式会社)
	⑥ 「私の思い」をカタチにする ～気づき、学び、そして行動へ～	各参加者グループ 関西NGO大学修了生、関西NGO協議会加盟団体
22期 (2008年度) 「世界につながる 私の足元」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※パナソニック 市民活動支援金	① さあはじめよう！国際協力 ～国際協力・NGO入門～	秦辰也(シャンティ国際ボランティア会理事) 野田沙良(アクセス)、水野順子(アムネスティ)
	② 気がつけばみんな“下流”？ ～格差の構造を読み解く～	栗原康(ATTAC・Japan、G8 サミットを問う連絡会)
	③ 見えていますか？あなたのとなりの外国人 ～「多文化共生」を考える～	田中宏(龍谷大学教授) 朴洋幸(トッカビ子ども会副代表理事)
	④ 食からたどる地球環境 ～越境する食べ物もたらすもの～	大野和興(農業ジャーナリスト) 松平尚也(アジア農民交流センター、AM ネット)
	⑤ 世界を変える多様なとらえかた ～ユニークな実践に学ぶ～	松本哉(素人の乱5号店店主) 赤澤福彦、見島英之(カフェスロー大阪)、 岩田康子(ブルーベリーフィールズ紀伊国屋)
	⑥ あなたの学びを行動へ ～アクションプラン発表～	各参加者グループ 関西NGO大学修了生、関西NGO協議会加盟団体
23期 (2009年度) 「続けること、 変えること」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子	① ようこそNGO大学へ ～まずは知っておきたい国際協力のこと～	中田豊一(参加型開発研究所、シャブラニール) AM ネット、JIPPO、PHD 協会
	② カネは天下のまわりもの？！ほんまに？？ ～いまこそ学ぼう世界の経済～	石川康宏(神戸女学院大学教授)
	③ 流す人、流される人 ～情報を読み解く力が社会を変える～	野中章弘(アジアプレス・インターナショナル代表、 立教大学大学院教授)
	④ とってもええこと？“エコ”活動 ～エコ活動の表と裏～	田中優(未来バンク事業組合理事長、 日本国際ボランティアセンター理事)
	⑤ いつでもどこからでもはじめられるよ ～多様な実践に学ぶ～	藤村靖之(発明家、非電化工房主宰) 荒木宏之(クロスロードカフェ)、能勢加奈子(株式会社フレジ モ)、下村俊彦(関西よつば連絡会)
	⑥ 私の学びを行動へ ～アクションプラン発表～	各参加者グループ 関西NGO大学修了生
24期 (2010年度) 「これでいいの？」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子	① 世界で起きているモンダイと私 ～私の国際協力の見つけ方～	神田浩史 (AM ネット、ぎふ・エコライフ推進プロジェクト実行委員長)
	② なぜ格差は広がるのか ～グローバル経済のからくり～	佐久間智子(アジア太平洋資料センター理事)
	③ 世界の争いを読み解く～原因はひとつ？～	饗場和彦(徳島大学教授)
	④ 力を持つ人・奪われる人～私はどこに？～	小柳伸顕(釜ヶ崎キリスト教協会)
	⑤ こんなやり方もあり？！私のスタイル 見つけよう～多様な実践に学ぶ～	増山麗奈(画家、WAPA、「桃色ゲリラ」代表)、 梶井洋浩、佐藤零郎(NDS 中崎町ドキュメントスペース)、 井上昌哉、小川恭平(くびくびカフェ京都大学時間雇用職 員組合ユニオンエクスター)
	⑥ 私の気づきを行動へ ～つながる・広がる・私たちの“わ”～	各参加者グループ、関西NGO大学修了生 関西NGO協議会加盟団体

25期 (2011年度) 「まわりを変える？ 私が変わる？」 校長：藤野達也 副校長：浜本裕子 ※パナソニック 市民活動支援金	① 変わる？変える！私たちの暮らし～エネルギーを切り口に、いま根本を見直す～	早川光俊（弁護士、CASA 専務理事、PARE事務局長）
	② 私が動く社会がよくなる！ ～市民参加の可能性～	大久保規子（大阪大学大学院教授）
	③ “脱”マスメディア ～流されるな、自分で考えろ～	野中章弘（アジアプレス・インターナショナル代表）
	④ 未来へつながる小さな村の大きな知恵 ～木頭村からの贈り物～	玄番隆行（イコールラボ代表、徳島県旧木頭村在住）
	⑤ 出会い、そして発信へ ～映画『祝の島』の監督から学ぶ～	瀬瀬あや（映画『祝の島』監督）
	⑥ 私たちが社会をつくる担い手だ！	各参加者グループ、関西NGO大学修了生 関西NGO協議会加盟団体
26期 (2012年度) 「ほっとけへん。 わたしの幸せ 地球の未来！」 副校長：浜本裕子 * 以降、校長は関西NGO 協議会代表理事が担当 ※パナソニック 市民活動支援金	① ほっとけへん。 わたしの幸せ、地球の未来！	松本哉（リサイクルショップ「素人の乱」5号店店主）
	② え？食卓のおコメの大半が外国産に？ ～グローバル経済と私たちの未来～	佐久間智子（アジア太平洋資料センター共同代表）
	③ 自治は楽しい♪ ～脱“おまかせ民主主義”～	酒井隆史（大阪府立大学人間社会学部准教授）
	④ 今が日本の分かれ道？！ ～貧困、格差社会からの脱却～	佐高信（評論家、『週刊金曜日』編集委員）
	⑤ NGOとソーシャルビジネス、なにが違うの？ ～社会に参加する様々な選択肢～	加藤徹生（World in Asia 代表理事、経営コンサルタント）
	⑥ スローでシンプルにいこう！ ～たのしく生活して社会を変える♪～	湯川まゆみ（特活 SEIN 代表）、NGO大学修了生 各参加者グループ、関西NGO協議会加盟団体
27期 (2013年度) 「あたりまえを 疑え!!」 副校長：浜本裕子	① あたりまえを疑え！！ ～社会を読み解く力を養う～	谷口真由美 （全日本おばちゃん党代表代行、大阪国際大学准教授）
	② メディアの世界に何が起きている？ ～知るだけがニュースじゃない！～	堀潤（NPO法人8bitnews 代表、ジャーナリスト）
	③ 憲法は誰のもの？ 誰のための改正？ ～暮らしがどうかかわる？～	湯浅誠（社会活動家、反貧困ネットワーク事務局長、 NPO法人自立生活サポートセンター・もやい）
	④ NGO/NPO、 ソーシャルビジネスと私のイイ関係	坂本文武 （立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科特任教授） 森脇祐一（アクセス常務理事、関西NGO協議会副代表）
	⑤ 携帯電話、ポテトチップス、自転車・・・ ～身近な消費が引き起こす“乱開発”～	辻信一（ナマケモノ倶楽部世話人、文化人類学者、 環境運動家、明治学院大学国際学部教授）
	⑥ あなたの学びをどう活かす？ ～Be the Change! 変化の主体はあなた～	武田かおり（NPO法人 AM ネット事務局長） 坂西卓郎（公益財団法人 PHD 協会事務局長） 各参加者グループ
28期 (2014年度) 「なんかヘンだ！を 掘り下げろ！！ ～あたりまえを疑え！～」 副校長：浜本裕子	① なんかヘンだ！を掘り下げろ！！ ～今の生活の疑問を見つめてみませんか？～	西谷文和（フリージャーナリスト）
	② ほっとけない！日本の政治、 私たちがすべきこと。	神田浩史（NPO法人 AM ネット理事、NPO法人泉京・ 垂井副代表理事、西濃環境NPOネットワーク副会長）
	③ ボランティアで社会はよくなる？	村井雅清（NPO法人 CODE 海外災害援助市民センター 理事、被災地NGO協働センター代表）
	④ ニッポンって民主主義の国？ ～沖縄を通して見る日本のカタチ～	屋良朝博 （フリージャーナリスト、元沖縄タイムス論説委員）
	⑤ どうすれば持続可能！？ ～経済成長からの途中下車～	田中優（未来バンク事業組合理事長、ap bank 理事、 NPO法人日本国際ボランティアセンター理事）
	⑥ みんなで‘これから’をつくろう ～おいしいは楽しい♪～	各参加者グループ、関西NGO大学修了生 関西NGO協議会加盟団体

29期 (2015年度) 「スマートに 社会変革」 副校長：浜本裕子	① N大カフェ DJ 議員が語るまちづくり 市政とファッション・カルチャーシーンをつなぐ	森山幸治 (岡山市議会議員、ライブハウス、カフェバー等オーナー)
	② 内田樹 × SEALDs KANSAI ～ぼくらの民主主義を考える～	内田樹 (思想家、神戸女学院大学名誉教授) SEALDs KANSAI
	③ 世界を変える「理想の公式」 ～開発の現場と公平な未来～	佐藤潤一 (国際環境NGOグリーンピース・ジャパン事務局長)
	④ 経済成長は豊かさをもたらす？！ ～アベノミクスの功罪～	浜矩子 (同志社大学大学院ビジネス研究科教授)
	⑤ ヘイト・スピーチを通して考える日本社会	金明秀 (関西学院大学社会学部教授)
	⑥ Ndaicafe スマートに社会変革！ ～食を変えたら未来が見える？～	藤原紗菜 (若手狩猟団体 もみじ狩隊 隊長)
30期 (2016年度) 「学びと行動」 副校長：浜本裕子	① いま、NGOを問う ～国際協力NGOのこれまでとこれから～	谷山博史 (日本国際ボランティアセンター代表理事、JANIC 理事 長)、清家弘久 (日本国際飢餓対策機構常務理事)
	② 「市民による学びの場」の来し方 行く末 ～関西NGO大学リユニオン～	神田浩史 (AM ネット理事、NPO東京・垂井副代表理事) 荒川共生 (ボルネオ保全トラスト・ジャパン理事)

10. NGO大学は何を目指し、何を学んできたのか～各回テーマと発題者の分析～

NGO大学は30年間で、計176回の講座を実施。それらの講座で315名もの発題者(講師)に協力いただいた。176回の講座で取り上げたテーマ、および発題者を振り返り分析することで、NGO大学が何を目指し、何を学んできたのかを総括したい。

以下はNGO大学が30年間で実施した176回の講座で取り組んだテーマを分類したものである。テーマをキーワード化し、それを取り上げた実施年度と回数でまとめ、分析を試みた。

テーマの分類・キーワード	取り上げた回数	実施年度
国際協力・援助・NGO	27	1988～1995、1997～2010、2016
行動	23	1994～2014
経済・グローバル化・格差	19	1996～1998、2000、2001、2003～2010、2012～2015
マイノリティ(社会的弱者)	10	1987～1991、
政治	10	2004、2006、2007、2012～2015
多様な取り組み	8	1996、2004～2010
自己発見	8	1988～1993、1995、2000
環境問題	7	1987、1990～1992、1998、2009、2011
表現(マンガ、落語、音楽、映像)	7	1997～2001、2006、2011
地域(フィールドワーク)	7	1987、1995、2001、2002、2005、2011、2012 ※2001、2002、2005年はフィールドワークを実施
人権・差別	6	1987、1988、1992、2003、2015
食と農	6	1989、1992、1993、1998、2008、2015
南北問題	5	1995、1987、1990、1995、2011、2012
開発	5	1987、1988、1994、1999、2015
平和	5	1999、2000、2002、2005、2010

メディア・情報	5	2004、2007、2009、2011、2013
私と世界のつながり	4	1996、1997、1999、2014
ボランティア	3	1994、1995、2014
多文化共生・多様性	3	1994、1996、2008
市民運動	2	1990、2011
ソーシャルビジネス	2	2012、2013
宗教	1	1996
旅・観光	1	1997
歴史	1	2001
学びの場	1	2016

【最も多く取り上げられたテーマ「国際協力・援助・NGO」】

講座の趣旨や性質上、最も多く取り上げられたテーマが「国際協力・援助・NGO」であった。しかしその切り口やねらい、内容が、その折々の社会状況を反映して変化していった。

NGO大学がスタートした初期の頃、第1～6期(1987～1992年)は、政府開発援助(ODA)の額が1兆円を超え、世界一の援助大国となった日本の国際協力や援助について見直そうという機運が起こる。NGO大学でもそうした社会背景を反映し、カネとモノだけの一方通行的ではない援助・国際交流のあり方を考える講座が企画された。こうした意図が、第3期第5回「援助・国際協力を考える」や第4期第6回講座「援助を考える～ODAとNGO～」、第5期第6回講座「援助を問う」などの講座テーマに反映されている。

一方で資金や人材、経験、組織力などが十分でなかったNGOにも問題は山積していた。第1、2期ではNGOのスキル不足や組織運営を補う実務的な講座が企画された。「会議運営」「スタディツアーの企画」「運動の組織化」「会員管理」「募金活動」など、具体的な内容であった。

また、1989年から外務省が「NGO事業補助金制度」を施行した頃から、ODAとNGOの連携の動きが加速しはじめた。組織的、資金的にも大規模な支援を担うODAや国際機関に対し、NGOの支援活動はODAの手が届きにくい地域、とりわけ厳しい環境に置かれた現場、いわゆる「草の根」レベルで行われることが多い。また活動の多様性や緊急性もNGOの援助の特徴である。そして1990年以降、NGOはODAや国際機関の「補完的」な立場ではなく、国際協力における重要な主体者であると評価されるようになる。NGO大学でもそうした流れの中、ODAとNGOのあり方を模索する講座が企画されている。第2期第1回講座「ODAとNGO～国際協力論、ボランティア論～」、第3期第5回講座「援助・国際協力を考える」、第4期第6回講座「援助を考える～ODAとNGO～」などの講座が実施された。特に第5期第6回講座では「援助を問う」という講座テーマを掲げ、発題者として関西NGO協議会の加盟NGOスタッフに加え、ODAの立場から外務省経済協力局主席事務官、郵政省国際ボランティア貯金推進室長を迎え、さらにジャーナリストの立場から朝日新聞編集委員の松井やより氏にも参加いただき、それぞれの立場から、ODAやNGOが行う国際援助の現状と課題、今後の連携のあり方などを議論した。そしてNGO大学も第5、6期(1991～1992年)と外務省の後援を受け、また第8期(1994年)から15期(2001年)まで、8年間にわたって、このNGO事業補助金を受けている。

NGO大学の内容は少しずつ変化していく。第7期(1993年)あたりから各回テーマに「私」という単語が現れ始める。第7期の第2回講座テーマ「国際社会から問われている私たち～なぜ国際協力をするのか～」や、第8期第4回講座テーマ「市民の声を！もっと国際協力に」、第9期の第2回講座テーマ「私にとっての国際協力」。この

頃から同時に「南北問題」というテーマに取り組むようになっていく。「南」が抱えている貧困や人権侵害、環境破壊などの問題が、その国・地域だけの問題ではなく、構造的に私たちの暮らしともつながっている。「北」の私たちもその問題の「当事者」であるという視点を重視し、講座に取り入れていくという流れができつつあった。国際協力や援助、ODAやNGOについて考え、学ぶ際に、「私」とのつながりを意識して講座を組み立てよう、そうした思いが第7期以降の各回テーマに登場する「国際協力」+「私」というキーワードに表現されているといえる。

【参加者の傾向】

ここで、NGO大学の参加者の傾向を見てみたい。NGO大学が始まった初期(1987～1989年)の頃は国際協力や援助、NGO活動についての情報が少なく、その実際について学べる場や機会が少なかった。そうしたことを学べる希少な場としてNGO大学に集う参加者の属性も実際にNGOで働いている専従職員や、将来、国際協力や援助の現場で活動することを目指す学生などが多かった。1990年頃からは、南北問題、というキーワードが示すように、環境問題や途上国の抱える課題が、自分とつながっていることへの気づき、そしてその解決のために何ができるのか、NGOがその課題解決の一端を担うのでは、と問いかける内容にシフトしていった。

NGOや国際協力に対して関心が高く、専門的な知識を求めている人が多かった参加者の傾向が変化したが、第10期(1996年)だった。申込者も一気に増える。その背景には1995年「阪神淡路大震災」があった。この数年前から「ボランティア」に関する市民の関心が高まりつつあった。NGO大学でも第8期(1994年)に初めてボランティアをテーマとした講座を開催している。そして1995年1月に発生した「阪神淡路大震災」。この時、国際協力NGOが被災地に駆けつけ、それまで途上国で積み重ねてきた支援活動の経験を活かし行った救援活動は、社会的に大きく評価され、多くの市民がボランティアや支援・復興活動に関心を持つきっかけとなった。このことで1995年を「ボランティア元年」と呼ぶようになり、以降、震災復興にとどまらず、多様なボランティア活動に参加する市民が増えていった。そしてこの流れは1998年の「特定非営利活動促進法(NPO法)」制定につながっていく。

そのように、1996年以降、震災をきっかけにNGOや国際協力、ボランティア活動に関心を持つ人が増えたというニーズに応じ、講座内容も変化していく。第11期(1997年)第2回講座「ごっつー元気なNGOいらっしやい!」、第13期第2回講座「誰がすんねんNGO」、第15期第1回講座「NGOってなに?」などの講座テーマからもわかるように、新たにNGOに関心を持ち、その活動を理解し参加していく「初心者」向けの内容にシフトしている。第16期第1回講座に実施した講座「NGOを理解するための基礎知識」などは、NGOに関心を持ち、参加を考えている人の「初心者入門講座」的な講座であった。国際協力やNGOについてわかりやすく伝え、参加者の裾野を広げようという意図の講座は1996年以降しばらく続く。

2000年には「ミレニアム開発目標(MDGs)」が策定された。そしてその後継として2015年に採択された「持続可能な開発目標(SDGs)」では、世界各国が協力して解決すべき17の目標と169の課題が整理されている。NGOの取り組む課題が多様化する中、NGO大学の後半はユニークで多様化したNGOや国際協力の活動に学ぶ講座が実施された。

【初期の特徴:マイノリティーイシューと自己発見】

マイノリティ(社会的弱者)を取り上げた講座は初期、第1～7期(1987～1993年)の頃が多い。「難民」「女性」「外国人労働者」「少数民族・先住民族」などをテーマとして扱っている。日本のNGOの流れを見ると、1970～80年代に起きたエチオピア大飢饉やインドシナ難民流出、アフリカの干ばつ被害、バングラデシュ大洪水などをきっかけに多くのNGOが生まれた。関西NGO協議会にも、そうしたマイノリティや緊急支援を必要とした

人々への直接的な物資支援からスタートしたNGOも加盟していた。これら加盟団体の協力を得て講座の企画・実施を行った初期のNGO大学では、「マイノリティ」を考える講座が多かった。

また初期の頃のNGO大学では「自己発見」というテーマが何回か取り上げられている。第4期では「自己発見とライフスタイル」というテーマであるが、第2、3、5、6期はすべて同じ「第三世界と自己発見」というテーマで講座が実施されている。このテーマを担当した発題者は池住義憲氏(アジア保健研修所)だった。国際協力とは一見、関係のないようなテーマと思える「自己発見」を連続で取り上げた背景には何があるのか。NGOや国際協力機関が取り組む「難民」「貧困」「飢餓」「環境破壊」などの国際的課題。これらの課題に向き合う時、大切な視点が「自分はどこにいるのか」である。これらの課題を構造的にとらえ、その構造の中で日本、そして自分がどのように関わっているのか、自分の立ち位置(=当事者性)を発見することが、課題解決に向けての第一歩であることを確認する講座を設けたのが初期の頃のNGO大学であった。その後、「自己発見」は「気づき」というキーワードに変化し、受け継がれていく。

【私と世界のつながり】

国際協力入門講座として始まったNGO大学が、次第に重要視していったのが「地域(足もと)」。これは初期の頃によく取り上げられたテーマ「南北問題」が、その後「私と世界のつながり」に変化・発展していったことに重なる。第8期以降に多用されるキーワードが「私」「地域」「生活」「行動」である。この頃からNGO大学では、国際社会が抱える様々な課題の知識・理解を深めることよりも、それらの課題が相互に関連しあい、その要因は構造的であることを理解し、そしてそのつながりの中に自分も存在している(=当事者)ことの気づきを目指すようになった。この流れは第18期(2004年度)から使われるようになったNGO大学のキャッチフレーズ「世界に目を向け、自分の足もとを見つめる講座」に象徴されている。

地球上の様々な課題が自分とつながっていることへの気づき、そしてつながっているからこそ自分の問題として学び、さらに課題解決にむけて行動していく。この考え方はNGO大学の主軸であり、それを体現させていくため、各回の講座が練られ、実施されていった。

【NGO大学の必須科目「経済・グローバル化・格差」】

3番目に多いのが「経済・グローバル化・格差」である。このテーマはほぼ各期で採用され、NGO大学の必須科目といっても過言ではない。背景にはNGOや国際協力機関が取り組んできた課題のひとつ、「貧困問題」が、「経済・グローバル化・格差」によって引き起こされているという現状があった。



講座では、経済格差やグローバル化、貧困問題に取り組む発題者から最新の事情と知識を学ぶとともに、自分もその構造に組み込まれていることに気づき、当事者として何ができるのかを考えるのがねらいである。

そしてこのテーマの時に必ずと言っていいほど実施されたワークショップが「貿易ゲーム」である。第14期(2000年度)では「やってびっくり貿易ゲーム～知ってなるほど世界経済～」というテーマで講座を実施している。「貿易ゲーム」はイギリスの開発NGO「クリスチャン・エイド」が1982年に制作したワークショップである。主に金やモノや情報が国境を越えて行き来することで、不公正な状態、格差、課題などが引き起こされる現在の貿易のシステムを、シミュレーション・ゲームを通して体感し、自由貿易や世界経済、グローバル化と私たちの生活とのつながりについて構造的に理解する参加型のワークショップである。

この「貿易ゲーム」を実施する回では発題者として同じ方に依頼することが複数回あった。神田浩史氏(ODA

調査研究会→地域自立発展研修所→AM ネット理事→NPO法人泉京・垂井副代表理事)¹。佐久間智子氏(「環境・持続社会」研究センター→アジア太平洋資料センター共同代表)。田中優氏(市民フォーラム2001→未来バンク事業組合理事長、日本国際ボランティアセンター理事、→ap bank 理事)。神田氏は11回、佐久間氏と田中氏は5回依頼している。ともにグローバル化や経済格差、環境と開発問題などについて常に研究、実践、情報更新、政策提言に取り組みされており、来ていただくたびに新たな学びを得ることができた。貿易ゲームを体験した後の発題者の講義は、このテーマを自らの問題として捉え、理解を深めることに効果的であった。

【海外ゲスト】

NGO大学では第8期(1994年)から15期(2001年)にかけて海外からの発題者・ゲストを招聘している。この間、外務省の「NGO事業補助金」を受けていたことも関連している。

第8期 ポール・シロモニ (インドの人材開発指導者)

第9期 THE REKS BAND (パプアニューギニアの音楽グループ)

第10期 ルー・アンソニー・スバム (パプアニューギニア大学講師、バンド SANGUMA)

第11期 Tots Tolentino (フィリピンのサクソフ奏者)、Romeo Alberto Jorolan (フィリピンのギタリスト・歌手)

第12期 Vijay N.Seth (インドの風刺漫画家)

第13期 ポール・シロモニ (インドの人材開発指導者)

第14期 ジョン・ジョージ (THREAD 代表/インドのNGO)

第15期 ボンガス・ガング (パプアニューギニアのミュージシャン)

招聘した海外ゲストを大きく分類すると「NGOワーカー」と「表現者」になる。インドやパプアニューギニアなど、「途上国」では、貧困に苦しむ草の根の人々への支援活動よりも、自国の経済発展を優先する傾向にある。そうした国では本来、行政が行うべき貧困対策や人権問題解決などを、民間のNGOが担うことが多い。そうしたNGOには先進国からの支援が潤沢にあり、組織や予算も規模が大きい。優秀な人材も集まり、開発・支援活動についても経験が豊富である。NGO大学では先駆的な取り組みを行っているインドやパプアニューギニアのNGOワーカー(ファシリテーター)を招聘しその活動に学んだ。

「表現者」を発題者として呼び出したのは、NGO大学が大事にしてきたことのひとつ「伝えることの大切さ」を学ぶためである。NGO大学30年の講座の中で、「表現」をテーマにした回は定期的実施している(後述)。発題者として海外からもフィリピンとパプアニューギニアのミュージシャンを招聘し、ライブを開催。また、それぞれの表現活動を通して誰に対して何を伝えるのかについてインタビュー。同時にそれぞれの国・地域の文化や暮らし、日本との繋がり、課題などを学んだ。第10期にパプアニューギニアのルー・アンソニー氏を招聘した時、彼と知人であった歌手のモンタよしのり氏が突然会場を来訪し講座に飛び入り参加したことは印象的であった。

【政治を考える】

「政治・デモクラシー」を取り上げた回は10回と多い。なぜNGO大学でこのテーマに取り組んだのか。「政治・デモクラシー」とNGO・国際協力がどうつながっているのか？

このテーマに影響を与えた書籍がある。『茶色の朝』(大月書店、2003年)。フランスの心理学者フランク・パヴロフによる反ファシズムの寓話に、ヴィンセント・ギャロが日本語版のために描いた絵と、哲学者、高橋哲哉氏の解説が加わった日本オリジナル編集である。この書籍のテーマは「やり過ぎさないこと」「考え続けること」。言い

¹ ()内の各発題者の肩書はNGO大学30年の間に変化があったものを時系列に記載した。

換えれば「思考停止」に陥らないことの大切さである。政治・民主主義とは直接・間接にかかわらず、自分に関わることにコミット(関与)し、かつその決定に関わりたいという欲求こそがその本質である。

直接的に国際協力や課題を学ぶだけではなく、日常生活の中で、さまざまなことが国際協力につながっていることに気づくこともNGO大学の目指しているところである。NGO・国際協力が取り組む課題は、自分とつながっていることへの気づき、自分の課題として「やり過ぎさないこと」「考え続けること」について、「政治・民主主義」というテーマを通して考えた。

ちなみにその後、第19期第4回で高橋哲哉氏(哲学者、東京大学教授)を発題者として迎え「いま問い直す“平和”」というテーマで講座を開催している。そして「やり過ぎさないこと」「考え続けること」というキーワードはその後、すべての講座を組み立てる際のNGO大学の主軸のひとつになった。



【メディアについて考える】

情報やメディアについて考えたこのテーマは何回か取り上げられている。野中章弘氏(アジアプレス・インターナショナル代表)や堀潤氏(ジャーナリスト・元 NHK キャスター)、広河隆一氏(フォトジャーナリスト)西谷文和氏(フリージャーナリスト)など、前線で活動している方々を発題者として呼び出した。

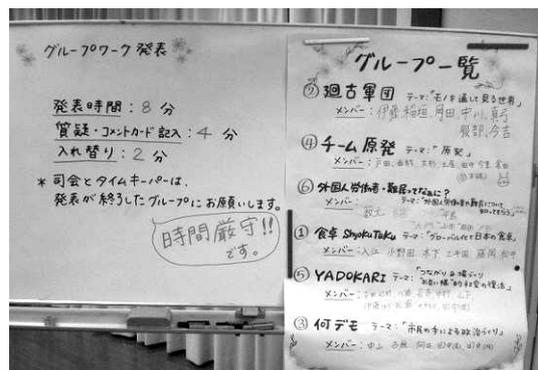
このテーマは「政治・民主主義」を考えた内容とリンクする。第23期の「流す人、流される人～情報を読み解く力が社会を変える～」、第25期の「“脱”マスメディア～流されるな、自分で考えろ～」というテーマに象徴されるように、日々、多量に流されてくる情報を鵜呑みにせず、やり過ぎさないこと、考え続けること、情報を読み解く力“メディアリテラシー”の意味について考えた。そして思考停止にならず、考え続けることが行動へつながり、さらに社会を「動かす」力になることを学んだ講座であった。

【行動 第9期以降のグループワーク】

「行動」というテーマが「国際協力・援助・NGO」に次いで多い。特に第8期以降、毎回「行動」をテーマにした講座が組み込まれている。これは第7期以降に変化したNGO大学の方向性が影響している。

NGO大学30年の講座をまとめた一覧表を見るとよく分かるが、第7期以降、全体テーマや各講座のタイトルに「私」と「行動」という単語が増えている。第13期「世界につながる私の行動」という全体テーマが象徴しているように、課題を学ぶだけではその解決にはつながらず、その課題を構造的に理解し、その構造の中に「私」もつながっていることに気づくこと。そしてその解決のために自ら「行動」することが問われている。これがその後のNGO大学を組み立てていく際の指針となっていった。

「行動」をテーマにした講座では発題者としてNGOや国際協力の現場で活躍しているスタッフや専門家、企業、ソーシャルビジネス、研修者など様々な立場で課題解決に向けて行動を起こしている人を招き、その取り組みに学んだ。そして、第9期(1995年)から始まったグループワーク。私たち一人ひとりが「意志」を持ち、社会の担い



手として世界の課題に取り組み、よりよい社会を作っていく。そのプロセスを仲間と共に力を合わせて考え、行動につなげていく試みがグループワークである。

全6回講座のうち第4回講座の時に、まずは自らを振り返り、どんな課題に関心があるのか、どんな社会を望むのか、各自が自己整理を行う。その後、参加者同士でそれぞれの関心を共有し、同じ想いや関心を共有できる仲間を探し、グループを作る。そしてグループとして取り組むテーマを決め、その課題への取り組みを考える。各グループは講座外の時間を使い、メンバーが集まり、勉強会やフィールドワーク、NGO事務所訪問、調査研究などを行う。そして2ヶ月後の第6回講座で各グループは、考えたこと、学んだこと、具体的に行動したこと、今後のアクションプランなどをまとめ、発表する。

各グループが取り組むテーマは多様であるが、NGO大学の講座で学んだことに関連しているものも少なからずあり、講座での「インプット」/「学び」を「アウトプット」/「行動」につなげる「しかけ」としてグループワークが機能したと言える。(グループワークについては2章で詳述)

【多様な取り組みに学ぶ】

「多様な取り組みに学ぶ」というテーマは、18期以降ほぼどの期も後半の第5回講座で取り上げている。これはグループワークを行う際に、NGOや国際協力機関のみならず、多様な分野や立場から、ユニークで先駆的、特徴的な活動をしているゲストを招聘しその取り組みに学ぶ、ということがねらいである。

国際協力分野では関西NGO協議会の加盟団体を招くことも多かったが、この枠組ではあえて国際協力分野以外からゲストに来ていただいた。特徴的なゲストをあげてみる。「ビック・イシュー日本版編集部」「パタゴニア」「ザ・ボディショップ」「カタログハウス」「ナマケモノ倶楽部」「生活協同組合」「サラヤ株式会社」「水俣病センター相思社」「カフェスロー大阪」「松本哉氏(素人の乱5号店店主)」「株式会社フェリシモ」「藤村靖之氏(非電化工房主宰)」「増山麗奈氏(画家、桃色ゲリラ代表)」など。社会を変えるための「行動」の多様性、可能性、斬新な切り口について固定観念を覆すような活動をしているゲストが選ばれている。



NGO大学は1泊2日の講座である。発題者には、可能な限り1日目から参加していただく。宿泊を伴うNGO大学は、「公式な講座」以外に、1日目の講座終了後、発題者を交えての非公式なプログラム「交流会」がひとつの特徴である。自由参加で、時間制限を特に設けず、お酒など飲み物や軽食を取りながら、こうした発題者の更に入った話や、意見交換、情報提供など参加者との交流、言い換えれば「もう一つの学びの場」が展開される。

【現場を訪ねる・当事者に会う】

「多様な取り組みに学ぶ」の延長線にあったのが「フィールドワーク」である。座学にとどまらず、外にでかけていき、問題の「当事者」とその「現場」を訪れ、直接話を聞くというプログラムである。第19期第3回講座テーマ「出かけてみよう！身近な世界の現場へ～歩いて、見て、感じる世界と私とのつながり～」がその意図をよく表現している。

30年のうち、第15期、16期、19期と3度、実施された。各期、訪問先は4ヶ所。NGO大学では1泊2日の日程を3つのセッション(1日目夜、2日目午前、2日目午後)に分けて



いるが、参加者は1日目夜の第1セッションで、それぞれの訪問先の説明を受け、行きたい場所を選択し、4つのグループに分かれる。各グループは訪問先で何を見て、どのようなことをインタビューするのか、などをディスカッション。2日目朝食後、それぞれ訪問先へ出発。現場を訪ね、当事者に話を聞く。すべてのグループが会場に引き返した2日目午後、まずはグループごとに訪問先で学んできたこと、考えたことを整理する。その中から他のグループに「伝えたいこと」を3つのキーワードにまとめる。そして全体共有。各グループの報告があり、それに対する質疑応答が行われた。

<主な訪問先とねらい(抜粋)>

- ・大阪市西淀川区 / あおぞら財団 / 西淀川公害訴訟、高度経済成長に伴う公害、住民参加型の再生プラン
- ・釜ヶ崎(大阪市西成区) / 釜ヶ崎支援機構 / 日本最大の日雇労働者の町とグローバルイゼーション、支援活動
- ・神戸市長田区 / RINK / インドシナ難民の現在、共生社会
- ・空堀商店街(大阪市中央区) / からほり倶楽部 / 商店街の活用と町づくり、町家や古い町並みの保存
- ・コリアンタウン(大阪市生野区) / コリアンNGOセンター / コリアンタウンの歴史と現状、共生社会について
- ・大阪南港 / ウータン・森と生活を考える会 / 熱帯木材輸入大国日本、違法伐採、日本の森林の衰退

このフィールドワークというプログラムは、NGO大学が18期以降採用してきたキャッチフレーズ「世界に目を向け、自分の足元を見つめる講座」が象徴するように、自分が暮らしている足元の問題を知り、自分とのつながりに気づき、さらにその足元が世界の問題ともつながっていることを理解して行くことがねらいである。参加者は、当事者の持つ迫力と、現場の雰囲気を感じることによって、大きな刺激と学びだけではなく、自らの行動を起こす際のヒントを得ることができた。

【なぜ“表現”について考えたのか】

NGO大学の講座で特徴的なテーマのひとつが「表現」である。その切り口は下記のように多岐にわたる。

- 第9期 THE REKS BAND (パプアニューギニアの音楽グループ)
- 第11期 Tots Tolentino (フィリピンのサクソ奏者)
Romeo Alberto Jorolan (フィリピンのギタリスト・歌手)
- 第12期 Vijay N.Seth (インドの風刺漫画家)、ありむら潜 (漫画家)『カマヤん』シリーズ
- 第13期 4代目 林家染語樓 (落語家)
- 第14期 河瀬直美 (映像作家)
『につつまれて(1992年)』『萌の朱雀(1997年)』『殯の森(2007年)』
- 第19期 宗田勝也 (難民ナウ・ラジオパーソナリティ)
- 第20期 J.NAM MC (ラッパー、ベトナム難民2世)
- 第25期 瀬瀬あや (映画監督) 『祝の島(2010年)』『ある精肉店のはなし(2013年)』

なぜNGO大学は表現に注目したのか。それは第20期第4回の講座テーマ「伝わらなくちゃ始まらない」が象徴しているように、「伝えることの大切さ」について考えるためである。1998年に「特定非営利活動促進法」が施行され、NGOにとって支援者を増やす追い風が吹いていた。にもかかわらず一般的にNGOに対する認知度はそれほど高いものではなかった。その一因としてNGOの広報戦略の未熟さがあげられる。自分たちが取り組んでいることの内容や必要性をわかりやすく訴え、参加を呼びかけ、支援につなげるという「広報」の必要性への認識が弱く、またそのノウハウも少なかった。

もうひとつの側面は、私たち個々の「伝える」ことについての意識の低さがある。NGO大学の講座のみならず、

日常生活の中で大切なこと、重要なこと、必要なことを学び自分の中に取り入れても、そこにとどまっていいるのだろうか。インプットしたものを自分なりに理解・解釈して、アウトプットすることで評価され、それが社会を変える力にもなる。伝えることも「行動」のひとつであり、その手段は多様であることに気づく、これがテーマのねらいであった。

どうすれば伝わるのかを、考え、実践した講座テーマが「表現」であった。その手法は様々で、「音楽」「ラップ」「映像」「笑い」「ラジオ」「漫画」など、様々な媒体を使って表現している人を発題者として呼び出した。

11. NGO大学の終盤

第25期(2011年)あたりから参加者数が減少してくる。要因としてはNGO大学と同様の学びの場が増えたことや、学生の経済状況の変化によって受講料の支払いが難しくなったことが考えられるが、詳細な分析にはいたっていない。また宿泊を伴い、年6回の連続講座であるという時間をかけた講座スタイルが、以前より参加する上でのハードルになった可能性がある。そのため第26期頃から日帰り講座を入れるという試みも行った。また第20期(2008年)までは毎回、会場を変え、関西各地の研修施設を利用して開催してきたが、第21期以降は会場を固定したため、それがむしろ、遠方からの参加者が物理的に参加しにくい要因になったのかもしれない。そうした会場固定化の背景には、第20期以降、関西NGO協議会が事務局を担うという体制が変更され、企画、運営のみならず、広報、申込受付、会場や食事の手配、会計管理などの事務的なことも含め、ほぼ全てを運営委員が担うようになったという大きな変化があった。これだけの規模の連続講座をすべてボランティアで企画・運営するということの限界が、参加者数にも影響したと言えるだろう。NGO大学の最終期となった第30期(2016年)は、29年間続けてきた年6回の連続講座というスタイルを維持できなくなり、年2回の開催となった。ここで30年継続した講座が途絶える。そして2020年12月、つながりのある運営委員が集まり今後の活動について話し合った。その結果、以下について合意がなされた。

- ・ 関西NGO大学運営委員会の活動を終了する。
- ・ 運営委員会の活動終了に伴い、関西NGO大学もその活動を休止する。
- ・ 関西NGO協議会のウェブサイト内にNGO大学のページを設け、現存のNGO大学のウェブサイト<ndai.net>の内容をすべて移動させる。また過去の報告書、広報チラシなどの資料も必要に応じてデジタル化し、アーカイブする。
- ・ NGO大学30年の成果を冊子にまとめ、記録とする。また関係者に広く配布する他、関西NGO協議会のウェブサイトに掲載する。

この合意は2021年5月の関西NGO協議会第20回定期総会にて承認された。総会では「関西NGO大学の歩み～“市民による学びの場”の30年」と題して、運営委員の荒川共生氏による30年の報告・総括が行われた。

12. 発題者/修了生のコメント パンフレットの「私もおすすめします」文章から見るNGO大学

NGO大学の参加者募集のパンフレットには、発題者や過去の参加者からの推薦の文章を掲載している。それぞれの立場・視点・経験から語られるNGO大学への想いを紹介する。(肩書は当時のもの)

<第12期(1998年)>

村井吉敬 (上智大学教授、『エビと日本人』著者)

この「大学」は「普通の大学では学べないことを体験的に学ぶことができます。それは21世紀に地球市民として生きることでできる知識や知恵です。おそらく日本ではもっとも先を読んだ「大学」かもしれません。世に言う「開発教育」「国際理解教育」あるいは「平和教育」、そういうものが全て盛り込まれています。日本のODAやNGOの活動についても学べます。生涯無二の友人をも探せるかもしれません。あなたの今と、将来を大きく変える可能性のある大学です。

<第14期(2000年)>

戸田亜理子 (NGO大学修了生、第8、12期運営委員、トロント大学教育研修所修士課程在籍中)

NGO大学は期待外れだ。偉い先生の話聞きに行ったら、自分たちで何かをすることが多い。貧しい国のかわいそうな人たちを助ける話だと思ったら、自分の生活を考えさせられる。でも今ここで生活する私と世界とのつながりを発見し、私の行動が何かを少し変えるきっかけになることがわかった。そんな「少し」が世界中のNGOを通して広がれば大きな流れになるかもしれない。そう思うと世界が違って見えてきた。本当は「偉い先生」も「かわいそうな人たち」もNGO大学のみんなもそんな流れと一緒に作る「仲間」だった。NGO大学は期待を裏切られる心地のよい響きの中から、新しい関係で世界を結ぶ自分を発見したい人のための学びの場です。

<第15期(2001年)>

安斎育郎 (立命館大学国際平和ミュージアム館長)

専門家面をして一方通行の話をして「ハイ、さようなら」という講演は「楽ちん」だが、ただそれだけのものになり易い。講師など屁とも思わず、自分の価値観で食ってかかるような若者がいる場に身をさらすのは必ずしも「楽ちん」ではないし、相応の覚悟も必要だが、参加者の側に自分自身を見直し、一歩踏み出す姿勢がある限り、「やった甲斐」が感じられる。だから、NGO大学では、講師の側にも、参加者の側にも「主体性」が求められる。それが「らしさ」だろう。

<第16期(2002年)>

小松みち (第6期運営委員、元PHD協会職員、タイ在住)

関西NGO大学は、多くの「出会い」を提供してくれる。国を越えて問題となっている課題、共に語り考えて活動していく仲間、そして何よりも普段の生活では気づかなかった自分自身にも。今私はタイの村にいるが、居場所をかえても同じだと思ふことは「実践あるのみ」ということ。いくら多くを知っても、一歩を踏み出すことがなければ…。日々の生活の中での小さな歩みでも、その積み重ねが“私”をつくり、社会をつくり、世界をも変えようと、私は思っている。

<第16期(2002年)>

三輪敦子 (NGO大学修了生、元国連女性開発基金職員)

関西NGO大学の醍醐味、それは何といても夜です。もちろん、昼の発題やディスカッションも刺激的です。だけど、そんな刺激に触発されて、思いを存分に深め発散できるのは夜の時間。個人的にも、今も私の心に残るひとときが沢山あります。寝不足(と飲み過ぎ)の身体で帰途につくと、きっと世界が少しだけ違って見えるでしょう。学校に、職場に戻ると、土日を過ごした時間との違和感にとまどうかもしれません。自分に気づき何かが変わる、きっと関西NGO大学はそんな場所です。

13. 数字で見るNGO大学～参加者、運営委員、助成団体、発題者～

ここでは、NGO大学を「数字」で整理する。ただし下記の「数字」は必ずしも正確ではない。初期の頃の事務局書類が散逸していること。そして第20期以降は運営委員が持ち回りで事務作業を分担していたこと。こうした状況もあり、正確な数字を記録することが困難であった。（報告書や理事会提出資料など公式な書類がある場合はその数字を反映させている）

期	年度	参加者数	発題者	運営委員	運営・発題者を 含めた総参加者数	助成団体
1	1987	175	20	6	201	
2	1988	163	11	10	184	
3	1989	265	15	9	289	
4	1990	246	14	7	267	
5	1991	395	16	8	419	
6	1992	488	11	12	511	庭野平和財団
7	1993	342	11	15	368	
8	1994	313	13	19	345	外務省NGO事業補助金
9	1995	236	10	20	266	外務省NGO事業補助金
10	1996	306	17	13	336	外務省NGO事業補助金
11	1997	338	14	18	370	外務省NGO事業補助金
12	1998	375	11	16	402	外務省NGO事業補助金
13	1999	195	8	15	218	外務省NGO事業補助金
14	2000	223	7	18	248	外務省NGO事業補助金
15	2001	213	8	16	237	外務省NGO事業補助金
16	2002	199	10	15	224	
17	2003	188	7	15	210	財団法人倶進会
18	2004	223	12	14	249	庭野平和財団
19	2005	234	12	19	265	
20	2006	168	9	20	197	パナソニック市民活動支援金
21	2007	197	10	20	227	パナソニック市民活動支援金 大阪コミュニティ財団
22	2008	181	13	22	216	パナソニック市民活動支援金
23	2009	159	10	22	191	
24	2010	94	9	22	125	
25	2011	49	7	24	80	パナソニック市民活動支援金
26	2012	117	7	16	140	パナソニック市民活動支援金
27	2013	116	9	15	140	
28	2014	92	7	16	115	
29	2015	147	7	12	166	
30	2016	47	4	12	63	

<合計> 6484 319

※のべ人数で表記。それぞれ複数期にわたり参加する参加者、発題者、運営委員もある。

※関西NGO協議会加盟団体からの参加は、複数団体の参加があっても1と計上。

※JICA、AHI、PHD 各団体からの研修生は、複数人数の参加があっても1と計上。

※第9期以降に始まったグループワークの成果発表を各期第6回で行っていた。この参加者グループは「発題者」として位置付けてきた。ただし複数グループの参加があっても1と計上。

14. 浜本裕子氏(元関西NGO大学副校長)へのインタビュー

浜本裕子さんは、第6、7期の修了生で、その後、8～12期まで運営委員、13～30期まで副校長としてNGO大学に関わった「最もNGO大学を知る人」である。インタビューは2021年4月。聞き手は運営委員の片岡法子さん、栗本知子さん。そして山下奈美さんにまとめてもらった。(※肩書・所属は当時のもの)

■「本を読めばなんでもわかる」と思っていた

NGO大学に参加したきっかけは、大阪YMCAに就職し、1990年頃に職員研修で、軽い気持ちでアジアスタディツアーに参加したことだった。タイ、ビルマ、バングラデシュに2週間ぐらい行ったが、そこですごい衝撃があった。私は基本的にインドア派で、それまでは知識や情報はすべて本の中にあると思っていた。ところが、スタディツアーで体感したことには本の中にはないものがあった。温度と匂い。日射しや風、現地の空気というか。人々のまなざしやふるまいなど。それは、活字や写真からは伝わってはこないものだった。その場に身をおくこと、生



身の人と出会うことと、活字とでは、まったく違うものだ気づかされた。1990年頃はアジアやアフリカに関する書籍はあまりなかったし、NGO大学の初期の講座名にある「第三世界」という言葉も一般的ではなかった。

タイのスラムでは、子どもがタイ語に訳されたドラえもんを読んでいる。テレビで日本のドラマを観ている。ビルマの地方の雑貨店で、サンスターや花王の歯磨きやせっけんを売っている…。それまで私は日本とアジアをつなげて考えたことはなかった。「本を読めばなんでもわかる」と思っていた私は、なんて傲慢だったんだろう…。

帰国後、1か月ぐらいは「あのスラムの子どもたちは、いまどうしてるんだろう」と思ったが、だんだんその思いも薄れていく。薄れてはいくけれど、なにか引っかかるもの、違和感がずっと自分の中にあっただ。それで2年後ぐらいに、職場にパンフレットがあったNGO大学に行くことにした。初期のNGO大学のパンフレットを見ると、タイトルが大仰で(笑)、「第三世界の人々と私の生き方」とか。しかも宿泊だし、どんな恐ろしげな人がくるのだろうと思ったが(笑)、当時の職場の上司の山口光さんが「この講座な、重そうやけど、ごつつええらしいで」と背中を押してくれた。また、たまたま第6期(1992年)の第1回講座は、職場のある枚方の研修施設が会場だったこともあって参加した。そして、アジアスタディツアーで体感したことと日本の生活をどうつなげるか、を考えるひとつのきっかけになった。

■講義が終わってから始まる学びの衝撃(第6～7期)

私がNGO大学で衝撃を受けたのは、グループセッション。小グループでいろいろ話をするとか、発題者の話を受けて、「じゃあ、あなたはどうか考えるんですか?」といった問いかけで話し合う点だ。

当時はまだ、ワークショップとか参加型学習という言葉が一般的ではなかった。従来の講座・講演会は、レジュメがあって講義があって、「いいお話ありがとうございました」「質問ありますか?」とか聞かれて、何人かが質問をして終わる、という感じ。だけどNGO大学では講義が終わった後、そこから先が長い。発題者の話をうけて、参加者同士、あるいは参加者と運営委員、参加者と発題者とで語り合う。そこから始まるという学び方だった。

泊まりがけという点も大きい。当時の私にとって、知らない人たちとの宿泊プログラムはとてもハードルが高かった。事務局担当の笹江良樹さん(大阪YMCA)に日帰りが可能かを聞くと、「いいですよ」とのことだったので日帰りのつもりで参加した。でも、帰れなかったのだ。

その時の発題者は中村尚司さん(龍谷大学教授)。1日目のセッションが終わった後の交流会に、中村さんもずっと残ってくださった。私はみんなが話しているのを聞いているのがすごく面白かった。中村さんの話だけな

く、それを受け取った人がどう反応するか、そこからどう話が広がるのか、全然違う視点があるとか、それが面白かった。ずっと聞いていたら帰りのバスが無くなってしまって(笑)。事務局のアルバイトをしていた栗本敦子さんに「すみません、帰れなくなりましたけど…泊まりますか？」と言ったら「ええ？」と怪訝そうな顔をされて(笑)。運営委員と同じ部屋に泊まれたが、そこでも運営委員の方々と話が續いていて。それまで私が知っていた世界とはまるで違う世界、異次元というか。でも、そこに居ることを責められることもなく、とりあえず居てもいいかと。そういう感覚も、それまではなかったこと。寝食を共にするということもあるけど、なにか、その空間自体がすごく不思議だった。排除されることもなく、責められることもない。なんとなくゆるく受け入れてくれるという感じがよかった。2日目のグループセッションでなにも話せないでいたら、運営委員の和田みのりさんに「話せなくてもいいのよ」と声をかけてもらって。「それでもいいんだ」と思って。結局、2回目以降はすべて宿泊で参加した。

NGO大学で受けた大きな衝撃は2つ。ひとつは学びのあり方。もうひとつは、異世代異業種の人と出会えること。狭い世界で生きていた私にとって、上の年代の人でも下の年代の人もいて、それまで全然接点のなかった職業の人やいろんな生き方の人がいる楽しさ、面白さに、とても惹かれた。それで一年間参加したが、とても全6回の講座では理解し消化するのが難しいと思い、第7期も参加した。

■ガラッと変わったNGO大学(第8期～)

7期の講座終了後、事務局の笹江さんから電話があり「浜本さん、2年NGO大学に参加したし、運営委員にどうかという話が出ている」と。それまでの運営委員は錚々たるメンバーだったので「ええ！私が？」と驚いたが、「大丈夫。呼びたい講師や、やりたいテーマなど、どんどん提案すればいいから」と言われて。それと当時の事務局が大阪YMCAで、同僚が担当していたのが心強くもあったので、「好きなことができるなら」と引き受けた。

ところが1994年の第8期から、NGO大学はガラッと変わった。忘れもしない、大阪YMCAでの第1回の運営委員会の時、藤野っていう人が出てきて(笑)、しかめつつらで「もうテーマは決まっていますから」と。「テーマは、『私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動』です」と。「ええ？決まってるの？話ちゃうやん？」と思ったが、藤野さん、結構圧が強くて(笑)、他の人も発言できる雰囲気ではなく…。枠が藤野さんによって決められて「誰を呼ぶかは、担当を決めて、みなさんで考えてください」と。なんかきつい縛りだなあ、と(笑)。

その時が藤野さんとの初対面。藤野さんは第1期からNGO大学にかかわられていたようだ。私が参加した6期のころはイギリスに留学されていた時期だった。留学から戻った若手の藤野さんが、8期からNGO大学の「校長」になった。7期までの運営委員は全員入れ替わり、運営体制がすべて変わった。それまで講座運営責任者を「ディーン」と呼んでいたが、「校長・副校長でいきます」と。「学校ぼくってイヤやな」と内心思ったが言えない(笑)。運営委員全員が新人だったが、みんな内心では「聞いてた話と違う」と思ってたと思う(笑)。

2回目の運営委員会は神戸学生青年センターでの合宿。1回目で決めた各回担当が企画案を持ち寄ったが、ひとこと言うたびに藤野さんが「それ、どういうこと？」「地域ってことがわかってないんじゃないの？ なにかちゃんと言いなさい」とか指摘する。講座紹介文の一字一句、「てにをは」までも細かく突っ込みがあって(笑)。山本達士さん(神戸学生青年センター)と一緒に企画していたが、山本さんが深夜に「地域～地域～」と、頭を抱えて畳の上で転がりながら悩んでいたのを思い出す(笑)。地獄の合宿だった(笑)。

■NGO大学の根っこにある、変わらないもの～平田哲さんが大切にしたこと～

NGO大学の講座のあり方については、第6期のパンフレットに平田哲さん(関西NGO協議会議長)がこんな風を書いておられる。

「(前略)第6期講座開催の願いは、全講座を通して参加者自身がグループ討議を通じて、お互いに、また各講師の胸を借りつつ、第三世界の民衆の顔のよく見える支援、協力の在り方を探求し、その学習の成果を自分のものにしつつ、日本のNGOの量的、質的向上を図ることにあります。皆さんとの出会いと共に学び合うひとときを楽しみにしています」

平田さんは、釜ヶ崎や港湾労働者の支援などをされたご経験もあり、一方的ではなく、時間を共にしながら互いの経験を共有し、語り合いながら学ぶ、ということを根っこに持っておられたと思う。だからこそ、このような講座を企画されたのだろう。私が参加した6期、7期もそれがベースになっていた。グループディスカッションも、結論を出すとかではなく、お互いに思っていることや感想、疑問を共有する場を持つということが大切にされていた。

YMCAはイギリス発祥だが、その背景には、産業革命によって農村から工場労働者が都市に出てきた際、その週の週給を週末にパブで使い果たす生活を繰り返す、というような状況があった。ただ働くだけ、お酒を飲んでお金を使い果たすだけ。新しい貨幣経済の中、生活のあり方を話したりする場もなかった労働者の相談を教会が担うこともあった。YMCAの創始者ジョージ・ウィリアムズは、人びとが共に祈り集う場としてYMCA(Young Men's Christian Association)をつくった。アソシエーションは、なによりもひとが集い語り合う場だった。平田さんにも、そういう認識が根本にあったのだと思う。

NGO大学では、講師と言わずに「発題者」と呼ぶが、ここにも平田さんの意向があると思う。発題者から一方的に学ぶのではなく、参加者同士で学び合うことをとても大事にされていた。平田さんが「ミューチャル・ラーニング(Mutual Learning)」という言い方で説明されていたことも、すごく印象に残っている。講師や教科書から学ぶ、パウロ・フレイレがいう「銀行型教育」ではなく、相互に学び合うということだ。そのあたりの勘所のおさえかたが、平田さんのすごいところ。



また、開講当初の第1期から1泊2日という宿泊形式にしたのは、平田さんが「寝食を共にして語り合う」「生活を共にする」ことで生まれてくるものを大切にからだと聞いた。

大学の寮生活にも通ずるものがある。藤野さんも大学時代、カトリック系の学生寮で過ごされたそう。日々の生活を共にすることで、語り合い思いを共有する時間や仲間もできる。スローラーニングというか、日々醸成されていくような学び。すぐに結果としては出ないけど、どこかに根強く残っていくような学び方。NGO大学は寮生活ではないが、日常から離れたところで、知らない人と1泊2日の時間を、5回、6回と積み重ねる中で生まれてくる、協働性、共感性がある。だからこそ、運営委員をやろうという人が出てくるし、講座が30年続いたベースにもなっていると思う。

こういうリアルな出会いや時空の共有が、リモートなどではどんどん減っている。また違うものが生まれてくる可能性もあるが、お互いの経験から学び合うことにはなりにくい気がする。「この人がいたから、変わっていった」ということがある。ある人の仕草だったり、表情だったりまなざしであったり。誰かのひとことに触発されるとか。その場にいることで感じられる「場」がもつ力、を信じ大切にしているのが、参加・体験型教育ではないか。

いま、世の中の流れとして、プロセスよりは結果を重視する傾向が強い。「問題解決型」教育と言うが、学校の学びも解決できる問題しかテーマ設定しないようではどうなのか。企業の人事評価でも、年度当初に目標を設定する際、達成可能な目標しか設定しなくなるとも聞く。NGO活動の賛同者を得るにしても……。世の中の指標が、数値や結果にのみ重きを置いてしまっているのはどうなんだろうと感じている。

■藤野さんが問いかけたこと～地域とは？開発とは？ 自分の足もとから考える～

藤野さんがイギリスに留学した頃のことは、瀬良さんのレポート(※)にヒアリングがまとめられている。それによると、当時平田さんは関西NGO業界の世代交代を考えていた。そこで若手の藤野さんを、一年間ヨーロッパに留学させたようだ。(※)「NGO大学の第三者評価」(瀬良香織、2005年4月)

NGO大学の先見性は、海外に目を向けるだけでなく、“自分の足もと”をみようというところ。「地域とはなにか」ということを、第8期から藤野さんはずっと言っていた。では「地域」とは？ 必ずしも海外で活動することだけが「国際協力」ではないだろう、という思いが藤野さんにはあった。第8期テーマ「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」という問いかけは、8期がはじまる前から藤野さんにはあったのだと思う。

1994年の第8期のパンフレットの文章は、藤野さんが書いた次のようなものだ。

「多くの課題を抱える国際社会の中で、大きな影響力をもつにいたった私達の住む日本。好むと好まざるにかかわらず私達の暮らしは、世界の人々と相互に深く結び付いています。(中略)アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの草の根の人々が彼ら自身の地域社会の向上に取り組むのと同じように、私達自身が私達にとっての地域、私達にとっての開発とは何かをあらためて問い、行動を起こすことが、世界にいい関係でつながる基本だと思います。まずは私自身のディベロップから……。」

当時、国際協力は海外に出かけて行ってなにかやることと思われていたが、そうじゃない。あなたがその地域(海外)に出かけて行ってやることは、あなたが住んでいる地域でもやることですか？という問い返しだ。そこが、他の国際協力の講座などとは大きく違うところ。国際協力と言えば、青年海外協力隊で何かするとか、植林であれ井戸掘りであれ海外の現地に行って何かをする。そういう捉え方が多かった。そんな中、自分自身の地域や開発、行動を問い直す、という視点をもって講座をつくったことは、NGO大学の先見性だったと思う。

とは言っても、いきなり「あなたにとっての地域」と問われても、答えられない。でも、そこを問わずに海外に行って「地域開発に来ました」というのは、傲慢なことでもある。第7期までは「先住民の人権」や「性の売買」「難民問題」「環境と開発」などイシューへの理解を深めることが中心で、それはそれで興味深く先駆的でもあったが、第8期以降は視点というか枠組みがまったく異なっている。そんな大きな転換を、運営委員が理解して、企画・運営していくのは、時代背景や意識の点からも、なかなか難しいことだった。

第9期のテーマも「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」と第8期と同じなのは、「やりきれなかった」という思いが藤野さんにあったからだと思う。テーマ文はほぼ同じだが、最後の一文が「まずは私自身の発見から…」と若干わかりやすくはなっている。

第9期の3回目講座では、「足もとから見直そう」というテーマで、宮内泰介さん(福井県立大学)を発題者に呼んでいる。足もとを問い直す。自分たちの生活と世界の人々の暮らしはどうつながっているのか。呼びかけ文の書き出しは次のように書かれている。

「私達の暮らしは、一見便利で豊かであるように思います。その暮らしは、実は世界の人々と相互に深く結びついているのです……。」

この相互依存の関係は、90年代半ば以降グローバル化が広がる中言いはじめられたこと。私たちは一方的な関係ではなく相互に依存しあっている。課題は向こう側(海外)にあるのではなく、こちら(自分たちの足もと)にあるのではないか。そういう問い返しは、おそらくそれまであまりなされていなかった。国際協力は、常



に援助すべき対象があり、何かしてあげないと、という考え方が主流だった。よい関係ばかりでなく、好ましくない関係について、自分の足もとから考えるという視点は、まずないことだった。

第9期(1995年)は、阪神淡路大震災後の開催という点でも特殊だった。震災後で、関心が国内に向けたこともあり、講座名が「第三世界…」から「国際理解・国際協力」に変わった。ただ、「国際理解・国際協力入門講座」でありながら、異色な講座の組み方だったと思う。

第1回では「私はだあれ?」というテーマで、発題者に雨森孝悦さん(とよなか国際交流協会)を呼んでいる。たとえば「人間開発」という場合の「開発」は、「相手の能力を伸ばしてあげよう」というイメージで捉えられがちだったが、この回の呼びかけ文では「わたしとあなたが違うように、この世界には様々な人々がいます。そうした多様な個性と出会い、深め合う。そして自分自身が変わっていく。それが『開発』ということではないでしょうか」と、開発を考えるにあたり、まずは「自分をよく知るところからはじめたい」、という独自の視点だ。

第2回のテーマは「豊かさ」を問い直す。第3回が「足もとから見直そう」。第4回の「私にとっての国際協力」の発題者は東牧陽子さん(北河内ボランティアセンター)。東牧さんは国際協力の専門家ではなく、福祉系の人。「仲間を増やす」という視点で話してもらった。第5回は「できることからボランティア」というテーマ。震災から1年が経ち、自分自身の行動を見つめ直している。そして最後の第6回は「あなたは どうする?」というテーマ。呼びかけ文は『私はだあれ?』から始まった第9期関西 NGO 大学。4回目以降は実際にグループを作り、考えてきました。(中略)そして大切なのはNGO大学修了後です。さあ、これから『あなたは どうする?』。やっぱり、なんか浮いている(笑)。いまでも浮くのに、20年以上前はなおさらで。おそらく国際協力に取り組んでいる主流の人からみたら、特に意味がわからなかったと思う(笑)。

◆関西NGO大学の展望

関西NGO大学とは…

市民の国際理解をすすめる、国際社会がかかえる課題に取り組むNGO(非政府組織)の活動にかかわる人材を育てることを願って開催する講座です。

—第9期テーマ—

「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動。」

多くの課題を抱える国際社会の中で、大きな影響力をもつにいたった私達の住む日本。好むと好まざるにかかわらず私達の暮らしは、世界の人々と相互に深く結び付いています。そこには、私達が恩恵を受ける関係、相手が恩恵を受ける関係、相互に嬉しい関係だけではなく、害を及ぼす関係、迷惑をかける関係、搾取する関係も残念ながらあります。私達が働き、遊び、暮らす日常のひとつの意思が、知らず知らずのうちに政府や企業の方向性として世界につながることもあり、また、積極的な意思を伴って個人の行動や、NGOの活動となって表れることもあるでしょう。

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカなどの草の根の人々が彼ら自身の地域社会の向上に取り組むのと同じように、私達自身が私達にとっての地域、私達にとっての開発とは何かをあらためて問い、行動を起こすことが、世界にいい関係でつながる基本だと思っています。新しい発見から始めましょう。

まずは、私自身の新しい発見から……

関西NGO協議会 議長 平田 哲
 関西NGO大学 校長 藤野 達也
 副校長 樺木 恵子

◆第9期関西NGO大学運営委員

荒川 共生 関西セミナーハウス
 片山 秀幸 関西NGO大学修了生
 佐伯 祐佳 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
 世江 良樹 大阪YMCA
 雀部 真理 大阪YWCA
 佐藤真奈美 関西NGO大学修了生
 芝田 美樹 国際エンセーブル協会
 園部 由紀 大阪YMCA
 戸田亜理子 大阪YMCA
 中尾 秀一 関西NGO大学修了生
 浜本 裕子 関西NGO大学修了生
 樺木 恵子 日本キリスト教海外医療協会
 平田 哲 関西セミナーハウス
 藤野 達也 PHD協会
 真嶋 克成 大阪YMCA
 山根 泉 神戸YMCA
 山本 達士 神戸学生青年センター
 和田みり 関西NGO大学修了生

◆スケジュール

回	日 程	テーマ・講師	内 容	場 所	担 当
1	9月23日(土) 24日(日)	私はだあれ? (発題者) 雨森 孝悦	わたしとあなたが違うように、この世界には様々な人々がいます。そうした多様な個性と出会い、深め合う。そして自分自身が変わっていく、それが「開発」ということではないでしょうか。今回は「開発」を考えるにあたり、まず自分についてよく知るところからはじめたいと思います。	奈良野外礼拝センター (奈良・奈良市)	山本・和田 荒川・園部
2	10月21日(土) 22日(日)	豊かさって何だろ? (発題者) 神田 浩史 カスパー・グンブ ドン・アピシ ボンガス・ガンボ	バプア・ニューギニアの人気レゲエグループ「レックスバンド」をゲストに迎え、その音楽を通して彼らの生活を体感し、私たちの生活についても振り返ります。そして「豊かさ」とは何かも、一緒に考えてみましょう。	YMCA六甲 研修センター (兵庫・神戸市)	浜本・雀部 佐藤・園部
3	11月11日(土) 12日(日)	足もとから見直そう (発題者) 宮内 泰介	私達の暮らしは、一見便利で豊かであるように思えます。その暮らしは、実は世界の人々と相互に深く結びついているのです。そこにあるよい関係、好ましくない関係について、もう一度足もとから見直してみよう。	奈良野外礼拝センター (奈良・奈良市)	片山・山本 浜本・中尾
4	12月16日(土) 17日(日)	私にとっての国際協力 (発題者) 東牧 陽子	「国際協力したい。でも一人ではどうしていいかわからない。」そんなあなた! 実あなたの周囲にも、同じ思いや関心をもつ仲間がきっといるはず。実際に国内外で協力活動に取り組んでいる方の体験をもとに、あなたも仲間と共に国際協力のために行動を始めませんか?	関西 セミナーハウス (京都・左京区)	佐藤・佐伯 荒川・芝田
5	1月13日(土) 14日(日)	できることから ボランティア (発題者) 早瀬 昇	阪神大震災から一年。あの時の熱き思いはどうなったのでしょうか。ボランティアの力が支えあい共に生きる社会に大切なことを学んだ一年でした。そこで、ひとつの区切りを越えるにあたり、もう一度私自身の行動を見つめ直してみましょう。	YMCA六甲 研修センター (兵庫・神戸市)	山根・芝田 片山
6	2月24日(土) 25日(日)	あなたは どうする? (発題者) 関西NGO大学加盟団体	「私はだあれ?」から始まった第9期関西NGO大学。4回目以降は実際にグループを作り、考えてきました。「気づき・学び・行動」という流れの中で、何を感じ、変わりましたか?その成果を分かち合います。そして、大切なのはNGO大学修了後です。さあ、これから「あなたは どうする?」。	関西 セミナーハウス (京都・左京区)	荒川・佐伯 和田

※講義だけでなく、討議、ロール・プレイ、シミュレーションなど参加型のプログラムもとり入れ、進めます。

◆発題者(予定している発題者が変更になる場合があります。)

神田 浩史(地域自立発展研究所) 東牧 陽子(北河内ボランティアセンター)
 THE REKS BAND 早瀬 昇(大阪ボランティア協会)
 カスパー・グンブ、ドン・アピシ、ボンガス・ガンボ 藤野 達也(PHD協会)
 宮内 泰介(福井県立大学) 樺木 恵子(日本キリスト教海外医療協会)
 雨森 孝悦(とよなか国際交流協会)

第8、9期と講座の方向性が変わったが、それを引き継いだ第10期の第1回のテーマは「私はどこにいる？」(笑)。第4回テーマも「価値観」とかで、まるで自己啓発セミナーみたい(笑)。

相手のことだけでなく、自分の生活も含めて考える。生活に根差した行動を起こすこと。「世界といい関係でつながる」ということを、この頃藤野さんはよく言っていた。日常の行動の中で世界とどうつながるか。それが藤野さんのテーマだったと思う。この頃は参加者が多い時期。参加者が100人を超えることもあった。1998年にはNPO法が成立した。

■学びを行動につなげる練習の場としてのグループワーク

グループワーク(※第2章「NGO大学という“学びの場”の作り方」参照)を取り入れたのは、藤野さんが、一方的な講義だけでなく、自分たちでなにかをやる方向を考えてのことだった。第8期以前はテーマを与えられて話し合うことはあったが、本格的なグループワークやワークショップなど、構成されたプログラムはなかった。それが9期からは、講座の後半、4回目から参加者同士でグループをつくって何かしよう、という話になった。でも、運営委員にノウハウがあるわけではなかった。グループワークを始めた経緯・目的などは、瀬良レポートの中で藤野さんが説明されている。

「それまで(～第7期)は、講師の話で知識を学ぶという感じだった。そういう講座は他所にまかせて、NGO大学では6回連続で1泊2日の時間を使えるということだったので、流れをつくろう、知識ではなく行動に結びつくようなことをやろうと考えた」「ひとりでは行動を起こすのが難しいので、グループで活動することの意味を学んでもらおうと、グループワークを取り入れるようになった。多くの参加者は…社会を意識して、何か行動しようとした経験はあまりないと思う。…同じ方向性を向いた人たちの中で練習する場を提供しようという意図で始めた。(中略)運営委員は講座を1年間運営するという仲間との協働作業の機会があるが、参加者については、講座の中にそういう機会がなかった。その部分をグループワークで補おうと考えた」

1995年1月に阪神淡路大震災があり、期せずして第8期の参加者の多くが震災ボランティアに参加した。この年は後に「ボランティア元年」と言われ、NPOという言葉が広まる契機になった。その流れもあり、第9期から行動に結びつく練習の場としてのグループワークが始まった。

グループワークの説明のため参加者に配っていた「グループワークへのメモ」は、運営委員で議論を重ねたことを含め、私がペーパーにまとめ、何度も改訂していったもの。当時NGO大学の事務局を担っていたのが竹安裕美さん。私は仕事の帰り、頻りに協議会に立ち寄り、竹安さんと「グループワークどうしよう」と話合った。ノウハウはなかった。運営委員会でも議論し、竹安さんはかなりビシビシ意見を出してくれた。事務局担当ではあったが、一緒に運営委員をやってくれていた感じだった。

学んだことを行動につなげるというのは、そんなに簡単なことではない。藤野さんは常に「練習の場」と言われていたが、参加者はグループで取り組むテーマ・課題のすり合わせにとっても苦労していた。たとえば「環境」というテーマを取りあげたとしても、範囲や課題など相当広いので、それをどうすり合わせるか。

それで、いろいろな手法を取り入れてみた。「私の望む社会とは」というお題で、考えを整理していくワークを試みたり。第4～6回まで、バラバラではなく、連続性、講座の横のつながりが必要ということで、グループワーク



担当委員を設定したり。トライ・アンド・エラーというか、これやったけどどうまくいかにへんかったから、こうしたらええんとちゃうかと、グループワークを動かしていくのにかなり苦労した。

2001年にイラク空爆があり、「CHANCE！」という集まりが生まれた。そのMLの中に「私たちは微力だけれど無力ではない」という言葉があった。そういうグループワークに関連するような言葉と私の問題意識も組み入れて、「グループワークへのメモ」の形になった。

第29期関西NGO大学

グループワークへのメモ

2015.12.12 浜本裕子

1)なにを「課題」と考えるのか？

*「問題」はかかわりのなかに「立ち上がってくる」(中島浩籌)

- ・「私」と「問題・課題」のかかわりを大切に。私と課題はつながっている。
- ・なにを「課題」と考えるか、で方向性は決まってくる。

*「私」は世界(社会)をどう認識し、それを誰の側に立って、どう変えていきたいのか？

- ・課題・問題の多くは簡単には解決しない「正解」のない問題。
→問い続けること。「問題」を大事にし問題に迫り問い考え続けていく。

2)なぜ行動するのか？

*「どうしてもそう思わないではいられないこと、が湧きおこったとき、思わず行動してしまう・・・」

- ・「行動すること」が必ずしもいいこと、とは限らない。
なんのために、なぜ動くのかを考え、力を使う方向性を考えることが大切。
- ・知る、考える、も行動のひとつ。
→課題を構造的に理解する。「私」もまた「構造」のなかにいる。
だから、「私」の「行動」が「課題解決」につながる。
→「課題解決」の「主体」は「私」であること

3)「私」の可能性

- ・自分自身の可能性・力に気づき、その可能性・力を信じる。
- ・実行を通して、自分の中の勇気や希望(「欲望」)に気づく。
身体を動かすことで、諦めの気持ちを打破していく。
「わたしたちは微力です。でも、決して無力ではありません」
→ひとりではなく、人とつながっていくこと、力を合わせること

4)人と一猪になにかをすること「融合のマジック」→1+1は2以上である！

- ・自分を開いていく。ほかの人とつながる。課題を共有する。
- ・人と一緒にやることで生まれる力を信じる。仲間を信じる。
- ・一人ひとりの力が活かされること。
- ・楽しんでやる！
- ・ピラミッド型ではなく、ネットワークによる展開で。

5)企画のために

- ・なんのために、なにを、なぜ、するのか？（5W1Hを、きちんと言葉で押さえること）
- ・いま・ここにあるものを活かす(人的・物的リソース、情報など)
- ・ネットワークの活用
- ・コンセプトを共有すること(大枠の方向性の合意)
- ・手間ひまをかける。プロセスが大切。カオス、一見ムダなプロセス、ちいさな一歩、多様性を大事にする。
- ・対立、衝突をおそれない→気づき、発見、新しい価値の創造へのチャンス

6)さいごに

「学びとは、出会いと対話」(佐藤学)

「学ぶということは世界を読み取り書き換えていく力」(P. フレイレ)

「必要なのは、”Imagination & Creation” あと、信頼できる仲間とちょっとした勇氣」(小林一朗)

Change is Possible !

7)おまけ

後世に残るこの世界の最大の悲劇は、悪しき人の暴言や暴力だけではなく、
善意の人の沈黙と無関心だ。

後世に恥ずべきは、『暗闇の子どもたち』の言動ではなく、
『光の子どもたち』の弱さと無気力である (マーティン・ルーサー・キング・Jr)

人間として、何もせず、何も言わず、不正に立ち向かわず、抑圧に抗議せず、
また、自分たちにとってのよい社会、よい生活を追い求めずにいることは、
不可能なのです (ネルソン・マンデラ)

8)おまけのおまけ

闘おう、この世界のために。

ぼくたちは、この世界で生きていくしかないのだから

(映画『桐島、部活やめるんだったら』の劇中映画のセリフより)

「気づき」から「行動へ」と言っているが、私は必ずしも行動することがいいとは思わない。同じ課題に対しても正反対の行動はあるわけで。行動するには問題と自分との関わりが問われるし、自分がどの立場に立つのかが常に問われる。なにを「問題」ととらえるか、という点を大事にする必要がある。なので「グループワークへのメモ」の冒頭に、中島浩籌さん(心理学者)の言葉を置いた。

*「問題」はかかわりのなかに「立ち上がってくる」

「何か役に立つことをしたい」「かわいそうだからなんとかしてあげたい」というような“瞳キラキラ系”(笑)のひとは、私はここにいて、問題はそこ(自分の外)にある。自分とその問題とのつながりや、なぜそう思うのか、自分を問うことがない。だが、それこそを、一番大切にしたいと思っていた。

初期のNGO大学で何度も発題者をされた池住義憲さんが、よく、アンダースタンド“Understand”という言葉を取り上げていた。それは、誰のもと(Under)に立つ(Stand)かということ。「あなたを理解します」というこ

とは、「あなたの下に立つ」ということだと。その意味を考えないといけない。さらに、「そこに問題がある」と指さしたとき、ひとさし指と親指以外の3つの指は自分に向いている。ひとつの課題を指摘することは、それが自分に3倍に返ってくるという示唆。私が初めてNGO大学に参加し池住さんのワークショップを受けたときに紹介され、その数年前にスタディツアーで感じたことともつながって、とても印象に残っている。

では、どうしたらいいのか。これも確か「CHANCE！」のMLから拾った言葉。

*「どうしてもそう思わないではいられないこと、が湧きおこったとき、思わず行動してしまう…」

これはまさに運営委員の一井リツ子さん(画家)と重なる。たまたまエクアドルに旅行に行き、そこで鉱山開発の問題と遭遇して。出会ってもやり過ごす人が多い中、一井さんは行動せずにはいられなかった。そういう気持ちが湧きおこったとき、そこからもう離れられない。そういう根本のところ、原点のようなところを、大切にしないといけないと思う。

ただ、どういう方向に動くのか、が重要。なんのために、なぜ動くのか。力を使う方向性はどうか、を考えなければならない。やたらユーカリを植林したり、井戸を掘ったり、校舎だけ建てても、それはいいことなのか？ 援助なのか？ 藤野さんは、「植林して、どうするの？」「井戸掘って、そのあと誰がメンテナンスするの？」「学校つくって、どこから先生連れてくるの？」とよく言っていた。講座だけでなく、交流会の場でも問いかけていた。

■模索を重ねてできあがったNGO大学のかたち

テーマ文は第13期から少し変化する。

「…様々な課題、問題は放っておいて解決するものは少なく、誰かが取り組まねば解決しません。(中略)日本は経済大国となり、国際社会の中で大きな影響力をもつようになりましたが、課題解決への取り組みを、十分果たしているとはいえません。そして、その日本に私はいます…」

国際的な関係は、たとえば「日本からミャンマーへの協力」などと、大枠で語られることが多い。が、「日本」というとき、その中に生活している「私」がいる、という視点を常に失わずにいようということ。テーマ文のむすびも「多くの仲間と出会い、知り、経験し、考え、話す。そして、行動する私があります。その扉を、NGO大学が開きます」となっている。この頃にNGO大学の“かたち”ができ上がってきたということかもしれない。

多くの「講座」は、話し手から知識や情報を提供してもらうのが一般的。話を聞いている「私」は誰からも問われない。でもNGO大学では、常に自分の立ち位置を問う。交流会でも参加者が「海外協力隊に行きたいんです」「海外で働きたいんです」というと、「すごいねー」ではなく、「なんで？何しにいくの？」と問われる。いたるところでそういう会話があった。運営委員にも、そこを問うことが定着していったと思う。

第14期前後ぐらいは、最初の運営委員会でNGO大学は何を目指すのか、「気づき・学び・行動」と言ってるが、「なにに気づいて、なにを学んで、どう行動するのか」について運営委員それぞれが出し合い、共有していた。それがともに講座を創り運営する上で、大切なことだったと思う。

ファシリテーター研修(※第3章「さらなる学びを求めて 運営委員会という“人材育成”の場」参照)は、手間と時間をかけていた。土曜の午後の時間全部を使ってやっていたこともある。ファシリテーター研修は新人運営委員のトレーニングの場にもなっていた。先輩運営委員がNGO大学を運営した体験やエピソード、良かったこと・



改善すべき点を語ったりした。毎年、運営委員が何人か入れ替わるが、それまでの経験を継承する仕掛けのひとつになっていたと思う。

お金を払って来ている参加者も、早くから来て会場の設営を手伝ったり、2日目の朝の講座が始まる前に、各部屋の掃除が必須となっていたり。参加者もその場をつくることに参加することで成り立つ、手づくりの場。会場も小林聖心など一般社会とは隔絶されたような場所で、夜は交流会に参加するしかない(笑)。そんな風に、いたるところに細かな仕掛けがたくさんあった。

■NGO大学の先見性

グローバリゼーションが引き起こす問題は、構造的なものだが、「植林」「井戸掘り」「小学校建設」など個々の課題に注目し過ぎると、その視点が欠けがちになる。NGO大学は、「自分の足もと」を見つめること、グローバル経済のことを、わりと早い時期から取り入れていたが、それは先駆的、先見的だったと言える。

グローバル経済の構造的な問題を理解するために「貿易ゲーム」を使った(※第2章「NGO大学という“学びの場”の作り方」参照)。不公正な状況をゲームを通して実感できる。第12期の頃から、「経済」というテーマを繰り返し取り上げた。神田浩史さんや佐久間智子さん、田中優さんのお話と貿易ゲームをセットで行った。その中で、NGO大学版貿易ゲームとして、バージョンアップしていったことがある。「食料カード」や「フェアトレード」を取り入れたり、「南南協力」をうながしたり。「ジャーナリスト」の立場の人を入れたり。そういう工夫は運営委員にとっても楽しいことだった。当時まだあまり知られてなかった発題者の田中優さんに、一参加者として、名前も変えてゲームに参加してもらったりもした。

第15期の「歴史」をテーマにした回で、歴史学者の川北稔さん(大阪大学大学院文学研究科教授)をお呼びしたのも画期的。ウォーラステインの世界システム論、中心と周縁の話をもとに岩波ジュニア新書で書いてらした。植民地主義は歴史的なものだということ。まずは歴史的な視点がないと国際協力はアカンやろうと。日本は植民地について意識が薄いかもしれないが、植民地を多くもっていたオランダやイギリスの人たちは、自分たちの暮らしや発展が植民地支配によって支えられてきたことには意識がある。約400年も支配し、歴史的な長さも違うし。もともと開発教育は、植民地支配など自分たちがやってきたことへの反省をもとに、南北問題に取り組むことから始まっている。

「政治」をテーマにした回数も数回あるが、「国際協力・国際理解」の講座で、「日本の政治を問う」とか「民主主義を考える」というテーマを設定することはあまりない。グローバル経済は世界的な枠組みの話だが、政治は自分たち自身のことを問うことになる。たとえば所得の再配分を考えることは、ガバメントセクターをどう動かすかという政治課題であり、ノンガバメントとは対局にあるけれど、大事なテーマでもある。政治を企画に盛り込んだのは、とても大きなことだった。

最初に政治をテーマに取り上げたのが第16期、発題者はダグラス・ラミスさん(政治学者)。第18期で岡田憲治さん(専修大学法学部助教授)をお呼びし「政治と私のつながり」というテーマで講座を実施した。第20、21期は清水耕介さん(龍谷大学国際文化学部准教授)に発題者をお願いした。第25期にお呼びした大久保規子さん(大阪大学大学院教授)は法律学者。「私が動くと社会がよくなる！」というテーマで、社会を変えるひとつのツールとして法律のことを話してもらった。実践的なお話だった。26期で自治の話をお願いした酒井隆史さん(大阪府立大学人間社会学部准教授)は、がちがちの政治学者ではない。27期の湯浅誠さん(反貧困ネットワーク事務局局長)に憲法の話をしてもらったが、湯浅さんも憲法の専門家ではなかった。28期にはフリージャーナリストの屋良朝博さんに「沖縄を通してみる日本のかたち」を話してもらい、より実践的に、政治を身近に感じるようにシフトしてきた。第29期は岡山市議会議員の森山幸治さん、SEALDs KANSAIのメンバーを発題者としてお呼

びした。

こうしてふりかえると、政治に関する講座は、初めは理論的なことから入ったが、その後、より社会での実践に落とし込めるお話をしてもらえ人と呼んでいる。本当は、政治って身近なことで大事なことで、全然身近に感じられていない。でも、ガバメントセクターは実際大きな力を持っており、そこにどう働きかけるかは私たちの生活にとって直接的で重要なことでもある。ガバメントセクターのことだけではなく、「政治」は、私たちの生活自体を問うことでもあった。運営委員の佐久間量子さんが、PTAの役員会で NGO 大学でやってきたことが役立ったと話されていたが、まさにそういうこと。

関西NGO協議会30周年記念レセプション(2018年3月)で、代表理事の三輪敦子さんが、「NGO大学はSDGsの考え方にかなり早くから取り組んでいたのではないかと指摘されたが、まさにそのとおり。テーマだけで単発的に講座を組むのではなく、世界のあり様や課題を、講座全体で包括的・構造的に捉え考えようとしてきた、ということだと思う。半年の講座の組み立てを、各回の講座と講座のつながりを考え、歴史や政治など新たなテーマにも挑戦し、その時々旬の話題も加味しながら、運営委員が議論を重ね時間をかけてつくってきた。他にも宿泊をとまなう講座はあるが、そのあたりが、NGO大学が他の講座とは大きく違うところだと考えている。

<参考文献>

- ・浜本裕子 「市民による学びの場の創造と運営～関西 NGO 大学の実践～」『大学教育学会誌』第 25 巻、2003 年
- ・(特活) 関西NGO協議会 瀬良香織
「国際協力活動の担い手育成におけるNGO主催講座の役割と可能性 -関西NGO大学第三者評価」、2005 年

15. 番外編～アドバンスドコース～

30年のNGO大学の流れの中で、「番外編」が何度か実施された。番外編は修了生や運営委員を中心にした有志で、実行委員会形式で立ち上げた企画であるが、本編と連動したテーマで行われた。

開催日/ 会場/参加者数	会場/参加人数	発題者・内容
1997年5月17～18日 会場:應典院 参加者:112人 (実行委員含む)	関西NGO大学10周年イベント 「こんにちは? ～これからの関西NGO大学～」	寺岡寛 (第2期修了生、中京大学) 秋田光彦 (第9期修了生、應典院住職) 小園直樹 (地球市民アカデミア)
	NGO大学は1987年に国際協力の担い手の育成を目的としてスタートし、以降もNGOや国際協力活動に関心のある市民を対象とした講座を実施してきた。NGO大学を修了し、NGO職員やボランティアとして、国内外で活躍する人も多くNGOを立ち上げた人も。10年目を迎え、過去の修了生が一同に集まる場として企画された。 1) 過去10年間の成果を振り返る 2) 修了生のネットワークを作る 3) これからのNGO大学について語り合おう	
1998年9月5～6日 会場:應典院	関西NGO大学・地球市民アカデミア 東西合同合宿	大阪のフィールドワーク 案内人:平井正治 氏
	市民による学びの場である「関西NGO大学」と「地球市民アカデミア」。それぞれの企画・運営の担い手の経験交流を目的に実施。これから一緒にできることを考えた。大阪のフィールドワークを通して日本の抱える課題を考えた。	

<p>1999年11月6～7日</p> <p>会場: 神戸学生青年センター</p> <p>参加者:約50人</p>	<p>関西NGO大学 アドバンスコース 「NGO大学 今とこれから ～21世紀に向けて～」</p> <p>1)自分の足で歩いて考えよう～関西各地のフィールドワーク～ 《神戸発・世界の食と暮らし探訪》《変わりゆく街・釜ヶ崎》 《銭湯からあふれる生活・文化～3都銭湯巡り》《舌で味わおう世界の食文化》</p> <p>2)NGO大学の修了生やこれから国際協力に関わる人たちの交流の場</p> <p>3)12年間の振り返り・これからどうする？～新たな仲間づくり～</p>
<p>2000年6月24～25日</p> <p>会場: 神戸学生青年センター</p> <p>参加者:34人</p>	<p>新・貿易ゲームをやってみよう！！</p> <p>「貿易ゲーム(The Trading Game)」は、NGO大学でも多国籍企業などの要素を加えたアレンジをし、経済格差を構造的に理解する導入として実施してきました。一方、イギリスでは数年前に「新・貿易ゲーム(Market Trading)」が作られており、南北問題のみならず世界の生産・流通・消費と私たちの生活に携わる関係を反映するよう工夫されています。今回はこの「新・貿易ゲーム」を通して、貿易が私たちの生活や世界の国々に及ぼす影響を考ます。また、新・貿易ゲームの改善点の意見交換も行います。</p>
<p>2015年10月17日</p> <p>会場: 小林聖心女子学院 ロザリオヒル</p>	<p>映画「首相官邸の前で」 自主上映会&トークシェア</p> <p>3.11以降、脱原発をめざす首相官邸前での抗議行動は、これまでの市民運動とは違ったスタイルで、一人ひとりの強い意思を感じるものでした。こうした動きの背景には「民主主義の危機」というキーワードがあります。NGO大学では29年間、行動の主体は自身にあり、各自が果たすべき役割について考え、判断できる人材育成をめざしてきました。3.11以降の脱原発の動きを追った『首相官邸の前で』の上映会を開催します。映画終了後は民主主義とは何か、一人ひとりの問題意識を共有し、「これから」を考えたいと思います。</p>

【アドバンスコースちらし】

関西NGO大学10周年記念イベント

こんなんで？ これからのNGO大学

関西NGO大学は1987年、国際協力の担い手の育成を目的としてスタートしました。それ以降、NGO活動に関心のある市民を対象とした入門講座を行ってきました。このNGO大学を修了し、NGO職員やボランティアとして、国内外で活躍されている人も多く、実際にNGOを作った方もいます。10年目を迎えた今、過去の修了生が一同に集まる場としてこのイベントを企画しました。このイベントではこんな事をしたいと思っています。ぜひとも皆様のご参加をお待ちしております。

① 過去10年間の成果を振り返る
② 修了生のネットワークを作る
③ そしてこれからのNGO大学について語り合おう

日時： 第1日目 5月17日(土)19時～21時
第2日目 18日(日) 9時～15時

場所： 應典院 (地図参照) TEL:06-771-6741
〒543 大阪市天王寺区下寺町1-1-27

参加費： 3,500円 (両日参加が基本。1日参加の場合も同額)
◆当日お支払いください ◆宿泊は各自で確保してください

対象： 関西NGO大学参加者、運営委員、講師、関心のある方
締切り： 4月30日(水)

その他： 親子参加可。ベビーシッターもご相談に応じます。

申込・お問合せ： 申込みはききて(FAXでも可)。電話受付はいたしません。
関西セミナーハウス 〒606 京都市左京区一乗寺竹の内町23
TEL:075(711)2115 FAX:075(701)5256 担当:荒川まで

主催： 関西NGO大学10th実行委員会
共催： 関西NGO協議会 協力： 應典院寺町倶楽部

プログラム

5月17日(土) 18:00 受付開始
18:30 オープニング
19:00 セッション1「10年間のふりかえり」
アンケートの報告、あの修了生は今…
21:00 交流会「時間を越えたつながりをつくらせ！！」
◇自由参加。費用はカンパです。差し入れ大歓迎！！

5月18日(日) 9:00 セッション2「パネルディスカッション『10年を振り返る』」
◇「地球市民アカデミア」修了生・元運営委員
◇第2期修了生・元運営委員 寺岡 寛 さん(中京大学)
◇第9期修了生 秋田 光彦 さん(應典院住職)
進行役:第5期修了生・元運営委員 福田 真弓 さん(予定)

11:00 セッション3「グループディスカッション」
これからのNGO大学に期待すること、そして、自分とのかかわり

12:30 昼食(各自で食事を用意してください)

13:30 全体会・まとめ
「こんなんで？ これからのNGO大学」

15:00 終了

関西NGO大学アドバンスコース

**自分の足で歩いて考えよう！
～関西各地のフィールドワーク～**

関西NGO大学は1987年、国際協力の担い手の育成を目的としてスタートし、以来12年にわたってNGO活動や国際協力に関心のある市民への「学びの場」の提供を行ってきました。今回、さまざまな分野で活躍しているNGO大学修了生が中心となってこのイベントを企画しました。このイベントでは新たなつながりを得て、今後の継続的な活動につなげていきたいと思います。NGO大学を知っている人、知らない人、みな様のご参加をお待ちしています！！

【日時】 1999年11月6日(土)～7日(日)

【会場】 神戸学生青年センター (地図参照) および関西近辺
神戸市灘区山田町3-1-1 TEL:078-851-2760

【対象】 関心のある方などなだでも

【主催】 関西NGO大学アドバンスコース実行委員会

【後援】 関西NGO協議会、神戸学生青年センター

【参加費】 5,800円 (宿泊費、夕朝食代、会場費、事務費など)
＊宿泊なしの場合は3,000円。1日参加の場合も同額。ただし2日目のみ参加は無料。当日受付にてお支払いください。
＊フィールドワークの費用(交通費など)は個人負担となります。

【申込】 ①コースを選んでいただき、申込みがきき申込みください。
②10月下旬に、集合場所・時間などの詳しい案内をお送りいたします。
③当日、集合場所に時間厳守でお集まり下さい。
＊コースによって集合時間が異なります

【申込締切】 10月17日

【その他】 託児および介助を希望される方は申込期日までにお知らせください。

【お申込】 申込みはききて(FAXも可) 電話受付はいたしません
〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30 関西NGO協議会気付
TEL/FAX: 06-5377-5144 E-mail:kyoso@jin.zen.or.jp

【コース概要】

<p>《神戸港・長田区コース》 テーマ: 神戸発・世界の食と暮らし探訪</p> <p>※神戸は昔から世界からあふれるもの、情報、人が集まる場所です。私たちのまわりに世界から何が集まってきたのか、そして、世界の暮らしと私たちの暮らしの境目がどう変わっているのか、この神戸ではいかに考えたいと思いますか。</p> <p>コース:神戸港(輸入食品倉庫見学)→カトリック聖公会(アジア女性自立プロジェクト)</p>	<p>《釜ヶ崎コース》 テーマ: 変わりゆく街・釜ヶ崎</p> <p>※日本の高度成長を影で支え続けてきた釜ヶ崎。この釜ヶ崎も時代の流れとともに「脱釜ヶ崎」「ニューカマー」「失業」などの課題を抱えるようになりつつあります。この釜ヶ崎の中、釜ヶ崎がどう変わっていったのか、現場を歩きながら考えます。</p> <p>コース:JR新当番→西成労働福祉センター→心寺→天王寺公園→通天閣→新世界</p>
<p>《銭湯めぐりコース》 テーマ: 銭湯からあふれる生活・文化</p> <p>※お風呂だよ、全員集合、いい湯だな、風呂に入れば皆皆。湯加にも心もゆたかになると、見えてきませんか？ 銭湯って？ 男湯・女湯？ 脚土文化？ 風呂の湯？ 生活って？ ほらほら、湯気が溢れ出すのがこころ。さあ銭湯めぐりの旅に、いざ、ハア・ヒア・バンバン</p> <p>コース:京都駅(又は四条烏丸)集合→銭湯(京都)→大阪→神戸</p>	<p>《夕食作りコース》 テーマ: 舌で味わおう世界の食文化！</p> <p>※「食」と聞いてみなさん何を思い浮かべますか？ 食は生活の糧であるとともに、生きる楽しみでもありです。本コースで夕食を作りながら異文化を考えてみましょう。料理の得手・不得手に関係なく関心のある方お待ちしています。</p> <p>メニュー:本定ですがハンガリーなどアジア系エスニック料理数点。場所は神戸学生青年センター内のキッチンです。</p>

※各コースの参加には交通費と多少の実費がかかります。また、上記コースは多少の変更の可能性もあります。

第2章：NGO大学という“学びの場”の作り方

1. NGO大学の組み立て方

ここでは企画、運営、評価など、NGO大学という“学びの場”がどのように作られていたのかを整理する。

NGO大学は9月から始まり、月1回、1泊2日の講座を実施。翌年2月に終了する全6回の連続講座である。この6回の講座を作り上げるためには、企画、広報、参加者対応、講座当日の運営、終了後の評価などのプロセスがあり、全てを含めるとほぼ1年間の時間と作業・労力が注ぎ込まれている。またそれらを担う人材の確保も必須である。NGO大学1年間の作業行程を表にまとめた。

これらの作業は関西NGO協議会事務局と、毎年新たに組織される「NGO大学運営委員会」が役割を分担し実行されていた。「運営委員会」については後述する。

【1年間の作業行程】

日程	企画/運営/実施内容	事務作業
4月	今期の運営委員候補の絞り込み、意思確認、決定	・運営委員候補者への連絡
5月	【第1回運営委員会】 ・運営委員の顔合わせと運営体制の確認 ・運営委員会、合宿、ファシリテーター研修、講座の日程決定 【第2回運営委員会】 ・全体テーマ・ねらいを決定 ・第1～6回講座までの流れを確定。担当回を決める。 ※一人2講座を担当する 【各担当回】 ※各回ごとに必要に応じて打合せ ・各回ごとに企画内容・ねらい・発題者を協議する。	・運営委員会議事録作成 ・連絡用メールアドレス作成 ・会場の確保 ・広報準備 ・各担当回との連絡調整 ・合宿会場の手配
6月	【第3回運営委員会・合宿】(1泊2日) ・企画内容・発題者・呼びかけ文の確定→パンフレット作成へ 【第4回運営委員会】 ・今期NGO大学が“目指すこと”を協議 ・各回進捗状況の共有と助言(発題者関連など) ・広報戦略について 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。発題者への講師交渉	・広報用ポストカード原稿作成 ・広報用パンフレット原稿作成 ・ホームページに募集要項を掲載 ・講師交渉 ・パンフ、ポストカード印刷
7月	【第5回運営委員会】 ・各回企画の進捗状況を報告・共有・助言 ・募集状況について共有。広報について議論 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。	・広報活動。(パンフレット、ポストカード、各メディアへ掲載依頼など) ・申込み受付開始
8月	【ファシリテーター研修】 ・主に初めて運営委員を担う人を対象に実施 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。	・広報活動
9月	【第6回運営委員会】 ・第1回講座の企画・運営事項の確認 ・各回企画の進捗状況を報告 【第1回講座】(1泊2日)	・申込者対応・宿泊・会場手配 ・第2回の広報 ・会計処理 ・講座当日の事務関連

	<ul style="list-style-type: none"> ・講座後の運営委員会の評価会～反省と課題～ ・第2回講座以降の企画・運営事項・進捗の確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回講座の記録作成
10月	【第2回講座】 (1泊2日) <ul style="list-style-type: none"> ・講座後の運営委員会の評価会～反省と課題～ ・第3回講座以降の企画・運営事項・進捗の確認 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。	<ul style="list-style-type: none"> ・申込者対応・宿泊・会場手配 ・第3回以降の広報 ・講座当日の事務関連 ・第2回講座の記録作成
11月	【第3回講座】 (1泊2日) <ul style="list-style-type: none"> ・講座後の運営委員会の評価会～反省と課題～ ・第4回講座以降の企画・運営事項・進捗の確認 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。	<ul style="list-style-type: none"> ・申込者対応・宿泊・会場手配 ・第4回以降の広報 ・講座当日の事務関連 ・第3回講座の記録作成
12月	【第4回講座】 (1泊2日) <ul style="list-style-type: none"> ・講座後の運営委員会の評価会～反省と課題～ ・第5回以降の講座の企画・運営事項・進捗の確認 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。	<ul style="list-style-type: none"> ・申込者対応・宿泊・会場手配 ・第5回以降の広報 ・講座当日の事務関連 ・第4回講座の記録作成
1月	【第5回講座】 (1泊2日) <ul style="list-style-type: none"> ・講座後の運営委員会の評価会～反省と課題～ ・第6回の講座の企画・運営事項・進捗の確認 【各回担当】 ・随時、各回担当で企画内容を協議。	<ul style="list-style-type: none"> ・申込者対応・宿泊・会場手配 ・第6回の広報 ・講座当日の事務関連 ・第5回講座の記録作成
2月	【第6回講座】 (1泊2日) <ul style="list-style-type: none"> ・講座後の運営委員会の評価会～反省と課題～ ・今期、全体の評価に向けて、「評価シート」の各自記入 	<ul style="list-style-type: none"> ・申込者対応・宿泊・会場手配 ・講座当日の事務関連 ・第6回講座の記録作成 ・修了証の作成
3月	【評価会】 <ul style="list-style-type: none"> ・今期、全体の評価、および来期に向けての提言 ・報告書作成の打合せ、作業分担、日程調整 	<ul style="list-style-type: none"> ・評価シートまとめ ・会計、事務処理、 ・報告書取りまとめ

【運営委員の構成】

NGO大学の企画・運営・評価を担う「運営委員」は毎年更新される。基本的には構成メンバーの半数がNGO大学修了生、半数が加盟団体のスタッフで10～20名、ほぼボランティアで構成されている。NGO大学後半になると、加盟団体からの派遣が減少し、修了生の割合が多く占めるようになる。

【各回担当】

運営委員は全6回の講座のうち、各自2回を担当回として選び、その企画や講師選定、当日の進行、記録、報告書作成を担った。運営委員が全員参加する「運営委員会」とは別に、随時、担当回で集まり、企画を練り上げるミーティングを重ねた。時には発題者に直接会いに行き交渉する、ということも行われた。

【合宿】

各回の企画の概要が立ち上がった頃の6月に、1泊2日の合宿を行う。各回の担当者はこの場で担当回のねらいや発題者、プログラムなどをプレゼンし、他の運営委員からの助言・ダメ出し、を得る。そこから担当回ごとに再検討し、具体的な文言、“呼びかけ文”に落とし込む作業を行う。時には夜通しの作業となった。この行程を経て、広報用のパンフレット、ポストカード、ウェブサイトが作成される。

【広報戦略】

受講生を募集するために、どのように広報していくのか、NGO大学30年の中で、後半になるにつれ、受講生が集まらず苦戦する。パンフレットなどの紙媒体のみならず、ウェブサイト、ツイッター、ブログなど多様化する広報媒体を取り込む努力が問われた。イベントや口コミなども有力な手段であった。

【報告書作成】

各回講座では、担当運営委員が分担して、講座内容をパソコンに記録。加えて録音も行い、可能な限り文字起こしを行い、報告書を作成。第1回講座から第6回講座までの報告書を集約し、報告書を作成する。

【講座後の運営委員会】

1泊2日の講座終了後、講座を振り返り、評価、今後に向けての改善点を整理する運営委員会が行われる。受講生から回収した「ふりかえりシート」をその場で共有して、受講生のニーズを汲み上げる。ここでの評価、反省、提言は、次回以降の講座に反映される。

【評価会】

全6回の講座終了後、運営委員・事務局による「評価会」が行われる。受講生の「ふりかえりシート」に加え、運営委員が記載した「評価シート」をもとに、講座をふりかえり、評価、次年度以降への提言をまとめる。この評価会をもって、この期の運営委員会は解散する。

【N大コラム】「広報のやりくり」

佐久間量子 (NGO大学運営委員)

NGO大学をより多くの人に知ってほしい、参加してほしいと、広報について様々な取り組みを行った。

【紙媒体:全体パンフレットやチラシ】

A4・3つ折り2色刷りのパンフレットを手にとったのが受講のきっかけという方も多くいると思う。このタイプのパンフレットは第1期から第18期まで作成された。加盟団体に配布し、公的団体に配架を依頼した。内容を検討する運営委員会は泊りがけで、できるだけ企画意図が伝わるようにと校長や副校長などから一言一句に至るまで指摘が入った。次の朝までにその修正案を提出するという、運営委員としてはかなりの労力を伴う作業だったことは忘れられない。第19期以降は、A4・2つ折りのパンフレットになり、文字も大きく、情報量も増えた。運営委員でデザイナーの三浦弘志さんに協力してもらい作成した期(20~24期、26期)もある。使用されている写真は運営委員や関西NGO協議会加盟団体からの提供である。

NGO大学は全6回の連続講座であるが、各回参加も可能で、各回ごとの単発チラシや、郵送や、カフェなどより多様な場所での設置をねらって、三浦さんデザインによるポストカード、連絡先のみを記した名刺サイズのチラシも作成した。



【電子媒体・SNS】

阪神大震災(1995年1月)後、運営委員の貞富信裕さんが中心となって、関西NGO大学メーリングリストが立ち上がり、情報共有の範囲や頻度、速度は劇的に変化した。ツイッター、フェイスブックも利用した。

【N大広報チーム“ndai.net”立ち上げ】

参加者数が30名を下回り、運営上ぎりぎりの状況になってきた第20期、グループワークの1グループとして、運営委員が「広報チーム」を立ち上げた。運営委員の三好力さんが中心となって、独自のホームページ(ndai.net)の作成と内容デザイン、管理ルールの策定、ブログの充実、検索ヒット対策などを検討し、第21期の広報で実践した。現在でも ndai.net は各種お知らせ、過去のアーカイブとして機能している。この他にも広報チームでは、全体パンフレット内容や申し込み/問い合わせフォームの見直し、過去の参加者アンケートの分析も行った。

【各メディアへの掲載】

広報のため、朝日新聞や毎日新聞、神戸新聞などに掲載依頼を行った。国際協力と関係のある雑誌やメーリングリスト、各運営委員がそれぞれ情報伝播力があると判断したメディアにアプローチした。2013年には雑誌「ソトコト」(No. 172、10月号)に“全国の通いたくなるソーシャル系大学”のひとつとして紹介された。(※「資料編」を参照)

【そのほかの広報のとりくみ】

対面での「事前説明会」を何年かにわたって行った。参加者アンケートから「口コミ」で申込をする割合が多かったためである。直接話すことで講座の様子がより伝わった。缶バッジを作成して、グッズとして講座当日等で販売した。第24期では西日本最大の国際協力のお祭り「ワンワールドフェスティバル2011」にNGO大学としてブースを出展。「修了生の今」という大きな樹をブースの中央に配し、40名以上の修了生からのメッセージを貼り出すとともに、高校生からシルバーの方々までのべ2万人の来場者と運営委員が積極的に交流した。国際協力の各分野で活躍する修了生や講座参加者との交流の場となった。

2. NGO大学の主軸～その考え方、組み立て方、手法について～

■「気づき」→「学び」→「行動」のプロセス

NGO大学が大切にしてきたこと、講座を企画・運営、実施する際に主軸となっているのが「気づき→学び→行動」のプロセスと考え方である。この考え方は各回の講座でも取り入れられているが、全6回の流れの中でも意識的に組み込まれている。このNGO大学の主軸となっている「気づき→学び→行動」のプロセスのうち、「行動」につなげるためのしかけが「グループワーク」である。このプログラムについては後述する。

■学びの手法・・・参加型/ワークショップから見るNGO大学

NGO大学では一方的に発題者の講義を受けるだけではなく、参加者が自ら参加し能動的に学ぶことを大切にしてきた。これは先述した「気づき→学び→行動」の考え方にも合致している。地球上に存在しているあらゆる課

題が、自分とつながっていることへの気づき、そしてその課題を自分事として捉え、その解決のために自ら行動を起こしていく。このことを大切にしてきたNGO大学は、その講座スタイルもまた「能動的」であり「参加型」であるべきだと考えている。

この「参加型手法」はNGO大学30年の流れの中で、かなり初期の頃から取り入れられている。特に「自己発見」というテーマで池住義憲氏が第2期(1988年)から第6期まで毎年、参加型手法を取り入れた講義を行っている。NGO大学で「自己発見」というテーマを取り上げた意味・背景については第1章の「NGO大学は何を目指し、何を学んできたのか」に述べている。当時、講義形式が主流であった中で、参加者が能動的に参加し、他の参加者とやり取りし、相互に学び合う中で、気づきを得ていく、という参加型の手法は新鮮であった。この「参加者主体」という姿勢は、その後のNGO大学の大きな特徴のひとつとなっていく。そして「自己発見」というテーマは、その後「当事者性」「気づき」といったキーワードに引き継がれていった。

参加型手法を取り入れた相互に学び合う場づくりについて、副校長の浜本裕子氏は「学びの共同体」と表現している。以下、浜本氏の文章を紹介する。

(引用元:「市民による学びの場の創造と運営～関西NGO大学の実践～」 より抜粋)

2003年 浜本裕子 大学教育学会誌第25巻)

「学びの共同体」としての関西NGO大学

このような気づきや学びを可能にしているのは、NGO大学が「学びの共同体」として機能しているからではないかと考えている。

1泊2日の講座の持つ意味は大きい。生活をともにすることにより、参加者の間にコミュニティが形成され、持続してかかわる「場」が形作られていく。さまざまな年代・職種の人と、夜を徹して語り合うのは得がたい経験といえる。そのなかで、お互いの経験から学びあうことが行われていく。

私自身、NGO大学に参加して新鮮だったのは、違う年代の人たち、違う職業の人たちと話をすることだった。それは学校教育のなかでは得られなかったことであった。目の前にいる人の話を聞くことから学ぶことは、ほんとうに大きなものがある。

また、NGO大学は、フラットな学びの場であるよう意識している。たとえば講師を「発題者」と表示し、「先生」と呼ばないようにしている。同じ「場」のなかで、参加者どうし、参加者と発題者、参加者と運営委員、など相互で学び合う場でありたいと考えている。

人と出会いつながり学び合う場であるためには、具体的に「人」と出会い、自分を開いて他の人とつながり、課題を共有していくプロセスが必要である。そのプロセスを、1泊2日の時間の共有が助けしているといえよう。「人」と出会うこと、受け入れられることこそ、そのなかで参加者は元気になっていくようだ。その経験は、NGO大学を修了した後も、参加者一人ひとりの大きな力になっているように思われる。

(一部抜粋)

【ワークショップという言葉】

ここからは、NGO大学でよく採用された「ワークショップ」について、いくつか紹介する。

最初に「ワークショップ」という言葉について説明する。近年こうした講座に限らずイベントや学習会、展覧会、ビジネス研修や学校教育の現場などでも一般的に使われるようになった「ワークショップ」という言葉。NGO大学では頻繁に使われていて、過去の資料をさかのぼると、第3期(1989年)に初めて「ワークショップ」という言

葉が見られる。発題者は前述した池住義憲氏で、テーマは「第三世界と自己発見」である。

今日、一般的に使われている「ワークショップ」という言葉は、何らかのテーマや趣旨のもと、参加者が主体的に参加しながら共に考え、学んでいく行程、あるいはその手法の意味で使われることが多いように思われる。「ワークショップ/ Workshop」という言葉を英和辞書で調べると「工場」や「工房」といった意味の記述がある。そこで自動車を造る工場を例に「ワークショップ」の意味について考える。

自動車工場では自動車を造り販売するという共通の目標をもって、さまざまな能力や考えを持った人たちが協力し合いながら働いている。車体のデザインをする人、エンジンの設計をする人、組み立てや塗装をする人、販売のために営業や宣伝を担う人など、それぞれの能力や知識、経験などを発揮しながら目標を達成しようとしている。これらのことを「学びの場」に当てはめてみる。その「場」にはさまざまな個性や能力、知識、経験、価値観を持った参加者が集い、自分の持っているそれらの「もの」を自分の外に出し、ほかの参加者と共有し、お互いが教えあい、学びあえる空間を作り出している、その行程がワークショップである。そのため参加者が多様(性別、年齢、国籍、属性など)であればあるほど、その気づきや学びも多様になり、深まる。同じワークショップを行っても、参加者が異なるとその学びも異なってくる。参加者が主体となり相互に学び合う場を作り出すのが「ワークショップ」である。

【グループディスカッション】

NGO大学では各回講座で設定されたテーマ(課題)に応じて、多様なワークショップを活用し、課題と自分とのつながりに気づく。さらに、その分野の専門家や当事者を発題者として招聘し、その課題を自分事として「学び・知る」というプロセスで講座を組み立てている。この時点で参加者は多くの気づきと学びを自らの中に「インプット」している。通常の講演会や学校での一方向の授業、視聴覚教材などは、この「インプット」の段階で終わることが多い。大切なのは自分の中にインプットしたものを、自分の外に「アウトプット」することである。自分の中で留めておくのではなく、自分なりの考え方や表現に変換し、他者に伝えることで、初めてインプットしたことが評価され、それが他者や社会に影響を与え得るのである。この「アウトプット」の大切さについては、第1章で「なぜ“表現”について考えたのか」でも述べた。



この「アウトプット」のしかけとしてNGO大学で最も多く使われた手法が「グループディスカッション」であろう。発題者の講演を一方向的に「インプット」するのではなく、その後、気づいたこと、学んだこと、考えたこと、疑問点などを自分なりに整理し、まとめ、他の参加者と少人数のグループになりそれを共有する。お互い学び合う場を作り、多様な価値観にふれ、考えを深める。そこで生じた新たな疑問や確認点などは、再び発題者にぶつける。このような「アウトプット」の場として、グループディスカッションはNGO大学にとって不可欠なワークショップであった。

【ウーリーシンキング】

初期の頃によく取り上げられたテーマ「南北問題」は、その後「私と世界のつながり」というテーマで考えるように変化・発展していった。このテーマの回でよく行われたワークショップが「ウーリーシンキング」である。

「ウーリーシンキング(Woolly Thinking)」のウールとは「毛糸」の意味である。地球上には地球温暖化や環境破壊、人権侵害、食の安全、戦争、貧困、格差など多くの課題が山積している。しかし個々の課題は、それぞれが独立して存在しているのではなく、直接的、間接的、構造的に関連しあい、まるで毛糸のように複雑に絡み合っている。ウーリーシンキングは様々な課題が、どのように関連し合っているのか、課題と自分とはどうつながっているのかを、実際に毛糸を使い視覚的・体感的に捉える。さらに、課題解決の当事者性について考えることもねらいとしている。



まず参加者は2~3人×10グループに分かれる。それぞれのグループに課題が割り当てられる。課題は「大量消費社会」「持続可能な社会」「子育て」「排外主義」「テーマパーク」「教育の問題」「国際協力」「貧困」など。講座のテーマに応じて選ぶとよい。各グループはそれぞれの課題についてブレインストーミング。各グループは円形に位置する。次に、与えられた課題と他のグループの課題との関連性を見出し、その理由を議論。そうして相互の課題につながりが見つかれば、その2つの課題(グループ)どうしを毛糸でつなぐ。別の課題とも関連があれば、この作業を繰り返す。しだいに毛糸は「くもの巣」のように絡み合っていく。

ある程度の「くもの巣」ができれば、毛糸をつなぐワークを終了し、「ふりかえり」を行う。ポイントは「気がついたこと、考えたこと、感じたこと」「意外なつながりはあったか」「この“くもの巣”は現実の社会では何を表しているか」「このつながりの中で、あなたはどこにいる？」

このウーリーシンキングで考えたい、伝えたい事は以下の3点である。

1)すべがつながっている

それぞれの課題は個々が独立して存在しているのではなく、構造的につながり相互に関連し合っている。ある課題に取り組むとき、その課題と他の課題との関連性を理解し、課題解決に取り組むことが必要である。

2)自分もつながっている

「このつながりの中で、あなたはどこにいる？」という問いかけの意図について。課題どうしの関連性だけではなく、そのつながりの中に自分も存在していることの気づきが大事である。ふりかえりでは、実際に「くもの巣」の一部を揺らす。すると、その揺れが全体に伝わる。このことは、自分が動くことが他者および課題に対して、なんらかの影響を及ぼすことを象徴している。つまり課題を解決する「力」は自分の中にあるのだ。

3)課題解決に必要なことは？

まるで“くもの巣”のように、色とりどりの毛糸が絡まり合っている状態で、参加者はふりかえりを行う。最後の問いは、「このくもの巣をどうやってほどきますか？」。絡まりあった毛糸は、はさみで断ち切ってしまえば簡単に片付けることができる。しかし参加者にはあえて毛糸を端から巻き取ってもらう。とても面倒で時間のかかる作業であるが、これは課題を解決するプロセスでもある。ひとりで課題を解決するのはなかなか難しい。課題につながるすべての当事者の協力が、その解決への大きな推進力になることに気づく。

【貿易ゲーム・NGO大学バージョン】

第1章の「NGO大学は何を考え、何を学んできたのか」でも述べたが、NGO大学が取り上げたテーマの中で3番目に多いテーマが「経済・グローバル化・格差」である。30年で実施した講座のうち19回、採用されて

いる。このテーマを取り扱う講座でよく行われたワークショップが「貿易ゲーム」である。

「貿易ゲーム(The Trading Game)」は、1982年にイギリスのNGO「クリスチャン・エイド」によって制作されたワークショップである。主に金やモノや情報が国境を越えて行き来する「自由貿易」が、不公正な状態、格差、課題などを引き起こしている仕組みを体感し、構造的に理解することのできる優れたシミュレーション・ゲームである。そして、「経済・グローバリゼーション・格差」の問題が、私たちの生活とつながっていて、その解決のために、私たちは何ができるのかを考えることがねらいである。



具体的な内容を文章で伝えるのは難しいが、大まかに述べてみる。参加者は8～15グループに別れ、それぞれのグループが「仮想国家」となる。各グループに「資源」である紙、「技術・道具」であるハサミ、分度器、コンパスなどの文房具、それらを売買するための紙幣が配られる。各グループは与えられたものを活用して「製品」を作り、「世界市場」に買い取ってもらう。製品には「規格」が定められており、逸脱したものは不良品として買い取りを拒否される。目標は「どのグループよりも儲けること」「最もお金を獲得したグループが勝者」である。製品を作るにあたって、他のグループと資源の貸し借り・買い取りや、道具・技術の提供、資金融資などの交渉は可能である。儲けるため各グループは、あらゆる事を考え、実行する。

ここで、貿易ゲームの最大のポイントを明かすと、各グループに与えられた「資源」「技術」「資金」はそれぞれ異なっていて、格差がある状態でゲームが進行する、ということである。通常、多くのゲームはスタート時点で、参加者は公平で同じスタートラインに付き、ゲーム終了後にどれだけ他者に勝っているのか、を競う。しかし貿易ゲームはスタート時点で各グループに格差がある状態で始まる。具体的には、Aグループには潤沢な「資金」「資源」「道具」が与えられている一方、Dグループにはほとんど資金がなく、道具はなし。「資源」である紙が与えられている状態から、ゲームをスタートする。資源や道具があるAグループはすぐに「製品」を生産し、市場に売り資金を得ることができる。しかし資源しか持たないDグループは、道具や技術がないために生産ができない。各グループは自分と、他のグループの格差については知らされていないが、ゲームが進行するに従い、その格差に気づいていく。しだいに技術や道具を持つ他のグループとの交渉が始まる。たとえば資源の少ないAグループに対し、資源を譲渡する代わりに道具を提供してもらう。また本国では技術がないため、技術のあるA国に「出稼ぎ」に行く。時には、無造作に机の上に置かれた他グループの資源(紙)を密かに「盗む」「略奪する」ことも発生する。つまり、貿易ゲームの目的である、「できるだけ儲ける」ために、様々なことがその場で起きるのである。

ある程度時間が過ぎた時点でゲーム終了。それぞれのグループがどれだけ儲けたのかを一覧表に集計する。ゲーム開始時点で所有していた財産が、ゲーム終了後にどれくらい増えているのかを確認する。ほぼ結果は、A国とD国の財産の格差は拡大する。つまり、経済力や資源、技術、情報など、格差があるなかで自由貿易を行うと、その格差がさらに広がっていくことを、参加者は実感する。他にも、ゲーム中で起きた様々なエピソードを全体で共有し、それぞれの出来事を現実の社会に置き換えていく。この振り返りを通して、経済格差やグローバリゼーションもたらす課題と自分とのつながりを確認していくことができる。

オリジナルの貿易ゲームは構造理解を促すために、大胆に単純化、簡略化されているが、実際のグローバリゼーションを理解するにはもの足りない。そこでNGO大学では、さらに現実に近づけるため、いくつかの要素を加味した「貿易ゲーム・リアルバージョン(N大バージョン)」を制作した。具体的には「多国籍企業」「市場の性格」「人口と国土面積」「市場価格の変動」「情報格差」「飢餓」「天候・天災」「情報格差」などの要素を加えた。

貿易ゲームは、それを体験した後に発題者から「経済・グローバル化・格差」の具体的な事例、最新の情報などリアルな講義を受け理解を深め、そして課題解決に向けて自分の行動を考えるための、「相性のいい」ワークショップであった。

※貿易ゲームの詳細は「開発教育協会(DEAR)」のウェブサイトを参照。教材の購入も可能。

→ 認定非営利活動法人 開発教育協会 「新・貿易ゲーム～経済のグローバル化を考える～」

<http://www.dear.or.jp/books/book01/1149/>

【N大コラム】「N大と関西NGO協議会加盟団体とのかかわり」

佐久間量子 (NGO大学運営委員)

関西NGO協議会の加盟団体には、さまざまな形で講座に参画していただきました。

1. 運営委員

講座がスタッフの養成と団体間の交流を目的としてスタートしたことから、初期の頃(第1～3期)は協議会加盟団体の職員と、趣旨に賛同して加わった少数のボランティアが運営委員を担っていました。その後、国際協力や国際理解に興味のある方たちと一緒に学ぶと形態となってからは、運営委員の半数が加盟団体から、残りが修了生の構成となりました。しだいに業務が多忙になり、加盟団体からの参加に限られるようになり、最終的には、ほぼ修了生のみで運営することとなりました。

2. 発題者

講座で取り上げるテーマによっては加盟団体スタッフやボランティアが発題者となって、参加者に問題提起/情報提供を行いました。また8期からは、主に第6回(最終回)に加盟団体紹介の時間を設け、職員やボランティアが参加者に直接その活動を説明しました。

3. 参加者

国際協力の全体像や背景を学ぶ研修の場として、加盟団体の新人スタッフやボランティアが、講座に参加しました。

4. 広報協力

N大のパンフレットを加盟団体事務所に配架するほか、機関誌等で講座開催を周知・広報協力していただきました。また、加盟団体のパンフレットやイベントちらしを講座会場に配架しました。

3. 行動へのしかけ～グループワーク～

NGO大学が「グループワーク」という“しかけ”を考え、取り組み始めたのは第9期(1995年)である。これ以前は、NGOや国際協力機関が取り組み、解決すべき「課題」について取り上げ、知り、学ぶことに重点が置かれていた。しかし、それらの課題について学び、知識を増やしただけでは、その課題解決にはつながらない。大切なことは、それらの課題と自分とのつながりに気づき、その解決に向けて、自分がどう関わられるのかを考え、行動に移していくことである。NGO大学では「グループワーク」という行動への「しかけ」を編み出し、講座に組み込んでい

った。

NGO大学は各期6回の連続講座(単発参加も可能)である。講座の中盤、第4回でグループワークが始まる。最初は参加者各自が、社会に対する関心を整理する作業を行う。自分は何に関心をもち、どんな社会、将来を望むのか。「私の望む社会」というワークシートを活用しながら、自己分析・整理を行う。次に、今もっとも関心があり、取り組みたいテーマをキーワードにする。そのキーワードを他の参加者と共有しすり合わせ、同じ関心を有する参加者どうしてグループを作る。そして多様な考え方、価値観をぶつけ合いながら、課題への取り組みを考え、可能ならば、実際に行動に移すプログラムである。自分の考えを他者に伝えることや、違う意見との合意形成の困難さに気づき、それを乗り越えて解決の方法を探ること、他者と協力することによって一人ではできない発想や取り組みが生まれることを学び、体験することを重視している。第4回講座(12月)で結成されたグループは、第6回(2月)でその活動報告や、行動して気づいたこと、学んだこと、そして今後のアクションプランを発表する。



4. 多様な行動のかたち～グループワークから見るNGO大学～

第9期(1995年)から29期まで続いたグループワーク。この間、118もの多様でユニークなグループが結成された。そのうちのいくつかを紹介する。

期	グループ名	テーマ・目的	活動内容
9	GO GO グループ	第9期N大のコミュニティネットワーク作り	参加者名簿作り、文集作り、「知らされなかった戦争・マレーシア編」上映会、FM わいわいの番組制作、グアテマラ市民運動報告会などを実施。
9	開発教育グループ	多様な価値観の中で仲間になるためのワークショップ作り	違いや多様性を認めながらも、ともに協力して一つの大きなことができる、というねらいで「音」を切り口にしたオリジナルのワークショップを作成。
9	JINKEN NO JIKKEN	「ちびくろサンボ」廃刊を切り口に人権について考える	「ちびくろサンボ」廃刊をめぐる問題を調査・分析し、差別や人権について考えた。成果物として「新しいちびくろサンボ」を作成・公開した。
10	THE 創!	表現活動を通じて課題を伝える“演芸NGO”を目指す。	森林破壊をテーマに演劇表現を行った。今後、人権や子どもといったテーマに取り組みたい。
10	Play with the Children (プレチル)	子どもが幸せになることを目的に、恵まれない子どもの環境改善に務める。	手話を用いた子どもの歌や子どもの視点にたった「仲間探しゲーム」の作成。第11期NGO大学で「附属幼稚園」を作る。
11	メディカルハーモニー	医療のない地域に調和を取りながら医療を根付かせる	ハンセン病を切り口に活動を行った。JOCSでバングラデシュでの医療活動について学んだ。また西淀川区の「外島保養院」を訪問。ハンセン病患者の現状や歴史、世界での状況を学んだ。4月に岡山の尾久光明園を訪問予定。
11	変わらばん	「開発」について考える	メンバーが関心を持つ「ODA」「河川開発」「地域おこし」についてそれぞれが調べ、「アスキューブ」という新聞を作成・配布した。

11	関西から世界が見える	人を通じて、身近なところから世界を見よう	藤野校長や榛木副校長へのインタビューや、各グループワークの活動状況などを取材。関西にいながらにして世界が見える情報誌1号、2号を発行した。
11	アミヤーゴ	ゴミ問題を身近な視点から考える	身近な環境問題としてのゴミを切り口に活動。淀川河川敷のゴミ拾いを通じて、ゴミの現状を調べ、自分たちの消費生活を振り返った。
11	どこでもドア	旅を通して民族・文化に触れる。メンバーの民族文化に対する考え・意識を共有し深める。	釜ヶ崎のフィールドワークを行った。日雇い労働者への行政の対応の問題点、貧困が構造的に作り出されることを学んだ。3月には神奈川の寿へのフィールドワークを予定。
13	〇(まる)したリーナ	海外の障害者状況、支援状況について調べる	厚生文化事業団の益田さん、南アフリカの子どもを支援する会のトーマス C カンザさんへインタビューを行い、海外の障害者支援について学んだ。
13	アグリ DE 郷!	①世界の農業問題を多くの人に伝える ②身近な問題からともに行動・取り組む	生駒の市民農園の取り組みを取材。日本の農業が抱える問題を学んだ。最終目標は農業のさまざまな問題を解決すること。
13	ミステリーサークル	①いらぬダムによる自然破壊を知る ②ダム建設の現場に行く	京都府船井郡にある日吉ダムを訪問。201世帯が立退き沈んだ天若地区や周辺に整備された施設を訪ねた。自然問題を考え、守ることが目標。
13	チルチル	①「多文化」を視点においた子どもたちの心のケア ②子どもについての国際交流雑誌の発行(多言語で)	草津市コミュニティーセンター、豊中国際交流協会を訪ね、在日外国人の子供の心のケアについて学んだ。6ヶ国語で子どもの心のケアに取り組む団体を紹介する冊子を作成。
13	ドキュメンタリー共育 2000	途上国の子ども・女性を取り巻く教育の問題を調べる、情報発信していく	協議会加盟団体のうち、途上国の子供の教育問題に取り組むNGOを訪ね、現状を聞いた。原因の一つである貧しさ、を解決するために、モノや金でなく、教育を良くすることが大切。
13	マイペンライ	①フェアトレードを通じて国際支援をする ②フェアトレードについて広める	いくつかのフェアトレード団体を訪問し、フェアトレードの考え方を学ぶ。また問題点や課題についても考えた。実際にフェアトレード商品の委託販売を行った。
14	身土不二	生産者と消費者の顔の見える関係を作ることにより、自然、世界との調和した生き方に目覚め行動する	添加物、農薬、遺伝子組み換えなど食の安全性について調べた。また日本の食が途上国の農業や環境に影響を与えていることも学んだ。そして自分たちにできることを考えた。
14	N-home	NGO活動に参加したいけど、どうしてよいか分からない初心者のための情報提供	協議会加盟団体のAVC、JOCSへのインタビューを行った。活動内容、支援者層、ボランティア内容、財政、などを聞き、まとめた。今後、他の加盟団体も訪問し書籍にしたい。
15	ものの来し方行く末調査会ウオッチマン	自分たちの身近な食べ物を通して環境を考える	鍋の材料の生産地・値段を調査。そこから農業の問題、土壌汚染などの環境問題を考えた。食品表示にも問題がある。
15	伝々虫之会	情報を多面的に取り入れよう	「ジェノバサミットでのNGOの“暴動”」「歴史教科書を作る会」の報道について多面的に情報を分析し、多様な意見を比較して見る必要があることを考えた。
15	ストリートチルドレン	海外のストリートチルドレンの現状を知る	途上国のストリートチルドレンを取り巻く貧困、犯罪、薬物などさまざまな問題を知った。子どもたちの未来を見据えて自分が何ができるのかを考えた
16	ダンディライオン	日本における難民問題	難民支援NGOシナピスを訪問。日本の難民問題について学ぶ。日本の難民認定率は非常に低く、非認定された人は強制送還される。送還されるまでの収容所も人権侵害の場となっている現状を知った。
16	だいそう えらそう わかりそう	100円ショップをテーマとして大量消費社会を考える	100円ショップを切り口にした大量消費社会を考えるオリジナルのワークショップを作成。やすさの裏側には何があるのか?モノを選ぶときに自分の基準を持つことが大切。
17	グループわーわー (WAR 和—)	戦争のない社会 小学生にもわかる教材づくり	「心のノート」のような愛国心を強調するものではなく、オルタナティブな教材を作る。

17	アブラカタブラ	持続可能な社会を考える	パーム油(アブラヤシ)を取り巻く問題を切り口に、持続可能な社会を考える。教材として使える冊子を作成、販売。
18	なんみんず	日本にいる難民の置かれている現状について調べる。	日本に来る難民について関心を広げるための人形劇を作成。難民についてのアンケート実施。西日本入国管理センター訪問。難民支援NGOへのインタビュー。難民について伝えるための小冊子の作成。
18	B コットン	「綿」を通してグローバリゼーションの弊害・原因・解決などについて考える。	綿産業の歴史、綿貿易の構造と問題点、労働者の問題などを調べた。オーガニックコットンを扱っている店のマップを作成したい。
18	Co,NGPO(コンポ)	持続可能な市民活動を考える。NGO・NPOと企業の連携の可能性を考える	NGO・NPOと企業や労働組合との連携事例を調べ・分析。他セクターとの緩やかなつながりが、持続可能な市民活動につながるのではない。
18	Peace Start	平和ジャーナリズム。平和は個人と個人との間の対立を解決する事からスタート	紛争や平和について考える場を設ける。「Peace Start Journal」の配布。ある学校での弁論大会の実施。
18	ドルナドクマ	ファストフードを通して食に関する問題提起を行う	マクドナルドのハンバーガーセットの内容を調査。原材料の輸入に伴う問題点を整理した。(成長ホルモン剤、小麦の防腐剤、搾取、廃棄についてなど)
18	いちやりばちよーでー	マイノリティを受け入れる社会	沖縄出身者、在日コリアンへのインタビューを行った。在日マイノリティを取り巻く課題を伝えるために演劇を作成した。
19	ファブらないズ	宣伝・広告に惑わされない自分なりの選択の「ものさし」を持つ	安全であると思いついでいる身近な商品について多角的に考え、見直してみる。具体的には抗菌剤、合成洗剤、石鹼などについて考えてみた。
19	ニュース難民	日本のインドシナ難民の現状	25年前に難民として来日したベトナム難民へのインタビュー。知られていないインドシナ難民問題をテレビ番組風に紹介した。
19	ごちゃまちクラブ	当事者参加のまちづくり	「たかとりコミュニティセンター」見学。まちづくりにおいて自分は当事者であるという認識が大切。地域の問題に気づき改善していくことは、世界が抱える構造的な問題を考えることとつながる。
19	JK Press	在日コリアンとの共生	在日コリアンの抱える課題を、夜間中学に通う女性に在日コリアンのインタビューを通して考え、自主制作ビデオ「明日に架ける橋」を作成・上映した。
19	路上に住む子どもたち	ストリートチルドレン	ストリートチルドレンの問題を取り上げた冊子「Think globally Act locally」の作成。遠い国の出来事ではなく日本に暮らす私たちともつながっていることへの気づき。また日本でも居場所を失っている子どももいる。
20	第21期NGO大学広報戦略チーム	NGO大学がもっと多くの人に参加できるようになるための広報戦略を考える	これまでの広報戦略、NGOに関心を持つターゲットの分析を行った。ブログやパンフレット、グッズ、名刺サイズチラシなど広報ツールの提案を行った。実際に21期の広報に役立てたい。
20	もうたくさんだ！夢を語らせろ！共感・居場所づくり	想いを共有できる場作り	東京の「素人の乱」を訪ねた。大阪にも夢や想いを共有できる居場所を作りたい。釜ヶ崎に作りたい。
20	平和がいいわ	弱者の声をいかに反映させていくかを考える	無関心な人たちに、弱者が抱える課題や現状、思いについて伝える「振り向かせるすべ」を考え、ベトナム難民について45分の映像作品を作成した。
20	I*愛がさ	ビニール傘を切り口に大量消費社会を考える	ビニール傘にまつわるオリジナルのワークショップを作成。傘に関する自分の選択行動を考え、大量消費社会に対して自分のできることを考える。
20	WIMUQ	ホームレス問題について考える	釜ヶ崎へのフィールドワークと、ピックイシューへの取材。日本のホームレスの問題について学んだ。
20	サイクル e	日本の自転車を取り巻く課題について考える	自転車行政(各国との比較)、自転車の利用方法(ソフト面)、モノとしての自転車(ハード面)、それぞれの現在と未来を調査した。エコで経済的、健康面にもいい、自転車にもっと乗ろう！

21	ビルマに自由を・Art Messenger	ARTを通して知らないビルマを知りたくさせる	ビルマについて歴史、現状、軍事政権について考え模造紙にまとめた
21	STAR BACKS	企業活動を通して、企業と市民がどのような協力関係を結べるのかを考える	スターバックスが行っている社会貢献活動を切り口に考えた。スターバックスが扱っているフェアトレードコーヒーが認証を受けている割合が低い。企業の出す情報を鵜呑みにしない。
22	食卓 Shoku Taku	グローバル化と日本の食卓	ネギを切り口に日本の農業が抱える課題を考えた。実際にネギ農家を訪問。人手不足、高齢化、自給率の低さなどの課題がわかった。課題解決に向けて私たちができることを考えた。
22	廻古軍団(エコぐんだん)	モノを通してみる世界	エコバックを切り口に資源について考えた。レジ袋を減らしてエコバックを使うことが環境にいいのかを考察。世界で使われている多様なエコバックを紹介。画一的なエコバックでなくてもいい。
22	何デモ	市民の手による政治作り	自分の中にある「想い」を発信し行動していくことが大切。「何デモ掲示板」に主張・想いとそのためのアイデアを書き込む。正論によって切り捨てられる側の意見はどうなるのか。これからも発信していく。
22	チーム原発	原発について考える	電力の5割を占める原発。原発に頼っている。原発の賛否についてディベートを行った。無駄な電気を相当使っているのでは。電気を使うことが変発につながっていることへの気づき。
22	外国人労働者・難民ってなあに	外国人労働者や難民について知ってもらおう	外国人雇用サービスセンターとトッカビを訪問しインタビュー。在日外国人の課題を学んだ。私たちの身近な隣人であるはずの在日外国人とのつながり方について考えた。
23	WASSHOY	国内の開発問題について考える	広島県の鞆の浦。街の発展のために橋を架ける計画の問題を通して、発展か景観保護か、利便性が環境保護かなど、開発の問題が自分たちの足元の問題であることに気づいた。
23	森にかける虹	日本の森林(林業)問題	京都府京北町を訪ね、日本の林業や森林が抱える問題を調査。私たちにできることは何なのかを考え、提言する。
23	チーム ecoca! ?	本当の「エコ」の意味を考える	「環境に優しい」商品があふれる中で、本当の「エコ」のいみを考える「ランキング」ワークショップを作成。また「ECOCAカード」を作成・配布した。
23	パンクチーム	異端に耳を傾ける社会	劇団コータの公演「水道水を飲め！」を白塗りで電車内や町中を練り歩き、ちょっとパンクな行動を通して水問題をアピールした。
24	アートメッセンジャー2	アート・アンド・クラフツで世界を変えよう。ちよつとずつ	メンバーはそれぞれテーマを決め、アートマグカップを作成。アートでもモノも大切にしていきたい。
24	ゆるカフェ・とらーな	居場所・拠点があるんじゃない? →じゃあ、つくろう!	尼崎市の三和市场に実際にカフェを1日だけオープンする計画。現在、改装して使えるように準備中。楽しく、ゆるく、つながる拠点づくり。
24	ちーむワンフェス	NGO大学について知ってもらい、参加者を増やすためのアクション	運営委員のグループワーク。ワン・ワールド・フェスティバルに出展しNGO大学についてアピールしました。24年間の振り返り、修了生のその後の調査、N大缶バッチの販売など。
25	無用化電器(株)	都市での持続可能な生活について考える	エネルギーを中心に、都市での自立を目指す。電器製品にできるだけ頼らずに生活する方法を考える。
26	命を大切にできる社会 ～モンサント社を考える	命を大切にできる社会について考える	モンサント社を切り口に、種子の自給率、遺伝子組み換え食品、自由貿易などの問題を学び、安全で安心な消費生活を目指す。
26	必殺仕事人	東北の震災復興活動への提案	被災者が本当に必要としている支援につながるプロジェクトをいくつか考えた。瓦礫アート、クリーン発電の普及、講演活動、有機綿花栽培など。

26	ビルマとみんなを繋げよう	ビルマについて理解を深める	ビルマの概要や歴史、日本との関係、民主階について調べた。日本ビルマ救済センターのインタビューをビデオにまとめ上映した。
27	Barefoot Society 裸足で歩く会	裸足になること	月例で「裸足で歩こう会」を開催。社会への問題意識を有する、面白い仲間づくり。そこから自然環境や食の問題など複合的な問題意識につなげていく。
27	もったいないを減らしたい ～食の生産・消費について考える～	食を切り口に大量廃棄や安全について考える	規格外の野菜は販売できないとい農家の状況と、大量廃棄、食の危険性について調べた。「命を頂く」意識の大切さを共有するため、猟師に頂いた鹿肉や有機野菜を調理、修了パーティに提供した。
27	無関心から戦争へ	さまざまな社会問題の根底には「無関心」が関係している、ことについて考える	メンバーがそれぞれ両親にインタビュー。個人体験と歴史的背景を絡めた年表を作成。また祖父母の戦争体験をインタビューし、社会や歴史に関心を寄せ、貴重な体験を後世に伝えることの重要性を感じた。
29	多様性を認め合う社会	多様性を認め合う社会のための場作り	多様性を認め合う社会の実現のためには、N大のような場が必要。N大学の継続のためには何が必用か。これまでN大を振り返り、評価が必要。
29	他給他足	地域で経済をまわす「他給他足」を考える	自給自足を一人で実現するのは無理だが、地域でまわす循環「地給地足」へ。それを実現している徳島県・上勝町のゼロウェイストアカデミー（梱包ゼロ量り売り、リサイクル率 90%など）へ行ってみよう！

5. 何に取り組んだのか～グループワークの分析～

第9期から29期までの間、118のグループが結成された。どんなことに取り組んだのか、整理してみた。

グループのテーマ・キーワード	取り組んだグループ数	備考・メモ
マイノリティ	15	ストリートチルドレン、難民、障害者、在日外国人、子ども、ホームレス
場づくり	14	人とつながれる話、居場所、話し合い
環境	12	ごみ問題、ダム、食、エコバック、林業
地域づくり	10	住民参加、多文化共生、開発問題、消費生活
食と農	9	日本の農業、添加物、輸入食材、食料廃棄
多文化共生	7	在日外国人、多国籍の子ども、在日コリアン
平和	5	平和憲法、紛争、戦争体験を伝える、教材づくり
NGO大学	4	NGO大学についてもっと知ってもらいたい、広報
情報発信	4	伝える手段について考える
大量消費社会・グローバル化	4	ビニール傘、100円ショップ、綿貿易、小さな消費
メディア・情報	3	メディアリテラシー
市民活動と企業の連携	3	社会貢献活動、社会企業家、ソーシャルビジネス
国際協力・NGO	3	NGO理解、NGOの強化、NGO活動への参加促進
スローライフ	3	働き方、ゆとり、自己解決、経済優先でない暮らし
表現	3	多様な伝え方、伝えることの大切さ

貧困	2	アフリカの貧困、途上国の貧困
人権	2	新しい「ちびくるサンボ」
ビルマ	2	ビルマの歴史、現状、軍事政権、日本との関係
経済格差・自由貿易	2	コーヒー貿易、フェアトレード
原発	1	原発の問題、電気を消費することについて考える
被災地復興	1	東日本大震災の支援と復興について
政治	1	市民の手による政治づくり

【“微力”は“無力”ではない】

課題解決に向けて、行動を起こすための「しかけ」として考えられたグループワーク。118ものグループが誕生し、実際に行動を起こしたグループも多い。課題の当事者を訪ね、話を聞く「フィールドワーク」。課題と自分とのつながりに気づき、その解決について考える「ワークショップ・教材作成」。調べたことを広く伝えるための「情報発信」や「表現」系。課題を共有し考えを深める「学びの場」の開設など多様な行動・実践がなされた。一方で、具体的な行動にまで到達できないグループもあった。情報収集、調べる、議論する、考えをまとめる、表現する、お互いの意見をすり合わせる、合意形成の難しさを実感する。そして何らかのアウトプットを作成し、最終回に発表する。ここまでで留まるグループも多い。しかし、こうしたプロセスこそ「行動」そのものであり、社会をより良くしていく「力」になり、それは「微力」でも「無力」ではないとNGO大学では考えている。

【足元の問題に取り組む】

テーマとして、途上国の貧困や人権、環境問題に取り組むグループもあったが、多くのグループは、海外の問題よりも、自らの足元の問題に取り組んだ。海外の問題を取り上げたグループも、その課題が自分たちとどうつながっているか、という視点を重視している。この事は、NGO大学が掲げてきたキャッチフレーズのひとつ「世界に目を向け、自分の足元を見つめる講座」を具現化している。講座では国際協力やNGOの現場の話を発表者からインプットし、それらの課題が自分の足元につながっていること、その足元の問題に取り組むことが、世界の多様な問題の解決につながることに気づく。自分は何に関心があるのか、何に取り組みたいのか、を自己整理し、同じ想いの仲間と集い、「微力」であるが、その解決に向けて自分たちの力を発揮していくこと、これがグループワークのねらいである。

【“マイノリティ”というテーマ】

マイノリティ(社会的弱者)というテーマは、多くのNGOや援助機関が取り組んできた。NGO大学でも、関西NGO協議会加盟団体や、多様な援助機関からの発表者を招聘し、盛んに取り上げていたこともあり、この課題に取り組むグループも多かった。「マイノリティ」とひとまとめにしたが、その切り口は多様である。具体的には「難民」「在日外国人」「女性」「子ども」「ホームレス」「ストリートチルドレン」などのテーマに取り組むグループが多かった。このテーマはNGO大学30年の流れの中でも、時期に偏りなく取り上げられたテーマであった。

【当時の社会背景に関連したテーマ】

NGO大学は1987年にスタートし、30年間継続した。その間、社会・世界では様々な出来事が生じてきた。グループワークも、その時々起きた出来事に関連したテーマに取り組んだグループもあった。「ビルマの民主化

問題」「原発(エネルギー)問題」「震災復興」などに取り組んだグループが誕生している。

【講座内容に影響されてできたグループ】

NGO大学30年間で実施された講座は176講座。グループワークでも、多様な講座内容に影響を受けて結成されたものがいくつかある。「メディア・情報、ジャーナリズム」について取り上げた期は5回あるが、そのうち3回で同じテーマに取り組んだグループが誕生している。「食と農」に関しては6回、取り上げられているが、このテーマに取り組んだグループは9グループもある。これは、直接的に「食と農」を扱ってなくても、「グローバリゼーション」や「大量消費社会」「環境」などの講座の際に、避けて通れないのが「食と農」というテーマであり、講座のなかで必ず触れられる話題だからだろう。また「食」は我々に不可欠な行為であり、世界の課題と私たちをつなぐ重要な切り口であることから、このテーマを選ぶグループが多かったと考えられる。

「多文化共生」に取り組んだグループも7つと比較的多い。前述の「マイノリティ」というテーマとも関連するが、私たちの社会、足元に目を向けると、国籍、宗教、価値観、文化、言語など多様な背景を持つ人々で構成されており、多様な人々とどのように社会を形成していくのかが問われている。NGO大学では多文化共生をテーマに、過去に関西地域の様々な場所にフィールドワークを行っている。また加盟団体や、運営委員が関係する団体もあり、そうした現場とグループワークをつなげることで活動に広がりを持たせることができた。

【その後のNGO大学の運営に影響したグループ 多様な参加の保障】

グループワークでの取り組みが、その後のNGO大学の運営に影響を及ぼした事もあった。NGO大学のパンフレットを見返すと、第11期(1997年)以降、「託児および介助が必要な方はご相談ください」の文言が加えられている。今では託児や介助などを行う講座やイベントが増えているが、当時のNGO大学の取り組みは先駆的だったと思われる。NGO大学の運営に託児を組み込んだきっかけが、グループワークであった。第10期で結成されたグループ「プレチル(Play with the Children)」である。「すべての子どもが幸せになるための環境改善を目指す」というテーマを掲げ活動した。さらに今後のアクションプランとして「NGO大学附属幼稚園をつくる」という提言を行った。これを受けてNGO大学では運営に「託児」を組み込み、参加者からのリクエストがあれば、「プレチル」に協力を要請するという体制が出来た。その後「介助」が加わり、さらにその数は多くはなかったが、聴覚に課題を抱える参加者への「要約筆記」を行うこともあった。このようにNGO大学では、より幅広く多様な人が参加できるよう工夫がなされた。

【NGO大学の運営について考えるグループ】

NGO大学30年の後半、数度にわたって特徴的なテーマのグループが結成される。それは「NGO大学の運営について考える」グループである。第20期(2006年)以降4つのグループが結成されている。当時のNGO大学を取り巻く状況に照らし合わせてみると、第20期はNGO大学の企画・運営以外の事務局機能、たとえば広報、申込受付、会場や食事の手配、会計管理などを運営委員が担うようになった時期である。特に広報活動は、

世界に目を向け、自分の足元をみつめる講座

関西 NGO 大学

国際協力、NGO、ボランティアに心はあるけど、なにから始めれば良いかわからない... 世の中よっとへんと思う、いろんな人と話したい、開発教育について知りたい... どれかあてはまる人、ぜひ一度参加してください。いまいるところから、一歩踏み出すきっかけが得られるはずです。

～これまでの受講者の方々～

- 田中優さん (株式会社情報戦略 / 日経新聞のライブラリー編集)
- 高橋直哉さん (学生)
- 野中雄弘さん (P/F/A/S/イノベーター/起業家)
- ダグラス・ラミスさん (政治学者)
- 河瀬道美さん (作家)
- 株式会社フェリテ、P/F/A/S、ザ・ボテジヤップ、ジャパビなどの企業の方 etc.

～参加者の声～

- 〇たくさんのお出い、これが一番の収穫です!
- 〇多角的なものの方、考え方を知り、視野が広がった。
- 〇東京の現場では話をする仲間がで、遠くまで語り合えたのは、かけがえない時間でした。

～傍聴生のその後～

- 〇青年海外協力隊になりました!
- 〇NGO大学の仲間でもっともに、ボランティアに行っていました。
- 〇NGOのボランティアになりました。
- 〇NGO職員になりました。

URL : <http://ndai.net>
E-mail : info@ndai.net

(注) 連絡はなるべくメールでお願ひ致します。
(特注) 関西NGO協議会 関西NGO大学事務局
〒530-0011 大阪市北区長瀬2-30 大塚型/9日教会4階
TEL: 06-6377-5144 FAX: 06-6377-5148
主催: (特注) 関西NGO協議会 URL: <http://www.kansango.net>
後援: (特注) 開発教育協会

きめ細やかな戦略と手間、時間、人手がかかる分野である。日々自らの仕事や活動現場を持ちながらこれらの事務作業を運営委員がこなすには負担が大きかった。そこで、NGO大学で仲間を募って、多くの人にNGO大学を告知、参加してもらうことを目的としたグループが結成された。

第20期のグループ「第21期NGO大学広報戦略チーム」は、これまでの広報戦略、NGOに関心を持つターゲットの分析を行い、ブログやパンフレット、グッズ、名刺サイズチラシなど広報ツールの提案を行った。第24期に結成された「ちーむワンフェス」は、西日本最大の国際協力のイベント「ワン・ワールドフェスティバル」を広報の機会と捉え、多くの人にNGO大学について知ってもらい、参加者を増やすためのアクションを考えた。考えるだけでなく実際に2011年2月に開催されたワン・ワールドフェスティバルにグループとして出展し、広報活動を展開した。挿入の画像はこの時にグループが作成した広報用のチラシである。

【N大コラム】「さらなる学びの場～交流会について～」

佐久間量子 (NGO大学運営委員)

「交流会」とは、1日目夜のセッション後の懇親の時間で、1泊2日という講座の醍醐味だ。さらなる学びの場であり、コミュニティのような役割がありますね、と表した人もいる。休みたい時にはいつでも宿泊室に戻っていいが、ほとんどの参加者が乾杯の席に着いており、発題者も輪に加わってくださった。

職場や学校では、話してもなかなかわかってもらえない社会の出来事へのひっかかりに、ここでは、同じように考えている人がいると心強く感じる。話題を掘り下げ、知識の肉づけをして思わぬ別の引き出しとつなげる術を知っている仲間にも会える。一運営委員が語るには濃すぎる時間と空間だった。経験者ならいくつものエピソードがあるはずで、もし誰かが取材してくれるのなら一冊の本になりそうだ。

私が知っているのは10期以降だけど、会場であったことを書き連ねるので、それぞれが思いをめぐらす機会にさせていただけたらうれしい。

だいたい21:15ころ、「手が空いてたら手伝ってください～」と声がかかると、会場はみんなが机の周りに座れるようなレイアウトになる。机の上にはおつまみや飲み物が並ぶ。

出入り自由。お風呂に入ったあと部屋着姿で戻ってきていい。海外旅行のおみやげなど差し入れが紹介さ



れる。講座内でできなかった質問を投げかけて発題者の意外な一面を発見する。自分が関わる活動を熱く語る。学生が夜食のラーメンを食べに行く仲間を探している。実はカップルで話し込んでいる。部屋の隅では運営委員が講座進行の打ち合わせをしている。料理好きの参加者/運営委員が作った美味しいアテが出てくる。関心が同じ者同士で意気投合し、自主的な勉強会や目的を持ったお出かけの企画が練り上がる。ここでお酒の飲み方を教わった学生がいる。キッチンでも料理をしながら話が弾んでいる。修了生がこの時間だけ遊びに来る。夜半を過ぎると運営委員こだわりのめずらしいお酒が出てくる。子どもも夜更かしOK。睡魔に勝てず椅子で寝落ちしている。最終就寝組にはだいたい浜本副校長がいる。

夜明けを迎えるころまで話が盛り上がり、講座中に居眠りなどの影響がみられたため、いつからか「中締め」という一旦お開きの時間が、それでも夜中の1時半ころだったけれど、設けられたと記憶している。話し声のボリュームは常に高めだから、ある施設からは出入り禁止を言い渡された(申し訳ありません)。発題

者が会場で寝込み、話をしてもらう時間ぎりぎりまでそっとしておいたこともある。二日酔いの朝には、運営委員、田中綾さんによるヨーガ・タイムですっきり。

講座で得た気づきと学びを、行動として丁寧に反映するような試みもあった。農業に携わる修了生の畑から直送された米や野菜の提供を受け、シカやイノシシの肉や加工品の差し入れがあった時には、入手の過程や背景をお聞きした。作り手や関わり手の思いを聞くと、食べ物や品物を格段に大切に消費する。

初期の資料を整理していたら、ふりかえりシートに「茶菓子が多すぎる」という、とりわけ大きな字で書かれたコメントがあった。気づいてもずっとそのままになっていたことについて、社会が抱える課題を考える講座で、環境にも健康にも優しくない大量のスナック菓子を出すのはどうなん？と疑問を呈して変えようと声を上げてくださったのは、当時運営委員をしていた藤井久美子さんだ。そうして17期以後、交流会のテーマは Healthy & Ecology となった。ペットボトルよりは紙パック、缶ではなく瓶ビール、スナック菓子を手に取ったら裏面を見て書いてあることを確認する。小売店からの購入、購入量のみきわめ。お買い物メモに記録し次回以降に活用することで、各期の運営委員に引き継がれていった。

参加者から、例えば、ビールは添加物の入ったものでない方が良いのではないかと提案を受け、麦芽とホップだけのものを選んで購入するようにもなった。誰もが声を上げ、必要に応じて変更するといった関係性もN大ならではのアイデアだろう。

寝不足で帰宅することにはなるが、講座の中だけではなくこの夜の時間から刺激を受けたことが、月曜からの日常生活のエネルギーや行動の後押しとなっていたことはまぎれもない事実だ。

【N大コラム】「N大運営の細かな工夫」

田中綾 (NGO大学運営委員)

【名札・こんにちはカード・アイスブレイク】

NGO大学では講座の運営面でも色々と意味のある工夫がなされていた。例えば、講座参加者に受付で配布する名札ひとつにしても、運営側で予め作成した名札を配布するのではなく、紙と色ペンと紐などを並べておいて、好きな色で自由に記入してもらう形式で、普通に苗字だけを書く人もいれば、あだ名を書く人、全部ひらがなで書く人やイラストも描いたり、色とりどりで様々である。運営側の準備の負担軽減にもなるが、この方が参加者の個性が出ていて自由な雰囲気にもつながり面白い。勿論、毎回終了後は回収して、次回も再利用する。また受付では最初に、自己紹介のために、普段何をしている人？(ここも「職業」や「所属」という書き方はしない配慮がなされている。)という項目や、参加動機や興味のあることなどを記入する「こんにちはカード」という用紙を配布して、記入してもらい、参加者同士がそれを見て交流しやすくなるような工夫がなされていた。

プログラムの冒頭には、参加者の緊張感を取り除き、場の雰囲気をやわらげるための様々な「アイスブレイク」と呼ばれる導入ワークを必ず行うようにしており、学校の講義形式とは違って、参加者とゲスト・スタッフとの壁をなくし、何でも自由に発言しやすくする工夫がなされていた。

【進行表・役割分担表】

当日の講座運営に欠かせないのがこの「進行表」で、各回の担当者3~4名が当日の講座の運営・進行するためのいわば「台本」のようなものである。「進行表」には、その回のテーマ文、呼びかけ文、各セッションの講座のねらい、そして2日間のスケジュール内容と進行・記録などの役割分担、準備物、注意点などが細か

く記されている。講座運営となるとタイムマネジメントが大事で、この進行表通りにうまく進行すればよいのだが、初日の第一セッションが終わった時点で、変更が生じたり、さらにより企画にするために、夜の交流会の最中に、担当メンバーが会場の隅で延々と翌日の運営のために進行表を練り直す、などはよくある光景だった。このノウハウの詰まった「進行表」があれば講座進行は安心。この「N大進行表」は他のワークショップやイベントでも応用できる。

また「役割分担表」は、担当回以外の運営委員が、様々な役割を分担するものである。2日間の合宿講座ともなると、講座運営以外にも様々な仕事が発生する。会場設営、受付、会計、交流会の準備係、記録、宿泊(布団準備)、ゲストとしてお迎えしている発題者へのお茶出しや、託児、朝食準備、書籍販売など。これらの役割を当日参加できる運営メンバーで事前に割り振りしておくことも重要だ。

【第26期第2回講座の進行表】

第26期関西NGO大学 第2回進行表			
2012年10月25日現在		<11月20日(日)>	
<p>●日時 :2012年10月27日(土)~10月28日(日)</p> <p>●場所:小林聖心女子学院ロザリオビル(宝塚市)</p> <p>●担当運営委員:新島、田中綾、石崎、荒川</p> <p>●発題者:佐久間智子さん(特活)アジア太平洋資料センター共同代表</p> <p>●テーマ文「えっ? 食卓のおコメの大半が外国産!? ~グローバル経済と私たちの未来~」</p> <p>●呼びかけ文: 食、農、教育、福祉、医療、雇用、健康保険...。TPPを始めとする貿易の自由化は私たちの生活に幅広く影響を及ぼします。なぜいま TPPなのか? 貿易の自由化の歴史から、グローバル経済を読み解き、私たちのめざすべき社会について考えます。</p> <p>●第3回講座全体のねらい: 1. TPPはよくわからないけれど、実は身近な存在であることに気づく 2. TPPはもしも知っていたらいいこともあるかも? TPPのメリット、デメリットを理解する 3. TPPが身近な存在だからこそ、日々の行動、視点の持ち方が、TPPの迷走(暴走)を防ぐことにつながる、について考える。 4. TPPが世界の経済の中で、なぜ出てきたのかその背景、歴史的流れを把握する。 5. 自由貿易の問題点に気づく。</p> <p>●スケジュール案: <11月19日(土)></p>			
時間	プログラム	留意事項	役割・準備
18:30-19:00	受付 グループ分けのくじをひいてもらう 経済用語集配る	セッティング、貿易ゲームの机配置 ホワイボード記入(裏に買い入れ価格記入)	グループ番号札
	【セッション1】「やってみよう貿易ゲーム」 ねらい:貿易の自由化がもたらす影響、特に貧富の格差の拡大について、その構造を理解する。また経済の格差が広がっていく仕組みは誰が作っているのかを理解する。		
19:00-19:10	オープニング(10分) 校長あいさつ、運営委員紹介、2日間のねらいと流れの説明		進行:荒川 記録:
19:10-20:15	貿易ゲーム(65分) ゲームの説明	市場2人: 多国籍企業3人: (浜本さん、栗本さん、三浦さん)	ゲームに必要な道具類、3分タイマー、A4用紙、封筒(角2号)
20:15-20:25	休憩		
20:25-21:00	ゲームのグループを適当にまぜてゲームの感想を話し合い、発表する(10分) 佐久間さんコメント(10分)		
21:30	事務連絡、交流会の説明		・施設説明
時間	プログラム	留意事項	役割・準備
9:00-9:20	【セッション2】「なぜ、いま TPPなのか?」 ねらい:自由貿易の歴史・背景と、自由化の流れの中での TPP の位置付けを理解する。また貿易の自由化の問題点を理解する。		
9:20-9:30	アイスブレイク「部屋の四隅」 ・今朝の気分 ・貿易ゲームに満足? ・(TPP正式名称) ・TPPは最初何から始まった? ・モノの価格は安ければ安いほどいい!?		・参加者の TPP への理解度を探る。 ・TPP の基礎理解と佐久間さんのお話への導入
9:30-10:50	TPP 賛成派の主張 箇条書き(パワポ)		・あれば動画を使う
9:30-10:50	佐久間さんのお話「なぜいま TPPなのか?」 自由貿易の歴史、背景、TPP の位置づけ・および問題点		・質問カードの配布 ・質問カード ・レジュメ
10:50-11:00	休憩・カード回収		・質問カードの整理 ・分業・質問:担当全員で。
11:00-11:30	佐久間さんのお話 カードの質問に答えつつ 質疑応答		・挙手での質問もOK
11:30-12:30	お昼		
12:30-12:35	インフォメーションタイム	時間厳守で	進行:石崎・田中 記録:
	【セッション3】「グローバル経済と私たちの未来」 ねらい:TPP が身近な問題だからこそ、日々の行動、視点の持ち方が、TPP の迷走を防ぐことにつながる、について考える		
2:35-13:45	対談『佐久間さんと藤野さん』 ・このまま自由貿易が進行していったらどんな世の中になるか ・NGO や国際協力はそれに対して何をすべきか 「モニタリング・アドボカシー、人材育成、貧困削減、研究、開発教育」など NGO に求められること ・同時、話の流れの中で、国際協力や NGO の概論的なことに触れよう。		・国際協力・NGO 概論をこの対談の流れの中で位置付ける ・セッション2でカバーできなかった質問カードも活用する
13:45-14:15	グループディスカッション 「グローバル経済と私たちの未来」 グローバル化は避けられないが、今後どうつきあっていくか。(有難者として、消費者として、& 情報に敏感になろう!)		3~4人のグループで
14:15-14:30	共有・コメント		
14:30-15:00	・副校長&担当ふりかえり ・ふりかえりシート記入 ・事務連絡 など		

【参考図書・チラシコーナーとインフォメーションタイム】

会場の隅には、講座に関連する「参考図書コーナー」があり、講座理解を深めるために事前に案内していた発題者の著書や関連図書が置かれていたり、「チラシ」コーナーには、様々な団体の活動紹介、イベントや講座の情報などがある。参加者が自ら宣伝したいイベント等のチラシを持参して、宣伝できる「インフォメーションタイム」があり、NGO大学からまた様々な新しい活動やイベントの情報を得られたり、仲間募集など、どんどん外へも和が拡がり、様々な活動のネットワークが広がっていった。

チラシといえば、第20期以降は、NGO大学広報のためのパンフレット印刷は環境に配慮し、風力発電・大豆インク使用の出版印刷会社・礼書房さんに毎年お願いしていた。

【託児・介助】

第11期以降はパンフレットにも「託児および介助が必要な方はご相談ください」の文言が加えられ、子育て世代なども含め、より幅広く色々な立場の参加者が参加しやすくなるように工夫がなされた。これは第10期参加者によるグループワークがきっかけだ。実際、NGO大学の大きな特徴として、老若男女幅広く、立場も様々で、個性的な参加者も多かったり、どんな人でも受け入れてもらえるような寛大で自由な雰囲気があげられる。難しい政治経済の議論の際中も、会場には小さな子どもも一緒に参加していたり、一方的な講義を聞くのとは違って、なごやかな雰囲気の中で、なんでも自由に発言しやすい相互の学び合いの場がつけられていた。



【差し入れコーナー】

会場の「差し入れ」コーナーには、夜の交流会のためのお酒やおつまみ、無農薬のお野菜、個包装ではないお菓子や、はたまた自ら狩猟してきた鹿肉など、多くの差し入れが毎回、参加者から寄せられていた。講座に参加する毎に、だんだん皆の環境意識も高まり、勿論、ペットボトルや使い捨て容器など一切なく、マイカップ・マイ箸持参も呼びかけられていた。また翌朝の朝食は、社会福祉団体「えーぜっと」さんの美味しい手づくりパンだ。時には、料理の得意な運営委員によって、前夜の交流会の残りの食材が美味しい汁物になっていたり、休憩時には美味しい手作りチャイが出てきたり。これらの食もN大の魅力の一つである。

【校長・副校長ふりかえり】

N大といえば欠かせないのが、講座の最終セッションのラストに毎回（私が知るのは17期以降だが）必ず行われる藤野校長と浜本副校長による2日間の講座全体の「ふりかえり」である。これがまた、各々好き勝手に話していて、話が噛み合っているような、いないような、なんとも記録担当泣かせなのだが、それにも関わらず、2日間の講座内容がちゃんと整理できて理解が深まり、全6回講座の全体の流れもつかめて、次回も参加したくなってしまうのだから素晴らしい。しかも、長年の技（コンビ芸？）が、全くなんの準備もなしでセッション終了するやいなや、その場で繰り広げられる即興漫才のようである。こうして濃密な週末の2日間は、アットホームな雰囲気の中、このN大名物ともいえる校長・副校長による「ふりかえり」で締めくくられ、皆充実して、帰路につくのである。



第3章：さらなる学びを求めて 運営委員会という“人材育成”の場

1. 運営委員とは

■運営委員が担う役割の変遷

30年間にわたり、319人の発題者を招聘し、176講座を実施。受講者数は約6500人。このNGO大学を企画・運営したのが「運営委員」である。30年間で167人がその役を担った。運営委員はその名の通りNGO大学の企画・運営を担っていた。NGO大学発足当初は、主催者である関西NGO協議会の加盟団体のスタッフが運営委員であったが、第4期あたりから、NGO大学の全6回講座のうち、4回以上受講した「修了生」がNGO大学の企画・運営に携わるようになる。以降、しばらくの間は、関西NGO協議会の加盟団体スタッフが半数、修了生から半数という構成で運営委員会が組織された。中期以降は協議会加盟NGOからの派遣スタッフが減少し、修了生が占める割合が大きくなっていった。

初期～中期の頃、運営委員会は校長・副校長のほか、12～15名の運営委員で構成されていたが、第20期(2006年)以降は、関西NGO協議会の事務局事情により、企画・運営だけではなく、事務的な役割も担うようになったため人数が20人を超えることが増えた。事務的な作業とは、企画書の作成、会計処理、講師交渉、広報(パンフレット作成、発送業務、ウェブサイトの管理、ブログ作成など)、ファシリテーター研修、申込み受付、参加者対応、会場・食事・貸布団などの手配、当日の受付業務、助成金申請・報告、運営委員会の開催、講座の記録、評価会の開催、報告書作成、備品管理、名簿管理など。NGO大学に関するほぼすべての業務を分担して行っていた。

なお、運営委員が関わる1年間の作業内容については、第2章「NGO大学の組み立て方」に詳述した。



■組織運営を学ぶ場としての運営委員会

初期の頃は、関西NGO協議会加盟団体がスタッフを運営委員として参加させ、講座の企画運営・評価、広報などの事務作業を経験することが、「NGOスタッフの育成」につながっていた。運営委員経験者にはその後、NGOスタッフや、JICA、青年海外協力隊、国連機関、市民活動や国際問題の研究などに活躍の場を移す人もいた。運営委員としての経験が、その後の国際協力などの市民活動や仕事をする上での学びになったと言える。

■運営委員の役割

運営委員会の概要、講座当日の役割、企画・運営以外の事務作業について以下にまとめる。

【運営委員会(全体)】

①校長および副校長の役割

- NGO大学実施に関する全般的な運営と企画および研修会も含めて運営委員の指導と助言にあたる。
- 各期の全体の方向性の設定。
- 各回の開会挨拶とテーマ、ねらい、方針等の説明、講座終了時のふりかえりと閉会の挨拶、講座全体の総括。
- 評価会での評価、助言

②運営委員の役割

運営委員の大きな役割は、NGO大学の企画と運営であるが、20期以降は事務的な内容も担うようになった。また講座当日はその回の企画・運営を担っている「担当運営委員」と、「担当外の運営委員」で役割が異なる。

【担当運営委員の役割】

時期・期間	作業内容
担当する講座 当日まで	講座の企画:テーマ・ねらいの設定、テーマについて各自学びを深め、発題者に依頼・交渉、広報パンフレットの呼びかけ文作成、2日間のプログラムの作成、実施するワークショップの準備、発題者との打合せ、当日資料の準備、書籍販売の手配、各回チラシの作成・ブログ等での広報、運営委員会での進捗状況の報告、など
講座当日	参加者の把握、講師対応、必要備品の確認、講座の司会進行、ワークショップのファシリテーション、タイムマネジメント、質疑応答の対応、必要に応じて2日目のプログラムの修正、講座の記録、担当外運営委員の当日業務依頼、講座終了後の評価会の実施、など
講座終了後	ふりかえりシート(参加者アンケート)の集計・分析、報告書作成、ブログへの報告原稿作成など
その他	(必要に応じて) 協議会加盟NGO団体紹介、国際協力・開発教育等のイベント紹介、講座に関連したプレ・イベントの企画実施、など

【講座当日の役割(担当外)】

以下の作業は講座当日の、「担当以外」の運営委員の役割である。数人ずつ作業分担する。

役割	作業内容
発題者接遇	最寄り駅までの送迎、夕食の要不要確認、夕・昼・朝食準備、講師宿泊室準備、講座中の飲み物提供など
宿泊担当	部屋割り、布団の配布・回収、ガスの元栓開閉、浴場の準備・お湯の管理、掃除の分担、各宿泊室のチェックなど
記録担当	マイク・音響、プロジェクター、スクリーンなどの機材設営、各セッションの録音記録、写真撮影、講座終了後の評価会の記録など ※講座の記録はその回の担当運営委員が分担
交流会担当	交流会の買い出し、朝食の飲み物購入、交流会の会場設営、厨房の準備、差し入れの紹介など ※できるだけ参加者を巻き込む形で交流会を実施する
会場設営	机・椅子の設営、各種チラシの設営と撤収、お茶コーナーの設営、備品の準備・撤収・送付、会場までの道案内の掲示、書籍コーナーの設置など

【企画・運営以外の事務作業】

先述したように、第20期以降は関西NGO協議会の事務局の事情により、NGO大学の運営のための事務作業や諸手配も、運営委員会が担うようになった。

役割	作業内容
会計・経理関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会計処理(入出金、請求書、領収書発行) ・ 講座実施に関わる費用の算出・出金・精算 ・ 運営委員交通費の精算
広報関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 募集パンフレット、ポストカード作成・印刷発注、 ・ パンフレットの各方面への発送、掲示依頼、各種イベントでの配布依頼

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報発信(ウェブサイト、ブログ、ツイッター等)、マスコミへの情報提供
受付業務	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問い合わせ対応 ・ 申し込み対応、受講生各種名簿データ管理、参加要項の発送、入金確認 ・ 参加者リストの作成
諸連絡調整業務 事務関連業務	<ul style="list-style-type: none"> ・ 運営委員会の開催・議事録の作成 ・ 講師対応(講師交渉、依頼書・礼状作成、謝金・交通費管理) ・ 諸連絡(対関西NGO協議会議長、正副校長、運営委員、講師、参加者) ・ 理事会への報告 ・ 助成金申請 ・ 公文書作成・発行
講座運営関連	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会場・食事・宿泊の手配(必要に応じて託児・介助等の手配) ・ ボランティア保険の申し込み ・ 備品・資料の準備、発送 ・ 受付業務、当日支払い関連の処理
記録・報告書	<ul style="list-style-type: none"> ・ 報告書の取りまとめ編集、印刷作業、関連先への送付

■運営委員の実際

運営委員の任期は4月から翌年3月までの1年間で、再任は妨げない。基本的に運営委員はボランティアで関わっていた。中には加盟団体から業務の一環として派遣されている人もいたが、徐々にNGO大学を修了した人がその後、運営委員として関わるという流れが増加した。その内訳はNGOスタッフ、政府系援助機関職員、会社員、学生、派遣社員、教員、建築家、大学職員、研究員など多様な人たちが関わっていた。

NGO大学の1期全6回の連続講座のうち、一人あたり、2回の講座を担当する。各回4～5人で担当し、その企画と講座当日の運営、終了後の評価と報告書の作成を行う。ほぼ1年にわたる活動で、企画・運営のみならず、第20期以降は事務局機能も分担して行っていた。その役割は多岐にわたり負担も大きいだが、その過程で多くの経験や学びを得ることができる。つまり、運営委員を経験することが講座とは別の、「もうひとつの学びの場」となっており、講座運営に関するノウハウを身につけたり、問題意識をもった課題についての理解をさらに深めるなどの「人材育成」の場としても機能していた。その様子は、2021年4月10日に実施した運営委員座談会の記録から読み取ることができる(後述)。

運営委員の特徴について、以下に浜本裕子氏の文章を引用する。

(引用元:「市民による学びの場の創造と運営～関西NGO大学の実践～」 より抜粋)

2003年 浜本裕子 大学教育学会誌第25巻)

「運営委員会～優れた人材育成の場～」

関西NGO大学の特徴のひとつは、このボランティア主体の運営委員会が企画運営していることである。ボランティアベースで関わっている10数名の運営委員が、1年間という長丁場、チームを組み議論を重ね、企画・検討し、講座当日も運営していること。このようなスタイルで長年にわたり、毎年講座が運営されてきたことは特筆に価しよう。この運営委員会の場が、運営委員相互の学びの場となっており、すぐれた人材育成の場となっている。時間的にも物理的にも負担の多い運営委員の役割を、積極的に担う人が毎年途切れることなくあることが、NGO大学を継続実施できている基礎となっている。

(一部抜粋)

■NGO大学におけるファシリテーションについて

第8期(1994年)からは、主に新たに加わった運営委員を対象にした「ファシリテーター研修」を実施している。9月にスタートする講座に向け、8月に実施される。「ファシリテーション」とは促進する、助長する、容易にする、楽にするという意味の英語“*facilitate*”から来ている。一般的には会議やイベント、ミーティングなどで、参加者の考えやアイデアを引き出し、発言を整理しながら、話し合いや合意形成などを円滑にすすめるための「技法」と解説される。その役割を担う人をファシリテーターと呼び、「進行促進役」と訳される。

NGO大学での運営委員は、単なる司会進行役ではなく「ファシリテーター」としての要素が求められる。また、長年、講座を積み重ねてきた経験から、NGO大学特有の「ファシリテーター」が作られてきた。NGO大学では一方的に発題者の講義を受けるだけではなく、参加者が自ら参加し能動的に学ぶことも大切にしてきた。これはNGO大学は、「気づき→学び→行動」という考え方をもとに、その講座スタイルもまた「能動的」であり「参加型」であるべきだと考えている。この学びのあり方を実現するために必要なのがファシリテーションである。



NGO大学の運営委員に求められるファシリテーションとは、参加者一人ひとりが、自分自身で考え、学び、気づき、創造することを促す。そして参加者それぞれが持っている豊かな経験、アイデア、考えを「引き出し」、それを共有し、相互に学び会える場を作り出すことが求められている。以下にNGO大学特有のファシリテーションについて、場面に応じて述べてみる。

【企画段階から始まっているファシリテーション】

ファシリテーターの役割のひとつとして「学びの組み立て」がある。企画段階で、何を「メッセージ」として伝え、何に気づき、学び、考える場にするのかをしっかりと練り上げる必要がある。そのために運営委員は参加者の立場に立ち、どのような内容やプログラム、流れ、ワークショップなどが必要なのかを考え、企画に落とし込んでいくことが大切である。

運営委員会で企画を検討する際には、運営委員同士で互いに問いかけ合い、言葉にできていない企画の意図を引き出し、整理するような働きかけを行うなど、企画を練り上げる過程でも、ファシリテーションのスキルが重要なものとなった。

【担当回でのファシリテーション】

講座が始まる前から大切な作業がある。それは参加者のニーズをできるだけ把握し、参加者への対応やプログラムへの導入、質問の投げかけ、講座の進行などを事前に想定しておくことだ。参加者へのイメージを広げるのに役立つのが参加者名簿と事前アンケートである。所属や居住地、過去の受講歴などのデータが記入された参加者名簿は運営委員のみに配布される。また何を学び、知りたいのか、何に関心があるのか、NGO大学に期待していることは何かなどの項目を確認し、参加者のニーズをできるだけ汲み取ることで、当日の進行が円滑になる。

講座前に出来ることがもう一つ。受付が始まり、少しずつ参加者が集まり始める時間、できるだけ会場に出て、

参加者とコミュニケーションをとっておくことだ。このことで、参加者の人となりやニーズを把握しやすくなる。

また、ファシリテーターは一人である必要はない。担当回の運営委員は3～4名が担当する。このため、ファシリテーションを複数人数で行うことが出来る。たとえば運営委員が2人で掛け合いで進行してもよい。役割上、そのセッションの進行役が一人いたとしても、他の運営委員がファシリテーターとして補佐することが求められる。

【影のファシリテーター】

担当回以外の運営委員の役割は前述したように「講師接遇」「会場設営」「宿泊担当」「記録」など多岐にわたっている。しかしそれ以外に求められる役割が「影のファシリテーター」である。ファシリテーターの役割は、参加者の考えや発言を引き出し、議論を交わし、お互い学び合う場を作ることである。では「影のファシリテーター」の役割は何か。例えば、参加者を観察し、反応はどうか、参加に消極的な人はいないか、理解が追いつかない人はいないか、など気配りをする。可能であればそうした人を個別にフォローする。また、運営上、担当が気づいていない問題点があれば適宜、担当運営委員に伝える。グループディスカッションなどでは、各グループに運営委員が一人入り、ファシリテーションを行う。全体的な雰囲気作り、具体的には、発言や質問がしやすい雰囲気、参加者主体であることに気づくような場づくりに努めることも求められる。



こうした「影のファシリテーター」が生まれたのは、担当運営委員に講座を任せるとはなく、「運営委員会」というひとつのチームとして講座運営に取り組んでいる姿勢が背景にはあると考えている。

■数字で見る運営委員

過去30年の歴代運営委員を数字で振り返る。

30年のNGO大学の企画・運営・事務を支えた運営委員は167人。この数は「実数」で、複数年にわたって運営委員の役割を担った人も多い。最も少ない期で第1期と第4期の7人、最も多い期は第25期の24人である。企画・運営に加えて事務局作業も運営委員が担うようになった20期以降は20人を超えることが多くなった。30年間を平均すると、15人となる。

この運営委員167人について、その属性、修了生、加盟団体からの派遣者について整理したのが以下である。

NGOスタッフ	74人(41%)	会社員	39人(22%)	大学生	23人(13%)	団体職員	15人(8%)
教員(小・中・高)	8人(4%)	派遣社員	3人(2%)	フリーター	3人(2%)	JICA職員	2人(1%)
NGOボランティア	2人	大学職員	2人	幼稚園教員	2人		

以下各1人ずつ 建築士、デザイナー、洋画家、翻訳業、公務員、研究員、ソーシャルワーカー

※30年の間に所属先が変わった運営委員が複数いるため、合計人数の誤差が生じている。

運営委員のうち、修了生の割合…… 76%

運営委員のうち、加盟団体からの派遣の割合…… 34%

※NGO大学は基本的に年6回の連続講座。そのうち4回以上の参加者を修了生と呼ぶ。

2. 運営委員を経験して～学んだこと・今につながっていること・印象的だったこと～

2021年4月10日。NGO大学運営委員の経験者に呼びかけて、30年を振り返る「座談会」を実施した。コロナ禍において、直接対面しての座談会は難しく、一部参加者はオンラインで参加した。約30名の「元運営委員」が参加し、運営委員として何を学び、どのように今につながっているのかを共有した。以下にその一部を紹介する。この座談会のテープ起こしと取りまとめは、運営委員の山下奈美さんが担ってくれた。

1) 運営委員を経験して何を学んだか

【市民活動・運営】

- ・ 当時、人権関係の仕事をしていた。またボランティアで大阪自由学校に関わっていた。どちらも市民講座の運営に携わっていたが、同じ市民講座でも参加者の関心が異なり、運営方法も自由学校とは違っていて勉強になった。[K.T]
- ・ 講師を招いて話を聞くだけでなく、グループワークを行い、外に発信するというプログラムは、時代を先取りしていた。参加型学習の先駆けだと思う。また運営委員会で、多様な意見を出し合い企画するという基礎を学んだ。こうした手法をNGOで働きはじめた時期に経験できたのは大きかった。[H.A]
- ・ 第19～20期に、NGO大学の運営を関西NGO協議会から切り離して、運営委員主体で担っていくことを議論し決めたことが一番印象に残っている。結局、協議会には極力頼らず運営委員でやっていくことに。その過程で外部からはNGO大学を終了するとか、別の組織として独立させては、という話(圧力)もあったが、抵抗し、新しいNGO大学の「かたち」を創っていった。[K.N]

【もの見かた・考えかた・指針】

- ・ NGO大学を通じて、いい意味でひねくれた見かた、素直じゃない見かた、視点を育ててくれた。主流になっている考えかたを、ちがう角度から見るができるようになった。[N.S]
- ・ 国際協力とか、環境問題には興味があったが、世の中のことをよく知らず、無知な事が多かった。NGO大学に参加し、世の中のことをいろいろ学ばせてもらった。一言でいったら「市民になる」ことができた。[T.A]
- ・ 政治とか経済に無関心だったのに、NGO大学に参加し、自治や民主主義などを学び興味を持ち、政治経済がテーマの回を運営委員として担当することが多くなった。岡田憲治さんに民主主義、高橋哲哉さんに靖国や平和のこと、酒井隆史さんに自治について教わり、その大切さに気づかせてもらったのが大きい。[T.A]
- ・ もともと関心のあったフェアトレード以外の、国内にある社会問題に気付かされた。[M.H]
- ・ 時代の先を行くワードを教えてもらった。食のこと、多様性のこと。あんなにたくさんの情報を浴びた刺激的な日々はなかった。当時は会社員で、経済成長ありきとっていたが、今は脱成長、マルクスかぶれ。NGO大学の学びは古びないし、何度も形を変えて時代の中で出てくると思う。そういう意味で学び続けたいと思う。[Y.N]
- ・ 最初に運営委員をした時は、もやもやを持つ 10 代の学生だったが、多くの先輩からいろいろ教わった。お酒の飲み方も教えてもらい、仕事と遊びの切り替えや転職の話なども聞き、人生の指針になっている。[O.Y]
- ・ 人と出会って人から学ぶ、という経験が大きい。NGO大学が縁で神戸学生青年センター職員になった。震災後のフィールドワークで税関の職員から、世界からどのように食料が届くのかなど学んだ。伝えたいという一人ひとりの想いが講座を形作っている。そのプロセスが自分に戻ってきていると思う。[N.Y]

- ・ 私にとってのNGO大学の学びは「抵抗と構築」です。初めてNGO大学に参加した第12期は参加者が70人ぐらいいて、「キラキラ系国際協力」を求める学生さんも多かった。「夢みたいなことばかり言って、世界はよくなるのか」と思っていた。そんな雰囲気抵抗していたので、「抵抗参加者」とみられていたと後からわかりました(笑)[K.N]



【勇気を出して行動すること】

- ・ 試行錯誤しながらも、憧れの講師にアタックして発題者として来てもらった。[K.T]
- ・ 運営委員のみなさんが多忙なのに、パワフルに動かれていたのが尊敬する。地球や社会をよくしていきたいという愛にあふれていると感じた。楽しさやユーモアを忘れずに行動していて、そういう大人になりたいと思っていた。みなさんはあこがれの存在です。[O.T]
- ・ 過剰な消費活動や大量生産は、地球温暖化や災害となって自分にふりかかってくる。そのつながりを知り、私たちは何ができるのか。そして社会の平和を求めるなら、心の平和、内面の平和、自分のあり方や価値観を変えて行動することの大切さを、運営委員と共有できたことがすごく大きかった。[I.R]
- ・ 講師交渉のために、担当運営委員で栃木県の実験工房まで日帰りしたり(自費で)、増山麗奈さんに会いに行った。興味があることをみんなで積極的にやって、楽しかったし居心地がよかった。[K.A]

【人との出会い・自分の再確認】

- ・ いろいろな人と話ができ。すごい人、面白い人がいっぱい感激した。[M.H]
- ・ NGO大学に来る人は、日常生活では言語化できないもやもやを、NGO大学ではき出せたという人が多いのでは。だからみんな長く付き合える。自分の思いを遠慮せずに言える場に出会って、自分を再確認して、肯定できて、息がしやすく、自信が持てるようになった。[O.M]
- ・ 青年海外協力隊のOB、OGの方に出会えたり、国際協力のことも学んだ。[M.Y]
- ・ 自分の中のコアができた。NGO大学で得た人とのつながりや考えが、核(軸)になり、そこさえあれば何にでも変わっていけると思えた。[Y.N]
- ・ 「学びから行動へ」というN大の考え方に影響された。そしてやりたいことが再発見できた。[I.R]
- ・ 話を聞く、話すことの楽しさを知った。そして伝えることの難しさも知った。[N.Y]
- ・ NGO大学から「ふりかえり」を意識するようになった。自分が得た人とのつながりや言葉から、今も学んでいると思う。[N.Y]
- ・ 当時はAMネットや大学のパート職員をしながら将来のことを考えていた。NGO大学のつながりから誘ってもらったJICAの国内研修とか、NGOや国際協力に関する多くの講座への参加経験が今に活かしている。[H.A]
- ・ “国際協力のキラキラ系”だったのが、初めて参加した第18期のテーマが「足元をみよう」で、国際協力のイメージがすごく変わった。その後、地方の学校で教員をしたりした。NGO大学に参加したことで自分の生き方が変わったと思う。[T.K]
- ・ 第14期で運営委員に誘われずいぶん悩み、副校長だった浜本さんとじっくり話をした。他の運営委員とも話をして「このみなさんとだったら一緒にやってもいいかな」と思ったのは、「歴史認識」がきっかけだった。当時1990年代の終わりで、「新しい歴史教科書をつくる会」ができ、あたりまえのように思っていた日本の

戦争責任がくつがえされそうな世間の雰囲気だった。ご老体の先生方ばかりでなく、若い世代で、そういう問題意識をもてる人と一緒にやっていけると思った。[K.N]

2)今にどう活かされているか

【運営・活動】

- ・ NGO大学は、講座の企画・運営がとても丁寧だった。経験がバラバラなメンバーが議論しながら進める。違う価値観の人と協働作業する大切さを学んだ。「まだるっこしい」と感じたこともあったが、全員納得の上で運営するスタイルが、仕事や他のいろいろなところでも役にたっている。[K.T]
- ・ 第21期の発題者、長畑誠さん(いりあい・よりあい・まなびあいネットワーク代表)が、地域コミュニティの大切さを語られた。地域の人は多様な価値観をもつ人が集まっていて、そこで調整しながらすすめていくことが大事。自分も仲間と地域づくりに関わるなかで、NGO大学の学びが活かしている。[T.M]
- ・ 日頃の生活の中で、例えばPTAなど仕事以外に役割を持つ事があった。場の作り方とか、企画、細かな配慮など、運営委員を経験していないとわからなかったと思う。講座運営の小さな経験の積み重ねが今に活きている。[S.R]
- ・ カマル・フィヤルさん(地域開発ファシリテーター)や平山恵さん(結核研究所フェロー)からワークショップの手法やファシリテーションについて学び、今に活かしている。[T.M]
- ・ NGOで働くにあたって、市民活動の本質的な部分をいろいろ学べた事が一番よかった。初参加の発題者が中田豊一さん(参加型開発研究所)で、最初からこれまで考えたことのない話を聞いた。NGO大学で学んでなかったら、そこまで深いところまで関わることはなかったと思う。[I.Y]
- ・ 仕事で企画やプロジェクトを立ち上げるときに、運営委員での経験が活きていると思う。企画の進め方、人との交渉の仕方、落とし所の持って行き方など。[N.S]
- ・ PTA や自治会の役員なども、嫌がっている人が多いが私はやりたい。それは運営委員を経験して、参加するだけでなく、つくっていく側が楽しかった思い出があるから。NGO大学の運営委員のように、信頼関係に立ってつくっていたように、実践していきたい。[M.Y]
- ・ 運営委員で学んだことをベースに、生協らしさを考えるようになった。同じ価値観の仲間を増やして、組織を変えることができたらと思っている。[K.Y]
- ・ 職場で、NGO大学のような講座を1泊2日で実施した。貿易ゲームも4回くらい、職員や組合員とやっている。社会問題に目を向ける泊まりの講座も3年やった。[K.Y]
- ・ 小学校で働いている。NGO大学では、参加者を巻き込んでみんなで考え、作り上げていく、という基本を学んだ。教え子が世界に興味を持って、NGO大学のような場に行く“変わった子”になってもらいたい。[F.M]
- ・ 私がかかっているNPOで、モンゴルの障害者支援をするプロジェクトを行った。モンゴルで支援について考えたり、コミュニケーションをとるときに、N大の経験やつながりが活きている。[T.Y]
- ・ 中田さんや長畑さんの参加型協力についての講座を受け、事実に基づいて質問する、思い込みで判断しないということ学んだ。[H.A]



- ・ 私は遺児支援の団体に関わって6年目。関西の大学生の遺児が共同生活する施設で、“ひとりNGO大学”のようなことを、仕事外でやっている。学生も一緒に考える参加型の講座がつくれている。[T.K]
- ・ 仕事では、あおぞら財団で地域密着の活動をしてきたが、NGO大学でグローバルな学びができた。まさに、Think Globally, Act Locally を実践できた。その後も転職の都度、NGO大学で学んだことは活かしている。誰かが一方的にすすめるのではなく、みんなで一緒にやっていくやり方はNGO大学での経験が活かしている。[K.N]



【支援すること・されること】

- ・ いま障害者団体の作業所で働いている。支援のしかたについて、NGO大学では支援する側の視点とされる側の視点が議論になっていた。国際協力の現場で行われていることを、身近なところに落とし込んで考えることができた。支援てなんやろうというのは、対人関係でも同じだと思う。[N.S]
- ・ 支援について考えた。2011年、東日本大震災の津波被災地に炊き出しに行った。「してあげる」というより、もっと繊細な心の機微があって、こっちがとても衝撃をうけた。思い込んだらいけない。本当に、自分の思い込みで正義みたいにやたらいけないし、相手の思いを大切にすること学んだ。[I.R]
- ・ 5年前に突然、脱毛症になった。パスポートの写真を撮るときに、帽子を脱いでウィッグを付けてくれと言われて困った。マイノリティ側になって、どのように相手に想いを訴えていくか。最終的には帽子のままで OK になったけれど。それまでは支援する側と思っていたけど、逆の立場になって、訴え方とか仲間のつくり方とか発信のしかたをNGO大学で学んでいた。[T.K]

【日々の生活の中の実践・行動変容】

- ・ NGO大学で学んだことが身の回りの選択基準になっている。自治のことなどN大に来なければ知らなかった。最初の“大阪都構想”の住民投票があったときに、N大の「自治」テーマのときの資料を見直したりした。N大で学んだ政治・経済の切り口が、今、ものごとを考えるときの基準になっている。[S.R]
- ・ 講座を通して学んだ言葉が、頭の片隅に残っている。NGO大学でもらったキーワードが生活に浸透していて、今も救われている。[O.T]
- ・ NGO大学のテーマ「足元からよくしていく」について分かっていなかったが、日々の買い物、暮らし方、ニュースを見ても、NGO大学で学んだことが、今、芽を出していると思う。[M.Y]
- ・ NGO大学で高い志を得た。論語ではないが50過ぎて天命を知り、自分の限界を知ったうえで社会の役に立つことをする。自分のできる身近なところでやる。自分の半径 1~2メートルぐらいのところ、人と会えばお互いに影響しあう。生きておしゃべりしていく中で何かを伝えられたらと思う。[Y.N]
- ・ 知識豊かな浜本副校長にその理由を尋ねたら、疑問に思ったことはすぐ調べることと教えられた。さらに人脈を得ること、体系的に理解することで知識を積み重ねていることが衝撃的だった。また、藤野さんには「自分のおしりは自分でふけるよう」と言われた。この2つがその後の人生の要所で指針になっている。その後、体系的に学び知識を付け考えを深めるため、社会人になってから大学へ。留学もして、NGO大学で身につけた行動力で今に至る。[K.A]

- ・ 自分で手づくりしていいいな生活をするようになった。うまい広告は一步ひいて考えるようになった。(うまいこと言う広告は絶対怪しい。キラキラ言うのを信じたらアカン!)めんどくさいことを楽しむようになった。[T.K]

【青年海外協力隊へ】

- ・ NGO大学修了から14年たって協力隊に行くことができた。今コロナ禍で一次帰国・待機中。まだ派遣期間が残っているので、また可能なタイミングで行きたいと思う。[M.Y]
- ・ 青年海外協力隊の70日間の派遣前訓練で学んだことやキーワードはNGO大学で学んだことや聞いたことばかり。N大で土台を作ってもらった。[M.Y]
- ・ NGO大学修了後、教員になって授業に開発教育を取り入れた。その3年後、青年海外協力隊でモロッコへ。イスラム圏で、ものの見方がひとつではないことを日々感じた。派遣前訓練で、自主的にウーリーシンキングを実施し、また自分なりの発信ができたこともN大で得た経験が活きた。協力隊から帰国する際に、ローマの国連機関で働いている運営委員OGの戸田さんにお会いし、N大のつながりから刺激を受けた。[O.Y]

【NGOで働く】

- ・ NGO大学をきっかけに、会社員からNGOに転職。受講した当時、第6回で参加者が輪になり、“ふりかえりと今後”について一人ひとり語る最後のセッションで、「将来、NGOで働く」と宣言し、今、実現している。[I.Y]
- ・ 青年海外協力隊後は仕事をしながら大学院へ行き、子どもができ、今はNGO(京都 YWCA)で仕事をしている。NGO大学で得た人のつながりが、今の仕事につながっている。[O.Y]
- ・ 私は今NGOで専従で働いている。NGO大学の運営委員の多くは、普段仕事をしながら、ボランティアでNGO大学に関わっていた。“NGO専門職”ではなく、国際協力やNGOに興味を持ち、関わる「市民」としての運営委員に、初期の頃に出会ったという原点を忘れずにいたい。今、職業としてNGOに関わられて幸せだと思う。[H.A]

【国際機関で働く】

- ・ 今はローマにある国連機関、「国連食糧農業機構(FAO)」の本部で働いている。運営委員を経験して得たことは、自分の生活の根っこが世界とつながっていることに気づき、どこを基軸にして日々暮らしていくのか、という視点。それから、世界中どこでも友達ができる。人とつながれる。仕事上の関係者ばかりと付き合うのではなく、人とどうつながっていくのか、NGO大学で身についたと思う。超エリート路線で今の立場になくてよかった。地面に足がついた生活ができている。[T.A]

【自分のこだわり】

- ・ 私に関わるNGO「ウータン・森と生活を考える会」もこだわりの強い団体。ある意味こだわりの強いNGO大学の主催者である関西NGO協議会には、東京のNGOとは違う角度の、こだわりのある主張を期待する。[I.Y]
- ・ 社会の問題に気づき、自らかかわり、自分ができることから始める、ことを意識している。特に環境問題でできることをやりたい。今は自宅の太陽光パネルで蓄電し冷蔵庫を動かしたい。ものをつくるのが好きなので、その延長で環境問題に関われたらと思っている。[M.H]

- ・ NGO大学で子育ての指針を学んだ。7歳と5歳の子どもに多様性や価値観の異なる人への配慮を教えたい。相手を攻撃するヘイトスピーチ、それを批判する言葉もヘイトで、合わせ鏡のような応酬になっている。子どもには相手の価値観を受け入れて、自分の意見を伝えられるような人になってほしい。[K.Y]
- ・ NGO大学に出会ってから、どんな場に出ても面白いことを見つけたり、つながりを広げたり、自分の価値観に自信を持って人に発信できるようになった。長くつき合える連れ合いに出会った。[O.M]
- ・ NGO大学のユニークな人を見てきたお陰で、自分はどんな風に生きてても大丈夫なんだと思える。[K.A]



【やりたかったことを見つけて実現できた】

- ・ NGO大学に参加した当時、絵描きとして壁にぶつかっていた。でも、勇気をふりしぼりエクアドルに通い、村人を応援する活動を続けている。絵も、豊かだが破壊されそうな森を描き続けている。それは私の一生の宝。[I.R]
- ・ 今は半分が障がい者の施設で職員、あとの半分は朗読家の活動をしている。いろいろあったけれど、納得のいく仕事のしかたを得た。運営委員で学んだことを模索してようやくたどり着いたかなと思う。[K.N]
- ・ NGO大学参加当時は小学校教員で、6年生になぜ国際理解が必要？と質問され、答えられなかった。その後インドネシアへ1年いく機会を与えてもらったのがNGO大学。[F.M]
- ・ NGO大学を通して、自分はどういう時代に生きているのか、ものごとの本質は何か、自分が行動して納得することは何か、を考えるようになった。今かかわっている「FM わいわい」というコミュニティラジオの活動を大切にしたいと思っている。YouTubeにもアップしている。大切にしたいことを中心に今後もやっていきたい。[K.N]
- ・ 20年前NGO大学に参加した当時、小学校の教員を「一生やる」と信じて疑いもしなかった。しかしその後、発達障害の子どもたちを支援するNPOに就職。国際交流協会や、幼稚園の発達障害の人とかかわっている。N大で知った「多文化共生ってなんなんやろう」という問いから、多文化の集まりを作りたいと思い、開催に至った。ちょうど今日がその第一回目「こんこん広場」の集まりだった。子育て中の人や、大学生、市議員、カナダや中国の人、精神障がい者支援をしたいと思っている人、支援学校の卒業生など、多様な人が集まってしゃべるだけだったけど、そんな場がくれたのは、N大でいろんな経験をしたからだと思います。[T.N]

3)その他印象に残っていること

【発題者】（※発題者の肩書・所属は当時のもの）

- ・ 武者小路公秀氏(反差別国際運動日本委員会、中央大学教授)に発題者として1泊2日、来ていただいた。夜の交流会も参加いただき、ギターで歌ってくれた。[K.T]
- ・ 松本哉氏(素人の乱5号店店主)の回は、有志でデモに参加したり面白かった。(第22、26期に招聘)[K.T]
- ・ 私はエクアドルで鉱山開発に影響を受けている村とつながりがあり、ひどい人権侵害を目の当たりにした。大好きな村や森が、破壊や汚染だけでなく地図からなくなるかもしれないと知った時、絵を描く以外に何かできることがないかと考えた。運営委員を引き受けた時、ここで何かしないと絶対後悔するという思いから、

その問題に関わっていた辻信一氏(ナマケモノ倶楽部世話人、文化人類学者)に勇気を出し必死でアプローチし、発題者として呼び出すことができた。[I.R]

- ・ 第19期で、壽賀一仁氏(日本国際ボランティアセンター)が言われた、「国際協力は日々の営みのなかにある」という言葉が印象に残っている。自分の中で納得できた。[S.R]
- ・ 野中章弘氏(アジアプレス・インターナショナル代表)の言葉、「真実と事実は違う」。野中さんには複数回、来ていただいたが、いつも言われていた。私に関わる町づくりの現場でその言葉を使っている。[T.M]
- ・ 野中章弘氏の「真実と事実は違う」「鳥の目で見ると、虫の目で見ると」という言葉。[F.K]
- ・ 神田浩史氏(AMネット理事、NPO泉京・垂井副代表理事)のストーブ理論。熱くカッカとなるほど、人が離れていく。適度な暖かさに人が寄ってくる。[T.M]
- ・ 田中優氏(未来バンク事業組合理事長、ap bank 理事)の言葉「インプットしても、アウトプットとしないという意味がない」「微力だけど無力ではない」[A.T]
- ・ 高橋哲哉氏(哲学者、東京大学名誉教授)に靖国や平和のこと。酒井隆史氏(社会学者、大阪府立大学教授)に自治や民主主義のことを教わった。[T.A]
- ・ 堀潤氏(ジャーナリスト)。YouTube のアジア人差別のなどの話が今の関心につながっている。[T.Y]

【人のつながり:自分の活動の広がり】

- ・ 自分が関わっている町づくりのNPOで、NGO大学の発題者でもあった中田豊一氏(参加型開発研究所)に来てもらい、メタファシリテーションの講座をやってもらった。[T.M]
- ・ もと運営委員の石崎さんに職員研修の講師に来てもらったり、もと運営委員の田口さんと地域福祉についてプログラムを立ち上げたりなど、NGO大学の人と接点を持ちながら、組織を変えたい。[K.Y]
- ・ NGO大学で出会った人を、勤務する小学校に講師としてどんどん引き込んでいく。[F.M]
- ・ 野中章弘氏を勤務する学校の全校学習会におよびした。もと運営委員の荒川さんにも来てもらった。講師として来てもらいたい人にN大で出会えた。[F.K]



【人のつながり:影響し合える仲間】

- ・ とともに運営委員を担った人は、いまだに親友。そういう人間関係もプレゼントしてもらった。[O.T]
- ・ 「友だち」の幅が広がった。10年以上も年が離れている友だちがいることに同僚から驚かれた。[F.K]
- ・ 多様な職業の方と話ができて、異業種交流の場になっていた。自信を取り戻したり、細く長く、何かあったら頼れるつながりができた。[F.K]
- ・ N大のつながりは、今もずっと生きている。知人でもなく友人でもなく、“同志”と私は思っている。[K.N]
- ・ NGO大学がなかったら出会うことのなかった人たちは、私にとって財産。つながりがひろがって、みなさんの活躍を見られてうれしい。[H.Y]

【交流会・事務局など】

- ・ 交流会という「場」をつくるのが楽しかった。1泊2日の講座のなかで、安心な「場」をつくることの一環に“食”もあった。[S.R]

- ・ 講座運営だけでなく、受付や参加者対応などの事務作業も重労働。過去の資料整理をしたが、関西NGO協議会に事務関連の膨大な資料が5箱もあった。ラミネートの道案内など、毎年、資料や備品、事務のノウハウなどを改善し、受け継いで運営していたことがすごいと思う。[S.R]
- ・ 運営委員が事務局も担うようになった20期以降の苦しい時期に、運営委員であった藤井久美子さんが大学院に行くことになり、事務を担ってくれた。その後24期まで引き受けてくださり、おかげで事務局の機能が維持された。改めて感謝したい。今回の運営委員の座談会や冊子作成についても、佐久間さんが協議会と関係を続けてくれたことが大きい。[H.Y]

【番外編】

- ・ NGO大学の人のつながりで、番外編企画をいろいろやった。東京の学びの場「地球市民アカデミア」メンバーに会いに行きフィールドワークを実施。北海道へアイヌを学ぶツアー。萱野茂さんにもインタビューした。沖縄へのツアーは複数回行っている。これらの企画は参加者の手作り。[D.H]
- ・ 番外編ツアーは海外も。ボルネオ・サラワクツアーやタイ・カンボジアツアーなど。
- ・ 自分たちで企画してツアーを手づくりしていた。NGO大学で学んだ「参加型」や、事前学習、アウトプット、課題を自分事として考える、といったノウハウが活かされたツアーになった。[D.H]



【N大コラム】「NGO大学のロゴについて」

三浦弘志 (NGO大学運営委員、デザイナー)

第21期関西NGO大学(2007年度)を開講するにあたり、関西NGO大学のロゴマークをつくりました。市民を巻き込んで一緒に考え、進むべき道を指し示そうということを表したものの。



講師からの一方通行ではなく、講師も参加者も一緒に学ぼうという関西NGO大学のやり方を表現したものである。

大学という名前がつくものの堅苦しい学びの場ではないので、あえてひらがなで「だいがく」とした。ブルーはさわやかな青空のような社会になることを願って。

Gの文字が回転した矢印に見えたのと、単なる渦巻き好きから出て来たデザインです。夜の交流会で飲み過ぎて目が回ってることを表現したわけではありません。念のため。

(Design Hiroshi Miura)

第4章：私にとってのNGO大学

ここでは、運営委員だけでなく、NGO大学に深い関わりを持つ方々へのインタビューや文章を紹介し、様々な角度からNGO大学をふりかえる。(※肩書は全て講座当時のもの)

1. 藤野達也 氏（初期運営委員、第8～25期校長）

■何がいい気持ちか、やってみると



4年の会社員、30年の国際協力NGO職員を経て、この8年暮らしてきたところは、南洋の島の村。そこは、国際線、国内線と飛行機を乗り継ぎ、お客が揃わないと出発しない船外機付きのボートに5、6時間トラックの荷台で1時間、そして歩いてしばらくの百人ほどの集落。

雨水を溜め、湧水を汲んで飲み水に。洗いもの、洗濯、水浴びは川に。
夜の明かりは焚き火か電池か太陽光充電の灯り。
日常のゴミは自然に還るものがほとんど。

農薬、化学肥料に縁のない畑で作物を育て、海、山の自然の恵みを採り、薪で煮炊き。
新鮮、安全、素朴な食生活。
五体を使う日常は、用意されてる身体的能力を引き出し、いい運動。

家は自力で建て、生活に必要なものの多くは、周りで調達し、お金を多用することはないので、稼ぐことに執着することもなく。週一の市場と小さな雑貨屋があるくらい。

子どもの学校の費用、薬代にもお金が要るようになって、
山の村ではコーヒー、バニラ、平地の村ではカカオ、檳榔などの換金作物栽培をする人も。
それはその労働が正当に報われている仕組みではないけれど、それでも他人に強制されるのではなく、自分の判断で必要なだけ働いて、キリがいたら、木陰で口を真っ赤にして檳榔を噛み、
ぺっと吐き出しながら、みんなとおしゃべり。まわりのできごとはこちらで知る。
携帯電話の電波は届かないし、郵便、宅配もない。
眠くなったら、いつでも眠る。夜更かし、早起き、寝坊、お昼寝も。
季節の行事と珍しい客が来たときには、トカゲの皮を張った太鼓を叩き、歌って踊る。

車は、橋のない川を渡り、未舗装で穴だらけで雨が降ったらどろんこになる数少ない道を守る。
荷物が重くても歩くのが基本。遠出のときに、朝夕だけ走るトラックの荷台に乗っかる。

マラリア感染が日常的。
小さな診療所に薬も十分なく、あってもやたら抗生物質。病気の見立ても微妙。
統計とかははっきりしないけれど、平均寿命は短いはず。

学校はあるけど、教科書は共用。雨が降れば行かないし、先生も来たり来なかったり。

行進、体操バラバラ。ゆるい、ゆるい。
地域の言葉、人との接し方、芋の植え方、動物・魚の捕らえ方・さばき方、椰子の木の登り方、
女の子は袋の編み方、男の子は家の建て方を、
親、兄弟姉妹、親戚、子ども同士、まわりのみんなから実践で教わる。
だいたい上の学校に行けたとしても、その先、就職口はごくわずか。

行政サービスとかないけれど、税金払ってないし。
役場、警察は町だけ。揉め事は、村の話し合いで解決。
国を意識するのは、独立記念日と選挙の時くらい。

約束はあてにならない、言いつ放し。時間はだいたい。
まとまったお金を手にすると、それが公の預かり金、他人のお金であっても、
自分のものにしてしまう人が珍しくない。
けっこう嫉妬深く、身内意識が強かったりも。
そんなこんなでまわっているところ。

こんななかにまげてもらい、古いタン屋根の家に、新しく木と竹の台所小屋を建ててもらい、
居ついた5匹のわんこたちに仲良くしてもらい、
たっぷりの自然のなかで、なまったからだながら、できることをし、
あれもこれもと周りに手助けしてもらい、
こちらからも、知ってることを話し、やれることをお手伝いし、
環境に負荷を与えることは少なく、
他人から奪うことはなく、競うことはなく、指図を受けることなく。

日の出とともに目覚め、まずお湯を沸かし、山の村で穫れ、中華鍋で煎ったコーヒーを。
半分くらい自給の食事と野良仕事で、日本での過食でふくらんだ腹まわりがすっきり。
ゆったり時間が過ぎ、暗くなってしばらくしたら寝る毎日。
日本で仕込まれた考え方や暮らしとの対比はとてもおもしろく、
何が必要で、何がいらぬか、得るための代償があるのか、ないのか、
何が気持ちいいことか、
どこまで求めるのか、などとのんびり考えながら。

こんなことになったのは、NGO大学での入力が効いてるからに違いない。



2. 榛木恵子 氏（元関西NGO協議会事務局長、元NGO大学副校長）へのインタビュー

講座の立ち上げから加盟団体(公益社団法人 日本キリスト教海外医療協力会・JOCS)の職員として参加し、第8～12期までは副校長、その後、主催団体である関西NGO協議会の事務局長として側面からサポートしていただくなど、多方面からN大のことを見て来られた榛木恵子さんにお話を伺った。

NGO大学は、関西の国際協力・国際交流活動の黎明期に携わっていたパイオニアのみなさんが、関西国際協力協議会加盟の職員研修として始め、「簿記の仕方」などの実務的な講義もあった。けれども、現状としてNGO職員は時間がなくて参加ができない。「若手に運営を任せてみるか」と藤野達也さん(元校長・当時PHD協会主事)と榛木さんが呼ばれて話し合い、講座を一般市民対象として参加募集する方向性を決めた。職員が市民と一緒に、時には市民から学ぶというのはパイオニアのみなさんとは異なる考えだったが、藤野さんは最初から明確に構想を持っていたようだ。

大阪YMCAが事務局を担当し、毎日新聞の広報協力を得て認知度を上げ、会社員や学生などいろいろな立場の人が集まってきた。NGO・NPOのセミナーとしては普通だったが、参加者が夜を徹して話をする、しゃべりたおす、講師・運営委員も一緒に話す、年齢を超えた話をする、序列なし、終わったらふらふら、といったことを国際協力に関心のある「外の人たち(市民)」と一緒にできたことがとても新鮮だった。これがNGO職員に、様々な出会いと気づきをもたらした。自覚していなかったけれどまさにイノベーションだった。バブル(おおむね1987～1991年ころ)前後は、事務局担当者から申込みが「80人待ちです！」と聞かされ、心底びっくりした。

運営委員会が、企画の中心を、いわゆる海外から足元(地域)の課題とのつながりに置きはじめたころ、国際協力に関する講座がほかにも多数開催される時期と重なった。国内の社会課題に取り組んでいる人たちが新たに参加してくれるようになったものの、人々のライフスタイルの変化などで、参加者数が減少し収支バランスを取るのが難しくなった。協議会の中でも人的資源が限られており、他の事業との優先順位を考えると主催団体としてN大を今までのようにサポートすることが難しいと判断した。結局、運営委員会が協議会から独立して企画運営を担うことになった。N大関係者が多様な形で協議会の事業に参加していることは説明したが、N大の修了生や参加者が加盟団体等への就職、直接の関わりがないではないか等の意見が理事会で出ていたことも確かだ。

N大で実践してきたのは、課題をひとつひとつ考えること、自分で気づき発見すること、市民の活動を尊重することだ。運営委員が、N大の運営で試行錯誤しながら、深め、広げたネットワークが、言葉だけでなく「国際協力、共生社会」をリアルに経験する場を支えていた。

聞き手： 佐久間量子(関西NGO大学運営委員)

3. 神田浩史 氏（AMネット理事、NPO泉京・垂井副代表理事）

■“嘶屋”を育ててもらったNGO大学

初めてN大に声をかけてもらたんは1992年の年初。この年度の最終回で予定されていた松井やよりさんの代役として、ODAの業界から飛び出て、NGOに首を突っ込みだしたばかりの時。ODA批判で、当時は外務省に行ったら門前払いを食らってたのに、外務省のNGO担当者と議論する、という設え。会場の関西セミナーハウスに行ったら、せっかくやから理事会にも陪席するよう促され、そこでの激しい議論にもびっくり。初日の夜のセッション

ンを終えたら、朝まで飲み明かして、翌朝のセッションへ、というN大スタイルの始まりでした。

それから、よう呼んでもらいました。ODA政策やNGOのアドボカシー活動について語らせてもらうこともあれば、日常の暮らしと世界とのつながりについてや、市民社会や民主制についても。幅広くにテーマ設定してもらったことで、“嘶屋”（落ちのある“嘶家”さんとは異なり言いつ放しで終わるので自分自身をこう呼んでいます）のネタを広げることができたなあ、と。そう、N大で育ててもらった“嘶屋”です。

強烈に印象に残ってるのは1995年。阪神淡路大震災の年で、11月には APEC(アジア太平洋経済協力)大阪会議が開かれた年。神戸にも足を運びながら、APECに向けてのNGOの並行会議の準備に忙殺されていた中、N大校長から「パプア・ニューギニアのレゲエ・バンドをN大に呼んで前座でレゲエの嘶して」との依頼。願ってもないネタと喜び勇んで、会場の六甲山へ。けど、嘶を始めると、こっちの意気込みとは裏腹に、参加者のレゲエへの関心は薄そう。どないしよう、と思てたら、「バンドの到着が遅れるので尺を伸ばして」と何度もメモが。伸ばしたら伸ばすほど嘶はマニアックに。自分の好きなネタに関心ない人に伝える難しさを実感。おまけに、パプア・ニューギニアのバンドはレゲエ・バンドではなく、一曲だけレゲエ調にアレンジした曲があっただけ、という落ちまでつきました。

これ以外にも、暮らし密着で世界とのつながりを滔々と語ったけど、反応はさっぱり、なんていう回も印象に残ってます。熱量の高い参加者の皆さまに、ほんま、鍛えてもらいました。そして、何よりも運営委員の皆さまが丁寧に参加者主体の学びの場を準備され、実践されていくのが、私にとっては大きな大きな学びでした。時には、準備段階から参加させてもらってんで、単に手法をなぞるだけやなしに、自分自身が活用するための根幹となる点なども学ばせてもらたな、と思てます。これは、大学の講義などで「嘶+ワークショップ」を構築する上で役立つだけやなしに、地域社会に入っていく時に、地域の人々と対話を進めていく上でも、役立ってます。ほんま、感謝、感謝です。



N大で出会った多くの人々と、今もご一緒する機会も多いし、出会う機会も多いのも、大きな財産となっています。社会の課題が複雑化している中で、そこを掘り下げて一緒に学んできた“共犯性”とでも言うんやろか？ 久々に連絡をとり合うても、時の隔たりを感じひん安心感がありますね。

N大に育ててもらった“嘶屋”。今も細々と、その営みを続けてます。N大で培われてきた社会の課題の捉え方や、学びのエッセンスを、自分なりにまったりと打ち出しながら。また皆さまとご一緒できるのを楽しみにしています。

4. 「NGO大学とわたしとこれから」 NGO大学修了生・運営委員経験者の寄稿

■N大の学びは不滅

山下奈美(第21~23期運営委員)

N大に思い切って飛び込んだ日は忘れられません。JICA神戸で偶然見つけたピンクのチラシに、ひらめくものがありました。企業で働きながらももんと考えていたことを夜更けまで語り、受け止めてくれる人に出会えた時の喜び！ グループワークで仲間と出会い、運営委員になってN大と関わる間にわたしの人生は面白く展開しました。N大で生まれたご縁を断ちづらく、N大を軸に、気づけば職場が2回変わっていました。

グループワークから広がったYADOKARIの活動(サイエンスカフェ、神戸のアーティストさんとの出会い)や、

平和学習活動(旧真田山陸軍墓地、ピースおおさか、SEALs)など数えきれません。食を考えるテーマから、農家お泊りやら有機農業勉強会に参加したりと、N大の学びは広がりました。わたしは国際協力よりも、経済の歪みと戦争平和への関心が強く、経済を学ぶべく大学院に進学しましたが、根っこはN大の学びから外れませんでした。(何と言っても「NGO大学」ですから！)

N大で好きなワークは、浜本さんの「グループワークへのメモ」と「私が望む社会」です。自分の想いと向き合っ
て毎年文字にしていくことで、自分の中にコアができました。いま当時のメモを読むと、15年経って社会が変わ
ったと思えたり、自分が変わったと感じる部分があります。改めてN大の記録を読み返すと、濃厚で刺激的な
日々の尊さを実感します。

仲間を見つけて一緒に何かに取り組む楽しさ。伝わるようにあれこれ考える工夫。「正解」のない問題を問い続
けること。いくつになっても学べるし出会える。そんな勇気をN大からもらいました。

大学院の研究は成果を出せなくて途中下山しましたが、縁あってマルクスを経済理論で解かれた置塩信雄先
生の『蓄積論』(1967年版)に出会いました。資本家が生産手段を独占する資本主義は矛盾を抱えており、(奴隷
制、封建制と同様に)資本制社会は過渡的な社会形態に過ぎず、新しい社会への移行が不可欠であること。
資本主義では労働者の搾取や膨大な無駄(昨今のファストファッションを見るに)、戦争、そして環境破壊が不可
避、とあります。そして、もしも今N大を開催できるなら、発題者に『人新世の「資本論」』の斎藤幸平さんと呼びた
い。経済成長前提の資本主義は限界にきており、気候変動が不可避であること。持続可能な共同体社会。自分た
ち(労働者)で生産手段を自律的に共同管理する組織のワーカーズコープ。マルクスの理念も変遷があり、後年は
脱成長 Kommunismus を目指していた、などなど。斎藤さんによる
150年前のマルクスの読み解きとN大で浴び続けたメッセージ
は、とても近いと感じます。



いまのわたしは市民活動こそしていませんが、日々の生活は
脱成長でスローな方向へ向かっています。ジャワガムランを演
奏させてもらい(音楽も影絵芝居のお人形もお話も、誰の所有
物でもない、という意識が心地よいです)、最近始めた太極拳で
悠久の時を感じます。戦争のような職場組織からも離れていま
す。どの道を選ぶのか、ひとりひとりの選択ではあるけれど、不利な立場の人に自己責任を押しつけず、すべて
のひとに自分の道を選ぶ権利と力が与えられるような社会でありますように。そんなことを思っています。

■おわりがはじまり

中野由貴(第7期修了、第6～8期事務局担当、第12期運営委員)

関西NGO大学(以下、N大)で出会った人と物事はみんな、私にとって「いい塩梅」だ。そして私をつくる大切な
「成分」になっている。人も世界も価値観が違って当たり前。参加者、運営委員、講師、立場も年代も異なるどうし
が(いいたいことを)よくしゃべり、よく聴く。みんな真剣で、相手の意見を否定しない。討論や議論になるときも
口角泡を飛ばすでもなく、闘いなどではもちろんない。そんな塩梅のつながりに感謝。ありがとうございます。

N大との最初のつながりは、当時通っていた大阪 YMCA の英会話教室で「仕事がなくなるんです」とつぶやいた
ことから。すると仕事先の書店が閉店した翌月から関西NGO協議会事務局で働くことになった。それからN大
の6期の途中から8期まで事務局、7期で修了生、12期で運営委員、22期から24期の交流会のお料理を作りと、
こんなに長いおつきあいになるなんて。神戸学生青年センターに就職できたのもN大がご縁だ。あらゆる立場で

関わられたおかげで、私の興味関心のアンテナをあらゆる方向へのぼすことができた。それが今の仕事につながっている。

現在、私は童話・絵本・食・宮沢賢治のことをテーマに活動している。創作や執筆、企画や編集に関わったり、宮沢賢治や東北の食をテーマに講師をする機会もある。食の活動に関しては、N大での「世界の食料事情」「日本の農業」「環境問題」への学びと気づきから「食べものから世界を見る視点」が培われたことが、今とても強みになっている。N大は私が絵本や宮沢賢治について話すきっかけも作ってくれた。懇親会で出会った「宮沢賢治ファン」のつながりから、小学校や高等学校などで宮沢賢治の授業をする機会が生まれた。その人のつながりと、小学校訪問はもう10年以上続いている。

これから私が生活や仕事で生かしていこうと思うN大での経験は、運営委員時代の「伝える」こと。委員になると途端に受け身でいられない。自分から話さないと何も進まない。担当回の委員同士で、それから発題者も交えて打ち合わせをする。参加者とも話し合う。司会や進行もある。そのうちテーマと内容で頭の中がいっぱいになる。するとある日、「伝えたいこと」が明確でないから伝わらない、という気づきが降ってくる。さらに最後のふりかえりで「伝えたいこと」と「伝わった」ことは同じとは限らないという気づきもやってくる。それでちょっとへこむ。実は今も同じことをやっている。だけど今は「あの時乗り越えられたから大丈夫」と、運営委員のときの「伝える力」が私を支えてくれている。

今、2021年5月コロナ禍。なんだか「世界」はよけい複雑に交ざり合っていると感じる。N大のふりかえりにあった「それではあなたはこの気づきをどう生かす？」の問いかけに思いを馳せる。30年という地層にあるそれぞれの参加者の気づき。そこから足元・地域を見つめ世界につないだ思いと行動と実践の積み重ねは、きっとそれぞれの場所でそれぞれの形でふんばっているはず。そんな根っこを引っっこ抜くのは大変そうだ。でも芋ほりみたいな楽しいことが待っているかもしれない。関西NGO大学運営委員会が活動を修了して、これからはじまるものはなんだろう。ちょっと楽しい気持ちになる。

■市民の市民による学びの場

栗本知子(第17、18期、第26～30期運営委員)

今回N大の30年を振り返る報告書の編集にかかわり、大袈裟に言えば、N大が日本の市民社会の発展の中で、この時期に取り組みされた意味を思いました。

そう感じた理由のひとつに、私の世代の特徴があると思います。1972年生まれの第二次ベビーブーマー。最高倍率とも言える受験戦争を経験し、大学卒業の頃はバブル崩壊で就職氷河期。フリーターという言葉も市民権を得ていない中、「正職にもつかずにふらふらして」と批判されながらバイトでしのぐ人がたくさんいました。そんな弱みにつけ込むように、1996年には労働者派遣法が規制緩和され、同世代の優秀な女性の多くが「ひとまず」派遣労働に就き、今や女性の貧困が社会問題になっています。そんな社会に疑問を感じた人たちが、市民活動の場で活躍し始めた世代でもあったと思うのです。

私自身、学校教育に違和感を感じつつ自己否定的な10代を送りましたが、20代になって、パウロ・フレイレの『被抑圧者の教育学』に出会い人生が変わりました。自己責任ではなく社会の側の問題を問うという視点を心得、文字通り解放されたと感じたものです。

そして、最初に参加したのは、PARC 自由学校から派生して生まれた大阪自由学校の「ワークショップ入門」講座でした。池住義憲さんや楠原彰先生から、パウロ・フレイレの考えに基づき、互いの経験を持ち寄って学び合うワークショップの思想を学び、翌年からは大阪自由学校のメンバーに加わり講座の企画・運営をはじめました。事

務所は通称「天六さじき」といわれ、大阪東ティモール協会やエコリーグなどと事務所を共有していました。ほどなくアドボカシーに取り組むAMネットが立ち上げられ、天六さじきに出入りするだけで、様々な市民活動の最先端の試みを知ることができました。

自由学校では、ちょっと硬めの平和講座やゆるゆるぼちぼち大阪を歩く講座など、様々な講座を開催しましたが、私が特に力を入れたのは、子ども自身が企画し子どもの権利に関して考える「子ども講座」でした。この頃は他にも、京都自由学校や関西セミナーハウスの「開発教育セミナー」、地球市民教育センターなど、市民による学びの場が様々に開催され、ワークショップの手法が広がり、定着した時期でもありました。学校嫌いで短大しか行かなかった私にとって、こうした様々な学びの場で自分の核を育んだと感じます。

そして、大阪自由学校が関西NGO協議会に加盟したことをきっかけに、加盟団体のスタッフという位置づけで、私は2003年、第17期ではじめてN大運営委員になりました。一人ひとり考え方の異なる運営委員で知恵を持ち寄り、それこそ呼びかけ文の一言一句を吟味しながら企画を詰めるような作業は、問題意識の近いメンバーで企画に取り組んでいた自由学校とはまったく違う体験でした。

ふりかえると、N大のもっとも大きな特徴は、本当に多様な人々を受け入れる場のあり方だったように思います。本誌に掲載するため、片岡さんとともに浜本さんにインタビューをしましたが、浜本さんがはじめてN大に参加したときに感じられたように、誰でもあっても責められることもなく、とりあえず居てもいい場。寝食を共にし、世代も業種も越えて語り合う、なんとなくゆるく受け入れ合う場であることが、N大の最大の特徴だったのかもしれない。

互いに尊重し合い、関りあうことで、人はエンパワメントされ、仲間ができ、課題に突き当れば声を挙げ行動することのできる主体的市民になる。私にとっては、N大をはじめ市民の学びの場をつくるということ自体が、社会変革のための行動です。

■トンネルを抜けて

一井リツ子(第25期参加、第26～30期運営委員/洋画家)

2011年、東日本大震災の年に25期生として関西NGO大学を受講、社会的にも自分史としても大きな変動の中、まるで1つのトンネルを抜けるように関わった時期であったと、今思い返されます。N大には、煮詰まって出口の見えなかった頃「私なりに何かできること」を探しにきました。毎回様々な社会問題を深く、交流会で朝まで(深酒と共に～)掘り下げ、常に陽気で真摯な活気ある講座は、そういう専門外の人間にも引け目を感じさせない優しさや個を尊重する空気に包まれていました。

その後も講座のたった1行の呼び掛け文作成のために、運営委員の皆と長時間こたわって激論を交わしたり、毎回参加者に理解を促すための構成上の工夫等もあり、己の意見を構築し実践を経験したりと、様々な意味で鍛えられました。(笑)

運営委員として担当し印象に残るのは、「乱開発」をテーマに、ナマケモノ倶楽部世話人/文化人類学者の辻信一氏を発題者にお呼びした27期の講座です。座談会でも話しましたが、個人的にエクアドル・インタグ地方の鉱山開発問題と出会い、この地に関わっておられた辻さんとの繋がりを実現できたことは、当時全く他の手段を持たなかった私にとって唯一の希望でした。



現地で起きている人権侵害や環境危機などは、世界的に破壊が加速するその縮図であり、当然私達人間も喪失される社会や生態系の一部であること。見えづらい世界各地の過酷な実情を知り、無意識のまま消費者としていかに自分が加担しているのか、このままでは持続不可能な社会となるという前提から自分たちの行動や価値観、ライフスタイル変容の必要性などを共有、多くの率直な意見が飛び交い会場は大いに沸き、講座后感想では「とにかくいっぱい感動しました。人の話を聞いて涙が出たのは初めてかもしれません。」「手遅れでも、資格がなくても、言わなきゃ、やらなきゃいけない、というお言葉グサツと迷いを砕いてくれた。」など、当時私も胸が熱くなったのを覚えています。

私は2013年～現在も現地報告会等の活動を続けています。以前鬱に陥った頃に人前で声が出づらくなったトラウマから、最初はこういった活動はとてハードルが高かったのですが、N大での学びから勇気や度胸を持たせたことで、微力でも自分のできることをやろうと思ったのがその発端となっています。

私がエクスアドルで感じたのは、開発のために犠牲を強いられる人々の苦悩だけではなく、抵抗を続ける人々の強さや、おおらかさ、そして早朝ロッジで聞いた多くの生き物たちの「森の声」、つまり生きる力や生命の循環するダイナミズム、それが今も洋画家でもある私を惹きつけて止まないのです。

こうした講座で、素晴らしい発題者や参加者の方々に出会え、多方面から問題を考えることができたこと、試行錯誤しながら一緒に講座を作り上げていった時間や運営委員の仲間、そして何よりも様々な意味で「可能性」というものを感じえた事、それは私の宝です。

そしてもう1つ、私が大好きだった「小林聖心口ザリオヒル」会場での最後の講座の際、当時介護をしていた義理の母が亡くなり葬儀を終え、ハトハトでN大に駆け付けたのを覚えています。本当にいろいろな意味で、再生の時であったと懐かしく思い返しています。

■N大で得たもの

岡ゆりこ(第10期修了、第11、13、20、21期運営委員)

関西NGO大学10期に参加していた当時の私は児童学を学ぶ学生で、将来的に「国際協力」の仕事がしたい、まずは青年海外協力隊に参加するか、と漠然と考えていました。10代だったので交流会は斬新で、「こんな呑み方があるのか!」と驚いたのを覚えています。「多感な」(この言葉、10期参加者の学生が印象的に使って10期生の間で流行っていた! 20年以上経ってもこの言葉を聞くと当時の記憶がよみがえります)時期にN大に参加したことで、生き方、ものの見方、仕事への姿勢、大人の余暇の楽しみ方など、たくさん教えていただきました。グループワークではこどもに関わることがしたい!と仲間を集め、「play with the children(プレチル)」として幼稚園、障害児入所施設、独特な教育をされている私立学校など、子どもを取り巻く現場を訪問させていただきました。運営委員が創り出す講座以外でも大きなものを得ました。

お子さんがいる方にもぜひ、N大に参加する機会を持って欲しいと考え、11期から運営委員となってN大に「託児」を取り入れ、早速、参加者のお子さんを預かることになりました。後に「介助」が加わり、多様な方がN大に参加できるようになったのはうれしい限りです。1年の留学後に復帰した13期では2週間の教育実習の真中の週末に運営委員合宿に参加するという強行スケジュールをこなし、合宿中に先輩運営委員から



アドバイスを得て教育実習の研究授業を開発教育的な内容で行いました。これが思いの外手応えがあり、それまで思ってもみなかった高校教員の道に進むことになったのです。その後、初志貫徹で青年海外協力隊としてモロッコに赴任、帰国後はNGOで外国人支援の仕事につきました。学生時は「国際協力」に魅力を感じていたのですが、モロッコで自分が現地の方々に心身ともに支えていただいた経験から、日本に住む外国人と関わりたいという考えにシフトしていきました。この仕事でも多様な背景を持つ外国人と接する時にN大で得た様々な「ものの見方」が活かされました。

現在の私と言えば変わらずNGO(京都YWCA)で仕事を続けています。法人内に新設された保育園担当となり、奇しくもN大参加時に考えていた「こどもによりよい環境を提供すること」に頭をフル回転する日々となりました。土地柄か、外国にルーツを持つ園児も多く、今の私のテーマは「多文化共生」。常にテーマを持って物事に取り組んでいるのもN大の大きな成果です。

※託児については第2章「NGO大学という“学びの場”の作り方」を参照。

■ぼちぼち・ふわり

友前尚子(第15、16期参加、第17期運営委員)

私が関西NGO大学にはじめて参加したのは、2001年9月。ノートの第15期・第1回の記録には、「国連人間開発についての報告書」「グラミン銀行」「エンパワーメント」「開発とは」「平和維持活動」・・・などの言葉が並んでいる。きっと、藤野達也さんのお話を一言も聞き漏らすまいと必死になってメモを取っていたのだろう。その当時の私にとって、N大で聞く話は何もかもが新鮮で「目から鱗がおちる」ものばかりだった。奇しくも2001年9月にはアメリカ同時多発テロが起こり、10月のアフガニスタン攻撃へと世界が大きく動き、「世界とは何なのか」「国際協力とは」「平和とは」ということを、誰もが考えざるを得ない時でもあった。

N大への参加は、この2年前の1999年の関西セミナーハウス活動センターの「開発教育セミナー」に参加したことから始まっている。小学校教員として赴任した現場で初任者である私を待ち受けていたのは、ボヤの片づけや壁の落書きのペンキ塗り、万引きをした子どもたちを警察やコンビニへ引き取りに行く、深夜の公園廻り・・・と「子どもの荒れ」を象徴するものだった。「学級崩壊」という言葉が生まれ、子どもたちが「荒れ」という方法で必死に悲鳴を上げている状態である学校で、一番子どもの年齢に近い自分に何ができるのかを毎日模索していた。そのような中で、先輩教員から「何かヒントがあるかも」とすすめられ、チラシに書かれた「貿易ゲーム」の「ゲーム」だけの部分に、「なんか面白そう」と惹かれてセミナーに参加したのだ。セミナーでは、N大の先輩でもある浜田進士さんが「貿易ゲーム」のファシリテーターをされていて、私は「貧しい国から豊かな国に出稼ぎに行き、周りの見えない状況でひたすら製品を作る」という役割を通して、それまでの自分の価値観を揺るがす大きな衝撃を受けた。その衝撃が学びの意欲となり、30歳ごろまでの約6年間はひたすらセミナーや集会、スタディーツアー、労働組合活動などに参加していた。毎週土日には、がむしゃらに何かに参加していたその時期に、浜本裕子さんから「こんなのもありますよ」と声をかけてもらい、N大に参加するようになったのである。

結局、15期は3回、16期は全回、17期は運営委員と、3年に渡って徐々にN大の深みにはまり現在このような文章を書かせてもらっているのだが、N大での3年間の経験は、蛇が卵を飲み込んだ図のように、私の人生の中の大きなふくらみのある部分となり、現在の活動の基礎となっている。学校現場という狭い場での「子どもの荒れ」の解消ということから始まった私の活動であったが、N大でのさまざまな分野の発題者から得た広い視点で見ると、「子どもの荒れ」の背景には、保護者の雇用の不安定や過労死、不景気、貿易の自由化、新自由主義、グローバリゼーション、政治、人権などの世界的課題があり、それらを解決しなければ、子どもをはじめとす

る「社会の中でその時々の問題の影響を受けやすい立場の人」に皺寄せが来るのは当然であることに気づかされた。

現在、私は、自分の生活する地域で、いくつかの小さな活動を積み重ねている。子どもとあそぶ、障がいのある人と買い物をする、外国出身の人と料理を作る、お年寄りと歌う、色々な人とボーっと過ごす、畑で野菜を育てる、時には強く主張する・・・それぞれの活動にまとまりはないが、自分の足元の生活が世界と繋がっていることを感じながら毎日を過ごしている。N大ノートが一番初めに書いていた「独りよがりでないのか、傲慢であるのではないか」という不安を持ち続けることを大切にしつつ、これからも自分の身の丈に合わせた活動を「ぼちぼち・ふわり」と続けていきたい。

■N大とわたしとこれから～気づき、学び、行動～

坂西卓郎(第11期修了、第16、17、24期運営委員/現 PHD 協会職員)

○「気づき、学び」⇒世界の課題は私たちとつながっている！

N大では様々なことを学んだが、最も大きなものは「国際協力とは私たちの生活とは無関係ではない」ということだと思う。当時私は10代で、そのことに大きな衝撃を受けた。そして、N大の最大の特徴はそのことを沁みこませる時間とアプローチがあったことだと思う。

「気づき、学び、行動」というキャッチコピーに凝縮されていたように、一連のプロセスが意識されていた。運営委員のファシリテーションもさることながら、それを支えていたのは参加者の熱意だったように思う。一泊二日という豊かな時間があり、時に熱く、青臭い議論を徹底的に交わすことができた。私の国際協力への想い、その骨格はこの時に厚めに形成されたのだろう。でなければ生業としての国際協力活動と生活を今も両立していたかは定かではない。つい先日、学生から「国際協力とは？」と聞かれ、とっさに「悩むこと、考え続けること」と答えた。N大での原体験が言わせた言葉だと思う。教科書で学ぶだけでは得られない。そういう場が30年続いてきたことに敬意と感謝を持つとともに、一抹の寂しさも感じてしまう。世界がますます複雑になっていく昨今、これからの社会を担う若手にこそ必要な場だと思う。



○「行動」⇒水俣へ

さて、N大での学びからの私の行動、いくつかあるが直線的なものは「水俣で国際協力」ということになるだろう。当時、国際協力の先輩からは「水俣に何をしにいくんだ？ もう終わったところだろう」と言われたことがある。「MINAMATA」自体が終わったかどうかはさておき、私の中では「自分の足元を見つめなおす」という意味で国際協力の延長線上に水俣はあった。

○「行動」⇒みんなのいえ設立

時は巡り、現在は国際協力NGOであるPHD協会でも事務局長をさせていただいている。長くN大で校長をされていた藤野さんの後を受けてということには縁を感じる。しかしながら、現在はコロナ禍で主軸事業だった海外からの研修生招聘事業が休止を余儀なくされている。そこで2020年10月に国際協力・交流シェアハウス「みんなのいえ」を開設した。国内で困窮している難民申請者や海外出身者の方と共に生きるためだが、この活動は厳密には国際協力とは区別されないようだ。政府関係者からもそういう指摘を受ける。

しかし、N大で学んだ国際協力という観点では、十分にそれに値すると思っている。それは支援であり、共に生きる試みであり、贖罪であるからだ。南北問題の背景に工業先進国の関与が深かったように、現在の多文化共生、労働問題などの背景にもそれがある。つまり、外国人における生活課題の起源は私たちの差別意識にあると思っている。今だに問題は私たちがつくりだしている。

N大での学びをこれからも実践していきたい。私たちの課題解決のために。

■会社では出会えない人が、NGOにたくさんいた

武田かおり(第15期修了/現NPO法人AM ネット事務局長)

バブル期に学生時代を過ごし、就職氷河期に入りつつあったが選考に落ちることもなく、就活早々、数社の内定をゲットした。出世欲も強く、部下を持ち、全国一位の売上も取り、結婚し、勝ち組だと勘違いしていた。内定をもらえない人・出世できない人は、努力が足りない・情報収集ができていないからだ、と内心思っていた。しかしその後、まさかの燃え尽き状態になり仕事をやめると、肩書を「主婦」しか書けなくなった。

次は何をしようか…。そんな時、ふと思い出したのが学生時代の友人の「会社では出会えない人が、NGOにはたくさんいる」という言葉だった。社会問題やNGOに特に興味があったわけでもない。サークル気分で新たな出会いを求めて、という極めて不純な動機で私のNGO活動はスタートした。たまたま訪ねた関西NGO協議会で紹介してもらったのが、NGO初心者なのにぴったりのN大だった。講演を聞くだけでなく、顔見知りになった参加者とともにワークショップやグループワークで、一つ一つ体感できたこと、NGOの人たちと膝突合せ、飲みながら夜を明かす勢いで話せたことも大きかった。現場を重視した活動をされている方の話は、机上の話とは別物だった。これまでと全く違う価値観の話をしつくり聞けたことで、一つずつ私の思い込みや誤解が解けていった。

15期1回目講座「NGOってなに？」で、現在KNC代表理事の三輪敦子さんが話された「今困っている現場と、そういった現場にならないよう政策を変えていく活動。上からと下から、両方からの働きかけが重要」といった話に、なるほど！と思い、受講後すぐに政策提言などを行うAMネットに加わることとなった。3回目の講座は貿易ゲーム。途上国グループになった私は、情報チェックもせず、工夫もせず、和気あいあいと単純労働(笑)に勤しんだ結果、最下位グループになった。その後、就職活動をすることになったが、新卒直後の意欲もなく、「ほどほどがいい」と思いが変わっていた。その時の就活は、まさかのほぼ全敗。誰もが老いる。常時競争状態でいたいわけでもない。置かれた環境も違う。私生活の体験とNGOでの学びを積むごとに、格差は自己責任ではないと実感していった。活動当初とは真逆の考えになっていった。

知識もなく、人前で話した経験もなく、受付ならできるとスタートした私が今、AMネットの事務局長をしている。司会、前座の講座…とやるうちにいつの間にか、あちこちで講演を引き受けるようになった。活動を続けるうちに、学者・議員・記者・行政職員・労働組合・弁護士等々と知り合い、さまざまな分野で活動する多くの先輩や仲間ができた。

N大をきっかけに始まったNGO活動。まさにNGOのおかげで「会社では出会えない人たち」と出会い、「会社ではできない体験」が現在進行形で続いている。

■大切な“Kindred spirits”

今井貴美江(第12期参加、第13、14、16期運営委員)

このたびNGO大学を休止されるとのこと、決断をした現運営委員の皆さん、本当にお疲れさまでした。そして最後までしっかりとこの活動をまとめあげようとする姿勢に、心より感謝申し上げます。そして、最近はずっか

りご無沙汰している私にもお声かけいただいて、ありがとうございました。

ひとつの大きなテーマのもと、参加型・体験型の手法で学びと話し合いを続け、その経験を形にしていく連続講座は、毎回とても充実していて、その後、NGO大学以外に関わった講座企画等でもしばしば参考にさせていただきました。また、毎回、日々の暮らしと社会が抱える課題とのつながりを意識させられていたので、今でも自分の暮らし方や価値観、さまざまな選択軸にはN大で学んだことが影響しています。そんな振り返りとともに、まったく個人的な思い出を書かせていただきます。

まずひとつめは13期でお招きした当時立命館大学国際平和ミュージアム館長の安齋育郎先生から、「平和とはすべての人が自己実現できる状態」だと学んだことです。私はそれまで「反戦・平和」を軸にして、いろんな取り組みに関わってきたのですが、「平和」がもっと包括的なものだと認識をがらりと変えられました。それはその後、NGO大学に関わる基盤にもなりましたし、当時働いていたNGOでの活動や、現在の職場で人権啓発・研修に取り組む基盤にもなっています。



ふたつめは16期、出産後、まだ首の据わらない子どもを連れて参加した時に、参加者の方から「将来、私も出産しても自分のやりたいことを続けたい」といった感想をいただいたことです。出産を肯定的に受け止められたことが嬉しかったことを、そんな時期の私を受け入れてくれた運営委員や参加者の方への感謝とともに思い出します。

そしてきっと多くの人と同様に、なによりの思い出は、良い刺激をくれる人たちとの出会いと、その人たちとともに過ごした時間です。意見を出し合ってプログラムを作った経験や、さまざまなことを語り合う中で育まれた信頼、一緒にイベントに参加して、しんどい時は相談に乗ってもらって、楽しい時には笑いあって…と、N大で出会った人たちはその後の私の人生を格段に面白く、豊かにしてくれました。出会いから20年以上、直接会う機会は減っても、それぞれの場所でそれぞれの人生を生きるみんなの存在自体が、今も私の励ましになっています。

最近、平和教育の集まりで“Kindred spirits(同志、心の友)”という言葉を教えてもらいました。NGO大学に関わった人たちはみんな“Kindred spirits”なんだと思います。そして一人ひとりの考え方、世の中の見方を刺激し、行動を促し、その人たちを30年以上にわたってつなげてきたNGO大学は素晴らしい取り組みだと思います。これからもここで育った“Kindred spirits”として、よろしく願います。

■社会に臨むための作法を学ぶ

佐久間量子(第10期修了、11~30期運営委員)

転職で大阪に引っ越し、英会話教室があった土佐堀YMCAで、偶然N大の飾り気のないパンフレットを見つけた。関心が似た知り合いを増やしたいと思い早速申し込んでみた。全6回参加を希望したところ最初はキャンセル待ち。ボランティア元年と言われた阪神大震災の翌年だったからだろうか、毎回会場は100名近くの人がいっぱい賑やかすぎ、最初は驚いた。以後20年、自分周りの環境変化があってもかかわりを続けた結果、それはかけがえのない経験となった。発題者だけではなく会場にいる誰からも学ぶ。何かに疑問を持ち怒って抵抗する人たちがいる。緩くてもぐらつかない人とのつながりがある。何よりも楽しかったから継続できた。

運営委員としては、講座の中で気づきを促すのと同じかそれ以上に、「場を提供すること」に興味を持った。一緒に食べると安心する。交流会や修了パーティ、朝食の準備に熱中したのはその辺りが理由だ。

ただ、そうやって続けながらもずっと葛藤していた。なぜなら行動すべき自分のテーマ(専門)を見つけられなかったからだ。ひとつの課題について発信し続けている修了生がうらやましかった。

この思い悩みにヒントをくださったのは、「国際協力とは日々の営みの中にある」という壽賀一仁さん(19期発題者、当時(特活)日本国際ボランティアセンター職員)の言葉だった。毎朝、台所でパンをかじりながら、ふたり分の保育園準備をしていたころ。暮らしの中にある課題を、どのように感じ取りどう行動するかを考え続けられる一生活者となることはとても重要なのではないか、という考えにたどり着いた。

N大での経験は、その後の生活に多方面にわたって根を張っている。何かの選択をするときはそこで得た視点を総動員する。例えば、大阪都構想の住民投票の時は湯浅誠さんの著書を改めて読んだ。民主主義や自治などという視点にはN大に来ていなかったら至っていなかった。地域ではPTA役員を担い、抵抗なく活動に関わる仲間を増やすために一緒に食べ十分なおしゃべりをする時間を設けた。子たちの学校生活が良くなるのを願わない親はいない。イベントを催す際は、タイムキープ、参加型運営、保健といったキーワードが参考になった。最近は家庭菜園の野菜を食べている。

次世代と言え、子ども達は小さいころ、ごく普通に会場での時間を過ごしてきた。大きくなっても話ができる、親や親戚以外の知り合いがいてくださるのは幸いである。彼女たちは、自分が属するさまざまな社会で役割を担う意味もわかっているような気がする。エネルギーと安心の源となる食べ物をできるだけたくさん料理しているが、さてその大切さをいつわかってくれるのだろうか。

世の中も地球も更に厳しい状況で、何ができるかわからないが、修了生のみなさんとは、ぜひこれからもつながっていきたい。また、子育て支援にはどうやら区切りがついたようなので、そろそろ自分が必要とされる場所で次に何ができるかを考え始めたい。



■中間領域の言葉の大切さ

小西陽一(第26~28期運営委員/生活協同組合コープこうべ)

○あたりまえを疑う

私は26期から28期に運営委員として参加しましたが、27期のテーマは「あたりまえを疑え!!」でした。先日、国内成人男性の喫煙率について昭和41年当時が83.7%だったのに対し、平成30年では27.8%の約1/3に減少した(注1)とテレビで放送されていました。タバコ1箱の値段が当時と今とは大きな差はありますが、世の中の喫煙に対する「あたりまえ」の認識は52年の間に大きく変化したと言えます。

ところで、ここ数年ツイッターやフェイスブック、インスタグラムなどのソーシャルメディアの普及は目覚ましいですが、そのような場ではタイムリーに多くの人の共感を呼ぶ「あたりまえ」のことが端的にわかりやすく語られ、曖昧でない強い言葉が好まれています。

しかし前述したように時代と共に「あたりまえ」が変化する事例は他にもたくさんあります。私は関西NGO大学の様々な講座を通して、世の中の様々な事象について、生じた背景やそれまでの経緯を踏まえて一旦立ち止まって考え、「あたりまえ」を疑うようになりました。

(注1)2018年日本専売公社、日本たばこ産業株式会社の調査による

○正しさの暴力に加担しない

たった3年間の運営委員参加でしたが、各回の講座内容と参加者への呼びかけ文を検討する運営委員の準備

合宿で思い出深い出来事がありました。当時は「どうすれば持続可能！？～経済成長からの途中下車～」という企画の講座を担当しており、合宿の終盤で参加者に対して講座での学びをどのように普段の行動につなげてもらうかを議論していました。

運営委員の一人から、ワーキングプアやシングルペアレントなど経済的に厳しい状況に置かれている人たちは日々の暮らしを維持していくのに精一杯で、発題者の話には納得できてもそれを踏まえてすぐに普段の行動を変えていくのは難しいと指摘されました。講座を企画する運営委員からは経済的なハンデは確かに重い、そういった人たちを例外として扱っては、大量生産・大量消費の潮流は変えられない。今できることを小さなことからでも始めてもらうことが大事なのではと強い言葉で主張しました。

SDGs に代表される持続可能なライフスタイル以外にもダイバーシティの重要性など、社会の主流になりつつある価値観に対し、それらの価値観と相容れない発言や行動をする個人や団体には社会の各方面から厳しい批判に晒されることが多くなっています。そういった現象に対し、作家の星野智幸さんは東日本大震災後10年の2021年3月に掲載された神戸新聞「災後を語る」といテーマの寄稿で次のように述べています。

『強い表現に、人はアイデンティティを委ねやすい。だから、それを否定されると、存在を否定されたと感じる。自分にとってどれだけ正しい言葉でも、相手を否定すれば分断しか生みません。そこにあるのは「正しさの暴力」です。』

私には今、8歳の息子と5歳の娘がいるのですが、彼らが成長していく過程で、親として関西NGO大学で学んだ社会的弱者の立場の側にたったりべらるな価値観を大切にしてもらいたいと思っています。また同時に「正しさの暴力」に囚われず、問題の背景や経緯に目を向け、出てきた答えが白でも黒でもない曖昧な、中間領域の言葉であっても、自信を持って人に自分の考えや思いを伝えられる大人になって欲しいと思っています。

■ありがとうN大

松田洋子(仲野)(第19期修了、第21、23期運営委員)

N大は私の青春だった。本当に楽しかったし、濃かった。

N大では、老若男女、職種問わず、皆がフラットだった。わからないことは、わからないと質問できる場所だった。夜な夜な語り合い、お風呂に入り、寝て、起きて、また学びあい、繋がりがあ、今じゃ考えられない、贅沢な環境だった。あの小林の広間には、世界があった。知らない国の話を聴くのが好きだった。まっすぐな人生もいいけど、まわり道したり、一休みしたり、いろんな生き方があることを知った。講座で一番印象に残っているのは、グループワークで、一般の講座では聴いて終わりだけど、伝える練習をさせてくれたのも、N大ならではの。19期修了生で、その後数年運営でも関わらせてもらった。運営委員＝その道のプロフェッショナルで、恐れ多いという先入観を見事に打ち砕かれるほどに、皆さんチャームで優しかった。講座前の行き交うメール量、白熱する運営委員会など、運営側の熱い想いが半端なくて、そこに混じらせてもらえたのは本当に光栄だった。

サラワク、沖縄、北海道、水俣など、普通じゃ行かない、行けないところを有志の方々と訪ねた経験は一生の宝物だ。

N大があったからこそ、その後PHD協会の国内研修生になり、研修生や指導者の方との出会いに繋がっていくわけで、その意味でもN大に参加できてよかったと思う。

私は今子供3人を育てる専業主婦で、国際協力の仕事も活動も担えていない状態だ。コロナ禍もあり、すっかりN大関係の方々とは縁遠くなってしまった日常を送っている。ただ、結婚して10年、私が好んで行く場所は、やっぱりN大チックな匂いがする。子供の遊び場だったり、週1で通わせてもらっている農家さんだったり、たまー

に行く料理教室だったり。情報を鵜呑みにせず、足元から社会をより良くしていこうという思いをもった人たちが、一定数いらっちゃって、そこが私は落ち着くのだと思う。

N大に関わっていた頃は、海外最前線、バリバリの国際協力に憧れていたけれど、今は国内の問題にも目を向けるとか、足元から変えていくっていうのに魅力を感じるし、そこが私の居場所なんだろうと納得もできるので、まずは、自治会やPTAの役員に積極的に参加するところから、もう少し落ち着いたら、なにかワクワクすることをやってみたい。いつか荒川さんに「繋がる人から繋げる人に」という言葉をもらったのがずっと心に残っていて、発信するというのは苦手なんだけど、だれかをサポートするのは好きなので、何か身近なところで社会のお役に立てることがしたいと思う。また、学生の頃はできていなかった生活を改める(日々の買い物、食、環境に配慮した生活など)という点では、成長したかなと思う。

N大という稀有な学びの場に参加できて、たくさんの方と時間を共有し、繋がれて、本当に感謝している。今までN大をお支えくださった方々、本当にありがとうございました。

■環境NGOで活動するキホンを学んだ関西NGO大学

石崎雄一郎(第23期修了、第24~30期運営委員/現ウータン森と生活を考える会事務局長)

地球サミットが開催された1992年、世界中で失われゆく熱帯林を救おうというムーブメントが起こり、「1秒間にサッカー場一面の森が失われている」というニュースに危機感を抱いた当時小学生だった僕は、後に大学で環境問題を学ぶ学部に入り、国際協力サークルで活動したものの、就職活動では全く違う分野に進む周りの友人たちについていけずに引きこもりました。その後ニート、フリーターを経てようやく会社で働くようになった20代の後半に差しかかる頃、改めて自分が進みたかった道を思い出して森林関係のNGOの集会に参加した時に、後のライフワークとなる熱帯林保護活動を行っているウータン・森と生活を考える会の西岡良夫さんに出会いました。また、当時設立されたばかりのボルネオ保全トラスト・ジャパンの活動を荒川共生さんに誘ってもらい、その後関西NGO大学の講座をおすすめしていただきました。初めて受講者として参加した全6回の講座の最後に、「今後NGOで働くことを目標とする」ことを抱負に語り、その後実現しました。

関西NGO大学では、初めの講座でソムニード(現・ムラのミライ)代表の中田豊一さんのメタ・ファシリテーションの話しがツンとやられ、ふわふわと考えていた善意の国際協力が現地で求められているものではない可能性があることを知りました。大学のサークルで貧困地域のフィリピンでの家づくり活動をしましたが、貧困(の定義を含め)の背景や問題の構造を



もっと深く学んでおくべきだったと感じました。それ以来、関西NGO大学の「気づき→学び→行動」の理念は自分の活動の原点となり、ウータン・森と生活を考える会のボルネオ島で現地の村人やNGOと共に行っている熱帯林保全活動に取り入れています。市民活動の原点である当事者意識、グローバルな政治・経済・社会構造が抱える問題を問うクリティカルシンキング、当たり前を疑うメディアリテラシーなどの濃い内容の講座に加えて、泊まりならではの手作り料理やお酒を酌み交わす懇親会、朝のヨーガ、子どもたちも安心して滞在できる空間づくり、グループワークのための集まりや研修旅行、運営委員での企画の議論や運営に注ぎ込んだエネルギーは現在活動する上でも大きな糧となっています。

もうひとつ関西NGO大学を語る上で重要なことは、「人とのつながり」ではないでしょうか。生活も仕事もバツ

クグラウンドも違うものの、皆が共通してこの社会に何かモヤモヤしたものを感じていて、何かをしたいという個々がつながり、輪は今でも広がっています。そんな仲間が持っている問題意識は、違う分野で活動する日本の市民、インドネシアで出会ったローカルNGO、海外でグローバルに活躍する活動家も共通して持っているものであり、これまで現場での学びを通して改めてその重要性を再確認することができました。

いま、熱帯林好きの仲間と運営している大阪のコミュニティスペース「ルマ・ボルネオ」で、ドキュメンタリー映画上映会、青年海外協力隊OB/OGやバックパッカーによる旅のトーク、ヴィーガン・クッキングイベントなどを関西NGO大学での学びも取り入れながら開催しています。また、僕自身も昨年からはヴィーガンになり、環境問題をより幅広い外国差別、世代間差別、人種差別の問題でもあると認識し、仲間と共にゆるやかに楽しく、あらゆる生きものにとって持続可能な社会をめざしています。

■Kleine Schritte zu einer besseren Welt!

倉田あかり(第22期修了、第23～24期運営委員)

N大で経験したことや学んだことは数知れず私の中に根付いており、これがあったから人生が変わった！と何か特定のことを列挙するのは難しい。しいて言えば全部である。

印象深かったことは、副校長浜本さんとのなにげない会話の中で「分らないことは調べる」という一言を聞いたこと。知ることから始めようとN大が伝えてきたこと、気づき、学び、行動するということがすべての始まりで、それを繰り返すことによって少しずつ何かが変わっていくということをあらためて考えさせられた。またあるとき、校長の藤野さんから「自分のお尻は自分でふく」といわれたこと。当時二十代前半でやりたいことはたくさんあったが、何を始めたとしても責任をもち、始めたからには終わらせなければならないということを教えてもらったように思う。あとは行動力の塊のような人たちと一緒に過ごせば自分もまたいつのまにかゴム弾のようにあっちへこっちへ好奇心とともに飛び出してしまえるようになるという、コミュニティのおもしろさを体験したのも素晴らしい経験の一つである。

私は社会を具体的にどのように平和にしていくのか、戦争がないだけではなく構造的暴力のない社会を作るためにはどうしたらいいのかということに興味がある。N大とかかわる前は、その問いに向き合うためには国連で働くかNGOで働くという選択肢しか思いつかなかったが、企業で働きながら社会に貢献したり、市民団体に属したりと、実際に現場で働く人や多様な取り組みをしている人たちとのN大を通じた出会いにより、選択についてより広く考えることができるようになった。



N大内の議論や発題者の話はいつも私が知らなかった発見があり、知ることや学ぶことが心の底から楽しかった。それと同時に、自分にはもっと体系的な学びが必要だと実感した。そのため運営委員をした後は再び社会人入学で大学へ入学し、東欧へ一年留学して戦争学や政治学などを学んだ。

N大の運営委員を離れて約十年、現在はドイツで働いており、最もN大と同じような空気のある場所で日常を過ごしていると感じている。友人もドイツ人のパートナーやその家族も社会や政治について議論するのが好きなうえに、息をするように環境のことについて考えている。その環境こそ私がN大にいたときに望んでいたものだった。N大で好きなことをしつつ、様々な人と出会えたからこそ、これからどのように生きたいのか、どうやって食べていきたいのかということを実感にイメージできたのだと思う。とはいえここにも何も問題がないわけではなく、

むしろ難民や移民との衝突など、戦争と平和というテーマは日本にいた時よりも物理的に近くなったと感じている。

N大で活動した期間は短いですが、人との関係やコミュニティ、自分の知的好奇心は自分で行動し、育てるものだと教えてもらった。完璧じゃなくても少しいい場所を社会に作っていけるようにこれからも勉強し、活動していきたい。

■関西NGO大学とわたしとこれから

貞富信裕(第8～14期参加、第10～12期運営委員)

○NGO大学の参加と運営委員ときっかけ

社会人となった年(1994年?)のアースディで手にした1枚のパンフレットがきっかけ。大学という名称ながらさまざまな社会人の参加があり、参加型のセミナーで朝までいろんな方々と議論ができました。

国際協力NGOの多くは途上国の貧しい人々に援助しようという団体が多い中、NGO大学では私たちの生活や社会の在り方が大切であることを考えさせられました。今でも前者の考え方で活動をしている団体は存在しているようであるが、自分の考え方の基本として、N大で享受してきたことが軸となっています。

○印象に残ったこと

第10期では著書「ほんとうの豊かさとは」に感銘して講演いただいた暉峻淑子さん、多文化の回で歌手のもんたよしのりさんが来られてLiveとトークを聴けたのは感銘を受けました。第11期では貿易ゲームだけでなく、「富と貧困ゲーム」と証して朝食に貧富差のある状況の食事を提供した際は、参加者からのクレームもあり、暴動寸前であったのが衝撃でした(富の偏重はゲームよりも現実には顕著で、今はより拡大している気もいたします)。また、NGO大学10周年記念イベントやアドバンスコースと称して街を訪問したり食を作ったりする企画もいろんな発見がありました。

○NGO大学とその後

NGO大学の運営委員であったWさんを訪ねて1999年に初めて一人で南米のウルグアイに訪問。また2001年にSさんを訪ねてドミニカ共和国を訪問。これらがきっかけで、中南米のラテン文化にも興味が出て、ラテンダンスなども習ったりもしました。

2007年以降は転勤で東京本社勤務。仕事で海外工場へ出張(アメリカ、東南アジア、中国、韓国など)したりしましたが、援助や貧富の差などにかかわることは直接ありませんでした。2011年の3.11東日本大震災も(東京本社で)経験しましたが、関東ではPrivateでは直接何かのNGO/NPO団体に参画するといったことは特にありませんでした。

○現在の仕事ややくらしとのかかわり

現在、素材メーカーで環境の仕事をしております。特に今の業務での重要なテーマは「カーボンニュートラルへの対応」です。鉄や銅などの金属を溶かして加工するのに多くのエネルギーを使い、CO2を発生しますが、それを如何にゼロにしていくのが大きな課題です。正直、今のモノづくりや生活を享受するなら到底不可能な目標ですが、排出権などを巡って世界が利権の中で動いていくことが気がかりです。

環境の関連でSDGsなどにも多少関わっております。17の目標達成にも相当のハードルがあると思われませんが、企業やマスコミなどはそれを宣伝文句にSDGsのマークを使っているのを見かけます。どこまで本気で取り

組んでいるのかは疑問が残るところですが、そんなことを言われていられる状況ではありません。せっかく社会がそのような方向に向かっていっているのだから、できることから協力していきたいと考えています。

一方で、コロナ禍による医療格差や経済格差、香港やウイグル地区の人権侵害、地球温暖化による環境破壊など問題は山積しており、常に関心は持っております。私自身もN大で得た知識と経験からより良い社会とするために、会社で、また個人で自分のできることを一つ一つ行っていこうと感じるところです。

■N大というオルタナティブ

片岡法子(第12期修了、第14～30期運営委員)

“No Ndai, No Life”とでも言えようか。もしN大と出会っていなかったら、今ごろ私の人生はどうなっていただろう。きっと大きく変わっていたと思う。改めて振り返ってみると、それほどまでに私の中で大きな存在になっていたことに驚かされている。

○N大との出会い

1998年夏のこと。某会場でN大12期リーフレットを手にとった。特に国際協力に興味があった訳ではない。当時、仕事の関係で参加型学習の手法を学びたいと思い、色んなセミナーに参加していた。N大はそのひとつに過ぎなかった。1990年代後半のN大は参加者も多く、12期も毎回70～80人が集っていた。大半が20代の女性で社会への問題意識も高いが、「きらきら系国際協力」を求めていると感じられる人も少なくなく、地域にべったりしがみついて仕事をしている私にとっては、とても違和感のある集団だった。それでも一旦申し込んだからには最後まで参加しようと、何とか修了証をもらうだけの出席をして、その年は終わった。

通常ならば、それで終わっているはずだった。しかし、1年を経て、14期の運営委員会が立ち上がるときに、当時事務局を担当されていた竹安裕美さんから運営委員をやってみないかとの連絡をもらった。半信半疑ではあったが、まずは第1回の運営委員会に参加。その後、運営委員のメンバーと食事について、あれこれ好き勝手なことを言ったような気がする。その後も、副校長の浜本裕子さんや竹安さんと何度となく議論を繰り返した。特に浜本さんとは、長文のメールのやりとりを数日にわたって行った記憶がある。何を話題していたのか、今となっては定かではないが、私の問題関心のひとつひとつを真剣に受け止めてくださった。また、お二人をはじめ、関係者の皆さんが、色々な形であたたかく受け入れてくださった。そのことが運営委員をやってみようと思ったきっかけだったような気がする。

結局のところ、その後20年以上のおつき合いになっている。

○オルタナティブな世界

N大で得たこと、学んだことはきりが無いが、ひとつ挙げるとすれば、色んな“オルタナティブ”と出会えたことと言えるような気がする。まず、人との出会い。学校時代の友だちや、仕事関係の知人とも違う、オルタナティブな人間関係。これまでに色々な講座に参加したが、N大ほど参加者同士のおつき合いがつづくものは類をみない。私はN大で出会った皆さんを“同志”と呼んでいる。

次に、その同志たちと過ごす、日常生活とは違うオルタナティブな時間。時に学び、時に楽しみ、時に議論する。夜を徹して納得いくまで話し合ったり、時間を気にせず、自由きままに語り合ったり…。いまから考えると、実に贅沢な時の流れだった。

さらに、そこで繰り返されるのは、オルタナティブな価値観。日ごろ接している情報や判断の軸とは違った角



度から問いが投げかけられ、私自身もそのあり方を問う。「多様性」や「多文化」の「多」の視点とは何なのか、ひとつひとつを自分の足元から見直す作業は、その後の私の人生において大いなる影響を受けたとって過言でない。

これまでN大を色んな形で支えてくださった関係者の皆さまには、心から感謝している。また、N大を経て、各方面で活躍されている皆さまの今後の活躍にも注目していきたい。今後も色々な形で互いにつながっていければ幸いである。N大はいったん終了することになるが、ノスタルジックに語りたくはない。その時々求められる“オルタナティブ”を、模索しつづけたい。

■前に進む力を与えてくれたN大

芳島昭一(第10期修了/現国連 UNHCR 協会)

わたしが関西NGO大学に参加させていただいたのは、1996年秋からスタートした第10期だったと記憶しています。振り返ってみますと、その間にご経験豊富な各回の講師やスタッフの方々、参加者の皆さんからはもちろんのこと、活動のために訪問させていただいた各施設等の方々から学び、感じさせていただいたことは自分の中のとても大きな財産になっていると感じます。

六甲山中にある研修会場で、朝まで講師や参加者の皆さんと開発問題等についてあれこれと熱い議論を交わし、その熱い気持ちを持ったまま、研修会場から青年海外協力隊の選考試験を受けに行ったことも良い思い出です。答案用紙に朝まで議論した内容がそのまま活かせるような筆記問題があったため、N大で学んだことや、議論で感じたことなどを書きなぐった結果、当時は40倍以上の高倍率だった職種の選考試験に合格することができました。N大に参加していなければ、青年海外協力隊という、自分の人生にとってとても貴重な経験を得ることは出来なかったかもしれません。

N大修了後、青年海外協力隊員としてインドネシアの農村で2年間活動させていただいた際には、なかなか上手く前に進めない状態になった時、感銘を受けたN大講師の某氏であれば、この課題をどう乗り越えただろう？と考えながら活動して前に進めることがあったり、またその後携わったJICAの複数のプロジェクトや外務省国際協力局での業務、さらに国際NGOのプロジェクトマネージャーとしてザンビアに駐在させていただいた際にも、N大で学び、感じたことが業務に活かしたり、前に進むパワーとなったことがたびたびありました。

しかし、N大に参加させていただいて一番良かったのは、この社会を少しでも良いものにしたいという熱い想いを持った講師やスタッフ、参加者の皆さんと知り合い、その後も交流を持たせていただいている方々から、二十数年経った今でも良い刺激をいただき続けていることかもしれません。JICAで働いていた際には、「新人職員でとても優秀な人材がいる」と、複数の職員から聞いていたその人材がN大の同期であり、当時は大学2年生だった女性だと知って驚いたり、インドネシアの地方のJICAフィールド事務所で勤務させていただいた際には、とても大きなプロジェクトの調査団員として派遣されてきたのが、N大で講師を務められ、正に協力隊の試験を受ける当日の朝まで議論を交わさせていただいた某氏でまたまた驚いたり、更には、同じ協力隊仲間、自分でNGOを立ち上げ、今も元任国の方々のために献身的な努力を続けている以前から尊敬していた人物が、後になってN大出身者だと知って驚き、またそれをきっかけに話が弾み、更なる刺激をいただいた事など、他にもN大に参加したことで知り合うことが出来た多くの方々のご活躍を目にして、今でも自分が前に進んでいくためのとても大きな力になっています。

そんな貴重な機会を与えてくれたN大が30年の歴史に幕を閉じると聞きとても残念に思いますが、社会に変革を起こす人財を今後も輩出し続けるためにも、また新たな形で復活されることを望みます。

最後になりましたが、これまでN大の運営にご尽力されてきた方々に改めまして心より感謝申し上げます。大変貴重な機会を与えてくださり、誠にありがとうございました。

■N大のつながりに感謝を込めて

田中綾(第17期修了、第18～30期運営委員)

もともと社会問題や政治にも経済にも疎く、文化的なことにしか興味のなかった私が、学生時代に身体を壊して「食」に関心をもったことがきっかけで、N大に出会えたのだから、人生なにが幸いするかわからない。「食」への関心から学生時代の終わりに京都のNPO「環境市民」でのボランティア活動を初めたことをきっかけに、さまざまな人とのつながりから、第17期のカマル・フィヤルさん(“村落開発”ファシリテーター)の講座を目的に全6回講座に参加を申し込んだ。まさかその後、これほど長くN大に関わり続けることになるとはまったく予想もしていなかった。継続の理由は、しんどさ以上にやりがいと、何より楽しいということだ。当初は環境問題と国際協力には興味はあったものの、N大に関わることで、興味・関心はさらに様々な社会問題・課題へと広がり、自分たちの足元を見つめ直すことなど、本当に多くのことを学ばせてもらった。もちろん講座自体からの学びも多いが、やはり人とのつながりが何よりの財産だ。世代や仕事などバックグラウンドも多様、個性的、魅力的な運営委員の仲間やグループワーク仲間とのつながりは他では得難い。みな、各々仕事をもち、平日の夜、アフター5(実際は7～8時?)に各所から梅田でのミーティングに集まって延々と講座の企画について議論し、帰宅は午前様というようなことも多々あったが、皆ボランティアでよく続いたものだ。当時は若かったと言えばそれまでだが、諸先輩方のことも思うと、あらためて仲間の皆さんには本当に尊敬と感謝しかない。N大では講座内容以外に、組織運営という面についても学ばせてもらった。N大運営にはよい意味での「いいかげん(良い加減)」「ゆるさ」があったのが良かった。もちろん大変なことも多いが、寛大でアットホームな雰囲気があり、各々ができる範囲で運営に関わり役割を分担して講座を支えていた。



講座外でも、N大をきっかけに知り合った仲間とは、ボルネオのサラワク(マレーシア)の森の奥地のロングハウスでのホームステイやアブラヤシ・プランテーションの現場を訪ねたり、「アイヌ・沖縄を学ぶ会」や講座企画担当メンバーとの沖縄スタディツアー(4～5回訪問)や、北海道(アイヌ)スタディツアー、水俣スタディツアーなど、なかなかできない貴重な経験や、必ず現地の方々と一緒に食事をしたり交流を心がけて直接お話を伺うことで本当に多くを学ばせてもらった。私がとくに無関心だった政治や経済にむしろ関心を持つようになったのもこうした学びのおかげだ。そして、一番苦手だったはずの政治・経済の回の講座企画を、毎年積極的に引き受け担当するようにもなった。「自治」の重要性について学んだことも大きい。一言でいえば、N大で、「市民」になる、ということを知った。今となっては、N大に参加しなかった自分を想像すると(想像できないが)世間知らずで恐ろしい気がする。もともと気が多くて絞れない性質の私がN大に関わったことで、興味・関心の対象はさらに広がったまま、特定のテーマに絞ることはできていない。N大としての活動はここで一旦幕引きとなったけれども、N大で得た仲間のネットワークにはこれからもつながっていきたいし、N大での学びは、これからも日々の生活実践の中でアウトプットに努めつつ、常にやりがいを感じワクワクできることを模索していきたい。

【N大コラム】 向井一朗さん追想

向井一朗さんは第17、21～23 期の運営委員で、共にN大の運営を担った大切な仲間です。2017年10月10日に55歳の若さで天に召されました。国際協力を司る政府機関の職員である一方、NPO/NGOでも理事や委員を多数担っておられました。N大でもワークショップでファシリテーターをつとめ、積極的に運営委員会に出席して下さるなど、その豊富な知識と経験を共有してくださいました。



カブに乗るトトロ

中身でパンパンのコンビニの袋

コーラのペットボトル(大)

ハムカツとコロケの匂い

「あっ、もう来てはるな」

姿は見えなくても、彼の存在を表すモノたち

ボーダーのラガーシャツに身を包んだ大きなトトロは

宝塚・小林聖心口ザリオヒル

京都・関西セミナーハウス…

あらゆるところに小さなカブに乗って現れた

「ともまえさ〜ん……」

風貌からの印象とは少し違う

ゆっさゆっさと体を揺らしながらの

やわらかいテナーな声をかけられると

大きなお腹に吸い込まれそうになる

そのやわらかさは

世界のさまざまな課題に対しての

政府や某国際協力機関の取組の甘さや理不尽さに触れた時には一変し

発せられる言葉は誰よりも鋭く本質を突くものだ

穏やかな語り口ながら

「これだけは絶対に許せない」ということを

巨大で強大な組織の中で

彼はきっと彼なりの方法で許さず

自分の信念を貫いてきたのだろう

今はどの辺りでカブを走らせているのか…?

フィリピン? 釜ヶ崎? バングラデシュ? 桜美林? ウガンダ? ミャンマー? ………?

ミツバチを追いかけて

向井一朗さんへ捧ぐ 友前尚子

資料編・並列年表・参考文献

関西NGO大学の活動は、新聞や雑誌などのメディアで取り上げられた。ここではその一部と、歴代のパンフレットをあわせて掲載する。

ソトコト 「特集“ソーシャル系大学案内”」（2013年10月号）





大阪府



上／講座の参加者と発題者、運営者がともに作りあげる参加型の講座が特徴。下／ときには芝生に座りながらのディスカッションも。

\ 副校長に聞きました /

浜本裕子さん 

Q.あなたにとっての学びとは？

行動への種。世界を読み取り、書き換える視点と力です。一般的な情報に流されず、自分の頭と眼で考えていきましょう。

DATA

住所 大阪府大阪市北区茶屋町2-30
 開校 月1回（次回は9月28日）
 料金 各回6000円（宿泊・食事代などは別途5500円）
 tel.06-6377-5144（関西NGO協議会）
 www.ndai.net

関西NGO大学

合宿講座で考える力を身につける。

NGOや国際機関、政府機関、大学の研究者などに多くの修了生を輩出しているソーシャル系大学の老舗。国際協力、NGO活動に関わる担い手を育てる講座を開催し続けて今年で27年目を迎える。

講座は1泊2日で開催され、参加者は共同生活をしながらメディアや環境、ソーシャルビジネス、民主主義など、世の中のホットな話題に取り組む。発題者と受講生が活発に意見を交わす講義中はもちろん、交流会などのリラックスした雰囲気の中かで自由に語り合えるのも泊まりがけの講座ならではの。年齢もバックグラウンドも異なる人々と一緒に学ぼううちに、「あたりまえを疑う視点ができた」と、参加者一人ひとりの世界は確実に広がっているようだ。

講座は月1回開催で全6回コース。単回参加も可能だ。

【歴代パンフレットの表紙】※第20～24, 26期は三浦弘志氏のデザイン。写真は運営委員や加盟団体からの提供。

1987年度
関西NGO大学
民間国際協力団体スタッフ養成講座



主催
関西国際協力協議会

1988年度
第2回 関西NGO大学
民間国際協力団体スタッフ養成講座



主催
関西国際協力協議会

1989年度
第3回 関西NGO大学
民間国際協力団体スタッフ養成講座



主催
関西国際協力協議会

1990年度
第4期 関西NGO大学
第三世界理解講座



主催
関西国際協力協議会

1991年度
第5期 関西NGO大学
第三世界理解講座



主催 関西国際協力協議会
後援 外務省

1992年度
第6期 関西NGO大学
第三世界理解講座



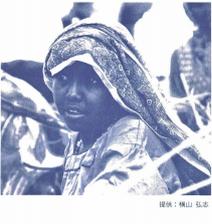
主催 関西国際協力協議会
後援 外務省(予定)

1993年度
第7期 関西NGO大学
第三世界理解講座



主催 関西国際協力協議会
大阪 YMCA

1994年度
第8期 関西NGO大学
第三世界理解講座



主催 関西国際協力協議会
大阪 YMCA

1995年度
第9期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



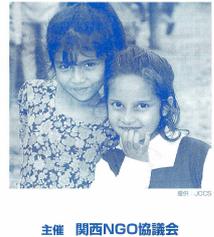
主催 関西NGO協議会
大阪 YMCA

1996年度
第10期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会
大阪 YMCA
外務省国際関係協力関係
民間公益団体補助金(NGO事業補助金)事業
(1994～1995年度交付, 1996年度申請中)

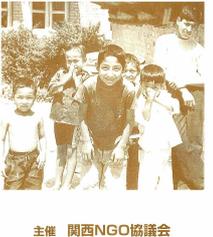
1997年度
第11期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会

外務省国際関係協力関係
民間公益団体補助金(NGO事業補助金)事業
(1994～96年度交付, 1997年度申請中)

1998年度
第12期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会

外務省国際関係協力関係
民間公益団体補助金(NGO事業補助金)事業
(1994～97年度交付, 1998年度申請中)

1999年度
第13期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会

外務省国際関係協力関係
民間公益団体補助金(NGO事業補助金)事業
(1994～98年度交付, 1999年度申請中)

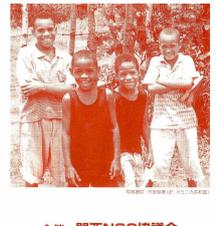
2000年度
第14期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会

外務省国際関係協力関係
民間公益団体補助金(NGO事業補助金)事業
(1994～99年度交付, 2000年度申請中)

2001年度
第15期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会

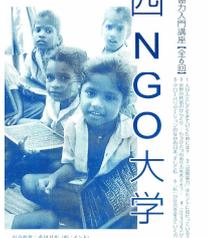
外務省国際関係協力関係
民間公益団体補助金(NGO事業補助金)事業
(1994～2000年度交付, 2001年度申請中)

2002年度
第16期 関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 関西NGO協議会

2003年度
第17期
関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



◎私が社会をよくする一人

主催 特定非営利活動法人 関西NGO協議会

2004年度
第18期
関西NGO大学
国際理解・国際協力入門講座



主催 特定非営利活動法人 関西NGO協議会

世界の今を知り、これからを考える講座

NGO
だいがく

【第17期パンフレット】

私たちもおすすめます

中田豊一さん (参加型開発研究所、関西NGO大学10期・12期受講者)
 15年前、バングラデシの農村でのごこと。国際協力NGOのスタッフをしていた私は、農機から奪われました。「なぜあなた達は、遠いところから来て、緑もゆかりもない私達を助けてくれるのか。そんなことをして、どんな利益があるのか」と。
 私は、答えに窮しました。何の利益があるのか、わからなかったからです。あなたなら、これにどう答えますか？利益がなくても援助すべきだから、と答えますか？あるいは、そもそも援助は要らない、という考え方もあるかもしれません。
 止解がひとつでない「問い」、でも何かをする際には、避けて通れない「問い」。あなたも、NGO大学で、自分なりの答えを、仲間といっしょに楽しみながら追い求めてみませんか。

※中田さんは「シャフラン」川=市民による海外協力の会/Jアジアドラデュ駐在員、「社」セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 事務局長などを歴任。

福井美果さん (関西NGO大学11期修了、16期運営委員)
 合計6回の空間で、不思議と自分の思いの伝わる人に出会える。それがNGO大学の印象だ。振り返ると世界に対し、社会に対しそして自分に対してもう一度考える「出会い直し」のヒントがあった。平和・環境・人権・難民・開発・グローバル化・多文化・・・気になる事多くはすらすら言葉として出てきてくる。まず、ここでもう一度あらためてそれらと出会い直しをする。そして、今の生き方について「我を怪しむ」作業してみるのもいいかもしれない。さらに、周りの仲間がモラモラと変化してゆくのを感ずるのを察し、そんな空間があることをお知らせしたい。

※福井さんは小学校教員。2001年度に1年間インドネシアに滞在し、その体験を「あかん先生のインドネシアレポート」明石南社刊として出版。

和田みのりさん (関西NGO大学3期修了、4期～11期運営委員)
 夜中でも煌々と明るくコンピニ、数時間過ぎたら寝る事が完りのメニュー。異味異臭が切れたら捨てられる調味料、良冬でも売ってるかぼちゃ、突くらしいにきいた冷房・・・なんだか変だな？と思ったときに会った関西NGO大学。いま当たり前と想っていることが、実は当たり前ではないことを知る。よくよまさないで聞かさないで耳をすくく耳をすく。見聞かないと見えないものを見る目を育てる。そして、一人ひとりがいざなな声でも出してあげれば、いつか地球はもっと住みやすくしていくのでは。よい目・目、を育てる場がNGO大学です。

※和田さんは、97年～02年、JICAアジアボランティアとして、ウラグアイで手工芸指導。
 関西NGO大学講義風景から▶

関西NGO大学とは

市民の国際理解をすすめる、国際社会がかかえる課題に取り組みむNGO (非政府組織) の活動に関わる人材を育てることを願って、関西NGO協議会の主催により1987年以降毎年実施している、参加者主体の講座です。

第17期テーマ「私が社会をよくする一人」

世の中おかしい。
 日本の内も外も、その関係も。
 貧しさ、飢え、争い、差別・・・
 一部のみにだけ都合がよく
 多くの人には不公正な社会。
 このままだけいはいない。
 では、どうすればいい？
 世の中を知って、考えて、行動しよう。
 一人で難しいなら、仲間と一緒に。
 そこにNGOがある。

関西NGO協議会 代表理事 平田 哲 (特活) アジアボランティアセンター(AVC)
 事務局長 橋本 恵子
 関西NGO大学 校長 藤野 達也 (財) PHD協会
 副校長 浜本 裕子 (財) 大阪YMCA

第17期関西NGO大学運営委員

荒川 共生 (特活) アジアボランティアセンター(AVC)
 福垣 文拓 関西NGO大学修了生、会社員
 栗本 知子 大阪自由学校「ほろほろ」
 坂西 卓郎 関西NGO大学修了生、フェアトレード団体職員
 佐久間 暁子 関西NGO大学修了生、団休職員
 友前 尚子 関西NGO大学修了生、小学校教員
 難波 緑 関西NGO大学修了生、団休職員
 藤井 久美子 関西NGO大学修了生、中学校教員
 向井 一朗 関西NGO大学修了生、政府機関職員
 幸長 由子 関西NGO大学修了生、大学院生
 横山 昌三 関西日本クリスチャンファミリー関西セミナーハウス
 芳田 弓生希 (財) PHD協会
 宮下 和佳 (特活) 関西NGO協議会事務局

募集要項

募集期間 2003年7月～
 対象 国際理解・国際協力に関心のある方。全6回、一泊二日の全日程に参加できる方を優先します。年齢制限はありません。
 定員 50名(定員になり次第締め切り)
 ※定員に余裕のある場合のみ、部分参加(各回ごとの参加)を受け付けます。

関西NGO協議会

関西NGO協議会は1987年6月、日本で最初のNGO協議会として発足しました。
 本会は主として関西に活動拠点を置く国際協力、援助団体が相互に協議を深め、第三世界における貧困からの解放、社会正義実現、人権の基本的ニーズを充足するための運動を発展させることを目的としています。
 この目的を実現するために、関西NGO大学の開催のほか、NGO相互の情報交換、人材の育成、絆結、財政の確立のための研究実践、協力活動の専門化のための調査・研究、外務省等への政策提言活動を進めています。
 2003年4月、特定非営利活動法人を取得しました。

関西NGO協議会加盟団体一覧 (2003年6月現在 50団体)

- アイユーゴー 逢上団の人と共に (特活) 国際エンゼル協会
- (特活) アジア眼科医療協会
- (社) アジア協会アジア友の会
- (特活) アジアボランティアセンター(AVC)
- (社) アムネスティ・インターナショナル日本
- アース関西=仏教国際協力ネットワーク
- AMネットワーク
- ウータン 森と生活を考える会
- 大阪自由学校「ほろほろ」
- (財) 大阪YMCA
- (財) 大阪YWCA
- 海外災害援助市民センター (CODE)
- (財) 京都YMCA
- (財) 神戸学生・青年センター
- (財) 神戸YMCA
- (特活) 国際エンゼル協会
- シナピス海外プロジェクト委員会
- (社) セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
- 地球市民教育センター
- チベタンフレンドシップ渡辺流
- (財) 余銀YMCA
- 日経国際交流センター
- (社) 日本キリスト教団関西協議会(JKCS)
- (財) 日本クリスチャンファミリー関西セミナーハウス
- 日本国際貢献対策機構
- (社) 日本国際民間協力会 (NICCO)
- ネパールの子供を育てる会
- 坂方交際国際奉仕活動協議会(HIKIVA)
- (財) PHD協会
- (特活) 緑の地球ネットワ

お申し込み・お問い合わせ

(特活) 関西NGO協議会
 関西NGO大学事務局
 〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30
TEL: 06-6377-5144 FAX: 06-6377-5148
 受付時間: 月～金および2 第4土曜13:00～18:00
 E-mail: knc@ak.wakwak.com
 URL: http://www.ak.wakwak.com/knc/
 昨年の関西NGO大学の内容につきましてはHPをご覧下さい。
 HPからもお申し込みいただけます。

事前説明会のお知らせ◆講座内容の説明会です

日時: 8月30日(土) 14:00～15:00
 場所: 関西NGO大学事務局

2003年度
第17期

関西NGO大学

国際理解 国際協力入門講座(全6回)

「私が社会をよくする一人」

写真提供: 荒川共生 (左: インド)

主催 特定非営利活動法人 関西NGO協議会

Program

気づき ▶ 学び ▶ 行動

3つのプロセスを踏まえてプログラムを構成しています

<p>1 2003年 9/20(土) ～21(日)</p>	<p>人が人として生きていくためには? [受講者] 武者小路公秀 (中部大学教授、反差別国際運動日本委員会[imadr-jc]理事長)</p>	<p>人が人として生きるためには、なにが必要なのでしょう? 人権がおよびやられる状況と自分とは無関係なのでしょうか? 長年、世界の研究者や民衆と共に行動してこれた元国連大学副学長の武者小路さんをお招きし、国内外の課題についてまず大きく捉え、その解決に取り組む人々の動きを学びます。</p>	<p>会場 小林聖心女子学院 ロザリオ・ヒル (宝塚市)</p>
<p>2 10/18(土) ～19(日)</p>	<p>「国際協力」はホントに役に立っている? [受講者] カマル・フィヤル (地域開発ファシリテーター: ネパール)</p>	<p>いま地球上にある様々な課題。その解決方法はいろいろです。そのなかで「国際協力」は役に立っているのでしょうか? 問題解決には、当事者自身の取り組みが大きな力になることを、ネパールおよび日本で、地域に働きかけているカマルさんの知識・経験から学び、考えます。</p>	<p>会場 小林聖心女子学院 ロザリオ・ヒル (宝塚市)</p>
<p>3 11/15(土) ～16(日)</p>	<p>世界の貧富のからくり 一もひとつのあり方を考えよう [受講者] 田中 優 (未来バンク事業組合理事長、日本国際ボランティアセンター理事)</p>	<p>世界の貧富の格差はますます広がっています。貧しいのはなまけているからでしょうか? いまの世の中を支配する仕組みを知り、それへの対抗策を探ります。もうひとつの経済のあり方は可能か。身近な足元から変えていく方策を考えます。オプションで、神戸・長田へのフィールドワークを予定</p>	<p>会場 JICA兵庫国際センター (神戸市)</p>
<p>4 12/13(土) ～14(日)</p>	<p>I commitment からはじまる 私自身の問題として動くために [受講者] 平山 恵 (結婚研究所研究フェロー)</p>	<p>国際協力の専門家は増えているのに、問題解決に至らない現実。ほんとうの解決には、「私自身の問題」として捉えようか? が問われるのでは? 「私」からはじめ「私たち」へつなげるプロセスを、多くの現場・NGOを渡り歩き、現在も国内外を問わず取り組む平山さんとともに考え、行動への一歩を踏み出しましょう。</p>	<p>会場 長屋ユースホステル (大阪市)</p>
<p>5 2004年 1/17(土) ～18(日)</p>	<p>グローバル化のなかの日本、そして私 [受講者] 交渉中</p>	<p>経済だけでなく安全保障でもグローバル化の波にのまれつつある日本。そこで暮らす私。この流れは誰が舵と舵を走っているのでしょうか。グローバル化の元と行き先を見据え、昨今のナショナリズムの動きを含めて、いま私たちの立っている場所を考えます。</p>	<p>会場 長屋ユースホステル (大阪市)</p>
<p>6 2/14(土) ～15(日)</p>	<p>「私」が社会を変えていく力 [受講者] 各グループ発表、関西NGO協議会加盟団体スタッフ</p>	<p>これまで仲間と出会い語り合うなかで気づき学んだこと。それらをもとに、あなたはもう動いていきますか? 社会は「私」の集合体。「私」が目覚めて仲間とともに取り組めば、きっとまた間に合うはずです。未来を選択するのは「私」です。</p>	<p>会場 関西セミナーハウス (京都市)</p>

*各回に「NGO概論」の小講義を行います。*4回目以降参加者同士でグループを作り、課題への取り組みを考え、6日目に発表します。
 *各回のプログラムは講義だけでなく、ワークショップ形式の参加型プログラムを取り入れて進めます。

<p>費用 受講料と宿泊料が必要です。 ①受講料 一居前納金: 25,000円 (全6回分) 各自: 5,000円 ②宿泊料 (1泊: 昼食つき) 5,500円～7,000円 (会場により異なります)</p>	<p>◆基本タイムテーブル ①1日目 18:30～19:00 夕食を済ませて集合 19:00～21:00 セッションⅠ 21:30～22:30 交流会 ②2日目 8:00～9:00 朝食 9:00～12:00 セッションⅡ 12:00～13:00 昼食 13:00～16:00 セッションⅢ まとめ</p>
<p>申込み方法 折り返しの申込みハガキを事務局宛てに郵送してください。 関西NGO協議会ホームページからの申込みも可能です。</p>	<p>◆託児および介助が必要な方は事務局までご相談ください。</p>
<p>納入方法 申込み受付の通知とともにお知らせいたします。</p>	

【第24期パンフレット】

◎募集要項

- 対象 国際理解、国際協力、開発教育、ボランティアなどに関心のある方ならどなたでも。年齢制限はありません。
 - 定員 50名
 - 会費 全日・二日目の全日参加にできる方を優先します。(受講料の全6回一括前納制がゆりま)
 - 会場 小林聖心女子学院口サロニール (阪急今津線小林(おはやし)駅下車 徒歩約7分)
 - 参加費 以下の全てが必要となります。
 - ① 受講料 各回6,000円/一括前納制:30,000円(全6回分)
 - ② 施設利用・雑費料 各回5,500円(1泊、朝・昼・食費)
 - ③ 納入方法は、申込み受付の通知書に詳しくお知らせいたします。
 - ④ 紙幣および介助が必要な方は、事務局までご相談ください。
 - 基本タイムテーブル
 - [1日目] 18:30~19:00 夕食を済ませて集合
 - 19:00~21:30 セッションⅠ
 - 21:30~ 交流会(自由参加)、入浴、就寝
 - [2日目] 8:00~9:00 朝食
 - 9:00~11:30 セッションⅡ
 - 11:30~12:30 昼食
 - 12:30~15:00 セッションⅢ・まとめ
- ※プログラムによっては、終了時間が変更になる場合があります。

◎参加申込書

必要事項をご記入の上、郵送かFAXでお申し込みください。ホームページ (<http://Ndai.net>) からお申し込みいただけます。

第24期関西NGO大学 参加申込書

(フリガナ) _____

(お名前) _____ (性別) 女/男 (年齢) _____ 歳代 _____

〒 _____

(住所) _____

(電話) _____ (FAX) _____ (Eメール) _____

(職業または学校名・学年) _____ (もしあれば所属団体・NGOなど) _____

●参加方法(該当項目に○印)：全6回参加/各回ごとの参加

① 第1回(9月) ② 第2回(10月) ③ 第3回(11月) ④ 第4回(12月) ⑤ 第5回(1月) ⑥ 第6回(2月)

●関西NGO大学を
今回が初めて/第 期参加(回数が増える場合をご記入ください)

●関西NGO大学を知り得たになりましたか？(複数回答可)

・関西NGO大学のホームページ ()
 ・ポスターカード ()
 ・新聞・雑誌 ()
 ・知人/友人の紹介 ()

※記入していない情報は、本募集要項の記載以外の目的には使用しません。また、性別は、電話番号の隠蔽上おぼろげです。

◎お申し込み・お問い合わせ

URL : <http://Ndai.net> (ホームページからお申し込みいただけます)

E-mail : info@Ndai.net (お問い合わせはEメールでお願いたします)

特定非営利活動法人 関西NGO協議会 関西NGO大学事務局

〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30 大阪聖パウロ教会4階 TEL:06-6377-5144 FAX:06-6377-5148

関西NGO協議会とは

関西NGO協議会は、本として関西に活動するNGOの間の連携を促進し、連携を推進することにより、各地の活動をより実質・効果的に実施し、社会に貢献することを目的として設立された団体です。関西NGO協議会事務局は、大阪府大阪市北区茶屋町2-30 大阪聖パウロ教会4階に設置されています。

本事務局：丸川共生、藤野達也 デザイナー：アートメッセイジャー(関西NGO大学学生グループ)

このパンフレットは、開発教育による自然エネルギーを使用し、再生紙に大豆インキで印刷しています。(印刷：丸川共生)

関西 NGO 大学

2010年度 第24期

<http://Ndai.net>




第24期テーマ
これでいいの？

自分のまわり、地域、日本、世界のこと、少しふみこんでみましょ。いろいろな課題が見えてきます。そのなかに、私たちは暮らしています。私と世の中の関係を知り、考え、行動する。その力となる学びと出会いの場です。

主催：特定非営利活動法人 関西NGO協議会
後援：特定非営利活動法人 開発教育協会

◎関西NGO大学とは 9月から翌年2月までの半年間、1月に1回、土日に開講している市民向け連続講座です。

●NGOの担い手を育てます

国際社会がかかえる課題に取り組むNGOの活動に関わる担い手を育てます。世界の課題を構造的に理解し、考え行動する力を学びます。講座には、関西地域で活動するNGO/NPOのメンバーがさまざまな形で参加します。

●じっくり多角的に学びます

一日二日・全6回の講座では、多様な角度から世界の課題に触れ、身近にひきつけて考えます。「気づき」「学び」「行動」という3つのプロセスを踏まえて、講座内容を構成しています。さまざまな分野からの多彩な発題も魅力です。

●参加者主体の講座です

各回のプログラムは講義だけでなく、ワークショップ形式の参加型プログラムを取り入れて進めます。また、参加者同士でグループを作り、課題への取り組みを考えるグループワークを取り入れています。いまいるところから、一歩踏み出すきっかけを得られます。

●歴史と実績のある講座です

1974年設立の関西NGO協議会、今年で44周年を迎えます。経年生かした、NGOや国際機関、政府機関の職員となったり、大学・大学教など国際問題や市民活動を研究する人数も多く輩出しています。http://Ndai.netをご覧ください。

◎ 私たちが企画・運営しています

第24期関西NGO大学運営委員会

校長 藤野 達也	(特)神戸大学、(特)関西NGO協議会代表理事
副校長 浜本 裕子	(特)大塚VIMC、(特)関西開発教育協会理事
運営委員	丸川 共生 株式会社、(特)ボネオ保全トラスジャパン理事
石橋 健一郎	NPO職員
植田 文英	会社員
岡本 隆子	会社員
片岡 洋子	自由業
日下部 幸	NGOボランティア
倉田 あかり	会社員
電通 幹事	社内の講師
佐久間 望子	主婦
藤 正康	建築家
田中 千恵	大学教員
中村 美穂	高専教員
藤田 新子	会社員
藤井 久美子	中学校教員
堀内 泉	大学教員、(特)AMネット理事
三浦 弘志	デザイナー
岡井 一樹	JICA職員
森 利秋子	研究員
森 有加	学生

※講座の企画・運営は、関西NGO大学学生が行っています。

◎参加者の声

講座で学んだこと、印象に残ったことは...

「たくさんのお出で、これが一歩の収穫です！自分の生きている世界のことなのに、知らないことばかりで衝撃でした。多岐岐なものの方、考え方を知り、視野が広がった。国際問題、国内の問題でも、必ず自分自身の生活に結びついていることに気づいた。いろんな考え方や取り組みがあること、いろんな関わり方ができることを知った。多岐岐な一歩に気づいて、関心を持って取り組むことができるようになった。動かないのは始まらない、動けばどんどんつながっていく、それって楽しいと学びました。月に一度だけ全部で6回だけ、少しづつ自分家っていくのが実感でき、うれしかった。夜の交流会では話をする仲間ができ、遅くまで語り合えたのは、かけがえのない時間でした。」

こんな点をオススメします！

- 世界の動きを詳しくみることができます。
- NGOや国際協力に関心を持てます。
- 一日二日の時間の中で、ワークショップ+議論、を深めることができます。
- 「国際協力」という切り口から、地域や日本のことについても視野を広げられます。
- NGO、国際協力、ボランティアなど、なにを始めるべきか悩むことも、たくさん聞かれます。
- いろいろな人と出会え、さまざまな分野の人とネットワークができます。
- 聞かれた場であり、誰でも受け入れられる雰囲気があります。

- 世界で起きているモンダイと私 ~わたしの国際協力の見つけ方~
日程：2010年9月25日(土)~26日(日)
発題者：神田浩史さん(特)AMネット理事、「ぜみ・エコライフ推進プロジェクト」実行委員長
- なぜ格差は広がるのか ~グローバル経済のからくり~
日程：2010年10月23日(土)~24日(日)
発題者：佐久間望子さん(特)アジア太平洋資料センター理事
- 世界の争いを読み解く ~原因はひとつ?~
日程：2010年11月20日(土)~21日(日)
発題者：齋藤和彦さん(徳島大学教授)
- 力を持つ人・奪われる人 ~私はどこに?~
日程：2010年12月11日(土)~12日(日)
発題者：小柳伸彦さん(釜ヶ崎キリスト教協会)
- こんなやり方もあり?! 私のスタイルみつけよう! ~多様な実践に学ぶ~
日程：2011年1月22日(土)~23日(日)
発題者：増山藤志さん(画家、WAPAオーガナイザー、アート集団「桃色ゲリラ」代表) 梶井洋志さん(NDS・中略ドキュメンタリースペース/ドキュメンタリー制作者) 井上昌哉さん 小川新平さん(くびひがフェ、京都大学時間雇用職員組合ユニオンエグゼクティブ)
- 私の気づきを行動へ ~つながる・ひろがる・私たちの"お"~
日程：2011年2月19日(土)~20日(日)
発題者：参加者グループ

23期実践写真

グループワーク発表風景

ワークショップ(質疑応答)風景

ワークショップ(発表準備)風景

並列年表 日本/世界が抱える社会的課題につながるNGO大学

ここでは NGO 大学のテーマと並列で国際協力・世界の動き・日本の動きを年表にしてみた。日本の国際協力やNGOの歴史と、NGO大学のやってきたことを対比させることで、その時代背景や出来事、日本や世界が抱える社会的課題をNGO大学がどのように取り入れ、講座に反映してきたかが見えてくるのではないだろうか。

【並列年表 NGO 大学 30 年の歩み/国際協力の歴史、世界の動き】

年	NGO大学のテーマ/各回テーマ	国際協力/世界の動き/日本の動き
1987	第1期 全体テーマ 「NGOのスタッフ・リーダーシップディベロップメント」 ①地域開発(会議運営、スタディーツアーの運営) ②第三世界の貧困(機関紙編集、プログラム・運動の組織化) ③開発と環境(資料収集、文献ファイリング) ④難民と女性(英和文レスポンス、渉外、接遇) ⑤差別と人権(募金、メンバーシップキャンペーン) ⑥民衆と開発(ボランティアトレーニング、人事財務)	・関西国際協力協議会が設立(6月) ・NGO活動推進センター設立(10月) ・国際協力の日(10月6日)制定 ・バングラデシュ大洪水 ・世界人口 50 億人を超える
1988	第2期 全体テーマ 「第三世界の民衆と開発」 ①ODAとNGO～国際協力論、ボランティア論～ ②第三世界と自己発見 ③在日外国人留学生との交流 ④アジアの植民地支配と民族独立運動 ⑤貧困と人権 ⑥民衆と開発	・名古屋第三世界交流センター設立 ・バングラデシュ大洪水(8月) ・パレスチナ独立国家宣言 ・ウータン・森と生活を考える会設立
1989	第3期 全体テーマ 「第三世界の貧困と日本の貧困」 ①第三世界と自己発見 ②食と「農」からみえるもの ③なぜ今、外国人労働者問題なのか ④アジアの女性と解放 ⑤援助・国際協力を考える ⑥NGOの現状と今後の方向	・国連「子どもの権利条約」採択 ・外務省NGO事業補助金制度施行 ・中国:天安門事件 ・ベルリンの壁崩壊 ・第1回 APEC 開催
1990	第4期 全体テーマ 「第三世界の人々と私の生き方」 ①第三世界の豊かさと貧しさ ～私たちの日常生活とのかかわりの中で～ ②自己発見とライフスタイル① ③市民が担う新しいネットワーク～あなたが今からできること～ ④環境とライフスタイル② ⑤新しい隣人～外国人労働者と共に生きる～	・国際開発高等教育機構(FASID)設立 ・イラク軍がクウェートに侵攻 ・東西ドイツ統一 ・ルワンダ紛争

	⑥援助を考える～ODAとNGO～	
1991	第5期 全体テーマ 「第三世界理解講座」 ①第三世界の豊かさ ②第三世界と自己発見 ③少数民族と人権 ④難民と開発 ⑤開発と環境問題(公開講座) ⑥援助を問う	<ul style="list-style-type: none"> ・湾岸戦争勃発 ・郵政省国際ボランティア貯金開始 ・ODA 総額100億ドル超える ・南アフリカ・アパルトヘイト終結宣言 ・ソビエト連邦崩壊 ・カンボジア和平合意(於パリ) ・ユーゴスラビア紛争始まる
1992	第6期 全体テーマ 「第三世界理解講座」 ①第三世界の豊かさと言しさ ②第三世界と自己発見 ③開発と人権 ④第三世界と農 ⑤開発と環境(公開講座) ⑥NGOを問う	<ul style="list-style-type: none"> ・国境なき医師団日本設立 ・ODA 大綱閣議決定 ・国連カンボジア暫定機構(UNTAC)発足 ・PKO 協力法施行 ・国連環境開発会議(地球サミット)開催(於リオデジャネイロ・6月)
1993	第7期 全体テーマ 「国際社会から問われている私」 ①国際社会から問われている私たち ～なぜカンボジアに行ったのか～ ②国際社会から問われている私たち～なぜ国際協力をするのか～ ③私たちの食べているものは ④先住民族の人権～環境問題と精神文化～ ⑤性が売り買いされるわけ～日本の中の女と男の関係から～ ⑥私自身を問う	<ul style="list-style-type: none"> ・地球環境基金の創設 ・PKO 文民警察官がカンボジアで襲撃され死亡 ・EU 成立 ・第1回アフリカ開発会議(於東京) ・国際協力プラザ(APIC)開設 ・国連世界人権会議(於ウィーン) ・カンボジア暫定国民政府発足
1994	第8期 全体テーマ 「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」 ①そもそもNGOとは… ②私にとっての開発 ③実はこんなにインターナショナル ④市民の声を！ もっと国際協力を ⑤すきやねん ボランティア ⑥これからどうする？	<ul style="list-style-type: none"> ・北米自由貿易協定(NAFTA)発効 ・ルワンダ大量虐殺 ・NATO がボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争でセルビア人武装勢力を空爆 ・第1回国連防災世界会議 ・国連人口・開発会議(於カイロ)
1995	第9期 全体テーマ 「私にとっての地域、私にとっての開発、私にとっての行動」 ①私はだあれ？ ②豊かかって何だろう？ ③足元から見直そう ④私にとっての国際協力 ⑤できることからボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神淡路大震災(1月) ・世界貿易機関(WTO)発足 ・アジア太平洋経済協力会議(APEC)(於大阪) ・国連社会開発サミット(於コペンハーゲン) ・第4回世界女性会議(於北京)

	⑥あなたは どうする？	・市民活動を支える制度を作る会設立
1996	<p>第10期 全体テーマ 「生活に根ざした開発と協力」</p> <p>①私はどこにいる？</p> <p>②こんなこと、あんなこと、そんなこと</p> <p>③多文化・異文化・楽しいやんか！</p> <p>④私の価値観はどこから…</p> <p>⑤消費者(わたし)が世界を変える</p> <p>⑥あなたの行動が必要です</p>	<p>・外務省・NGO定期協議会開始</p> <p>・初のパレスチナ自治選挙</p> <p>・台湾で初の直接総統選挙</p> <p>・国連人間住居会議(於イスタンブール)</p> <p>・世界食料サミット(於ローマ)</p> <p>・ペルーの日本人大使公邸占拠事件</p>
1997	<p>第11期 全体テーマ 「生活の中にある国際」</p> <p>①わたしたちの世界は困難(こんなん)～くらし発、世界は今～</p> <p>②ごっつー元気なNGOいらっしゃい！</p> <p>③ときめき アジアンサウンド</p> <p>④旅は道づれ 世は…？</p> <p>⑤依存と自立のイイ関係</p> <p>⑥わたしたちの行動は Do Now?(どんなん)</p>	<p>・「21世紀に向けての ODA 改革懇談会」発足</p> <p>・香港返還</p> <p>・第1回太平洋・島サミット(於東京)</p> <p>・アジア通貨危機</p> <p>・第3回気候変動枠組条約締結国会議(於京都)</p> <p>・地球温暖化防止会議(於東京)</p>
1998	<p>第12期 全体テーマ 「国際協力と毎日の生活」</p> <p>①地球を動かすわたしのおカネ～世界経済タネ明かし～</p> <p>②NGO? なんか ごっつう おもしろそう</p> <p>③ガマンよりマンガ</p> <p>④世界と日本のおいしい? 関係</p> <p>⑤世界と日本のクサイ仲</p> <p>⑥わたしの可能性 未来の財産</p>	<p>・インドネシア・スハルト政権崩壊</p> <p>・コソボ紛争</p> <p>・第2回アフリカ開発会議(TICAD II)(於東京)</p> <p>・特定非営利活動促進法(NPO法)の施行</p>
1999	<p>第13期 全体テーマ 「世界につながる私の行動」</p> <p>①世界を動かす はじめの一歩</p> <p>②誰がずんねん NGO</p> <p>③「金持ち」の言い訳「貧乏」の理由</p> <p>④笑いが力に 想いは世界に</p> <p>⑤平和の担い手は誰?～へいわっていいわあ～</p> <p>⑥咲きほころん 旅立ちのとき 未来へと</p>	<p>・欧州で統一通貨ユーロが誕生</p> <p>・国連「人間の安全保障基金」設立</p> <p>・東ティモール直接住民投票</p> <p>・トルコ大地震</p> <p>・男女共同参画社会基本法施行</p> <p>・国際協力銀行(JBIC)設立</p> <p>・「周辺事態法」成立</p> <p>・マカオ返還</p>
2000	<p>第14期 全体テーマ 「世界が待っている私の行動」</p> <p>①気づこう、学ぼう、踏み出そう～実はあなたは力持ち～</p> <p>②国際協力まるかじり～あなたにもできるNGOのススメ～</p> <p>③What's 平和?～あなたと平和とNGO～</p> <p>④伝える! 伝わる! 伝え合う!～映像はええぞ～</p> <p>⑤やってびっくり貿易ゲーム～知ってるほど世界経済～</p> <p>⑥こだわり極めてNGO～あなたの行動待ってます～</p>	<p>・ジャパン・プラットフォーム設立</p> <p>・九州沖縄サミット開催</p> <p>・世界教育フォーラム(於ダカール)</p> <p>・ミレニアム開発目標(MDGs)策定</p>

2001	<p>第15期 全体テーマ 「社会を作るのはわたしです」</p> <p>①NGOってなに？</p> <p>②ライブ!! 南太平洋～音楽・ジャングル・村づくり～</p> <p>③知ってるほど世界経済～得する側、損する側、あなたはどっち?～</p> <p>④歴史に問いかける～過去と現在の対話～</p> <p>⑤現場に行こう、活動から学ぼう！</p> <p>⑥学びを糧に飛び出そう！</p> <p>～新しい社会をつくっていくのはあなたです～</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回世界社会フォーラム(WFS)ブラジルのポルト・アレグレで開催 ・国際ボランティア年 ・9.11 アメリカ同時多発テロ ・CHANCE!(平和を創る人々のネットワーク)ピースウォーク(於東京渋谷) ・アメリカがアフガニスタンを空爆(アフガニスタン紛争)
2002	<p>第16期 全体テーマ 「NGOが社会をゆさぶる」</p> <p>①NGOを理解するための基礎知識</p> <p>②NGOの理想と現実、可能性と限界</p> <p>③世界を良くするために、今の常識を疑うことから</p> <p>④一人ではできないことは、集まれば、できる</p> <p>⑤足元の活動から、経験からの学びと元気をもらおう</p> <p>⑥ここで一度まとめ、そこからそれぞれの道を考えよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東ティモール独立 ・JICA 草の根技術協力事業開始 ・日韓ワールドカップ開催 ・日本NGO支援無償資金協力開始 ・持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグ・サミット)開催 ・WORLD PEACE NOW 結集
2003	<p>第17期 全体テーマ 「私が社会をよくする一人」</p> <p>①人が人として生きていくためには？</p> <p>②「国際協力」はホントに役立っている？</p> <p>③世界の貧富のからくり～もうひとつのあり方を考えよう～</p> <p>④ commitment からはじまる～私自身の問題として動くために～</p> <p>⑤グローバル化の中の日本、そして私</p> <p>⑥「私」が社会を変えていく力</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国際反戦行動 A.N.S.W.E.R..(Act Now to Stop War & End Racism)が平和のためのアクション呼びかけ ・ユーゴスラビア連邦消滅 ・ODA大綱の改定 ・英米軍、バグダッド攻撃(イラク戦争) ・第3回アフリカ開発会議(於東京)
2004	<p>第18期 全体テーマ 「私は意思を持って社会とつながりたい」</p> <p>①NGOって何？ NGOって必要？</p> <p>②これでいいのか！？世界の経済・日本の経済</p> <p>③やり過ぎさないこと、考えつづけること～政治と私のつながり～</p> <p>④流す人、流される人～情報に流されない読み解き方～</p> <p>⑤「こだわり」が社会を変える</p> <p>⑥未来をつくる新たな(オルタナティブ)つながり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第4回世界社会フォーラム(於ムンバイ) ・イラクに於いて日本人拉致事件発生 ・自衛隊がイラクの多国籍軍に参加 ・新潟県中越地震 ・スマトラ島沖地震 ・日本の人口がピークに。翌年から減少へ。
2005	<p>第19期 全体テーマ 「私にとっての国際協力」</p> <p>①そもそも「国際協力」ってなに？</p> <p>②なぜ格差は生まれるのか～グローバル経済のからくり～</p> <p>③出かけてみよう！身近な世界の現場へ</p> <p>～歩いて、見て、感じる世界と私のつながり～</p> <p>④いま問い直す「平和」</p> <p>⑤私のチカラの可能性～「想い」を形にするために～</p> <p>⑥私らしい国際協力のはじまり！</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「ほっとけない世界の貧しさ」キャンペーン ・京都議定書発効(地球温暖化防止) ・ロンドン中心部で同時爆破テロ ・第2回国連世界防災会議

2006	<p>第20期 全体テーマ</p> <p>「もっと私がかかわれば きっと世界はよくなる」</p> <p>①たいへんやけど、おもしろい!? NGOの真実</p> <p>②グローバル経済ってなあに? ~つくられている経済格差~</p> <p>③私と「日本という国」の関係! ?</p> <p>④伝わらなくちゃ始まらない</p> <p>⑤日常にある世界へのトビラ</p> <p>⑥私の選択が世界を変える</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・JICA 地球ひろば開所 ・第4回太平洋・島サミット (於沖縄) ・フセイン元大統領の死刑執行 (イラク)
2007	<p>第21期 全体テーマ 「世界とよくつながるために私ができること」</p> <p>①ようこそNGO大学へ~国際協力ことはじめ~</p> <p>②アナタハ クミコマレテイル~グローバル経済のからくり~</p> <p>③「美しい国」に生まれて~私の生活と政治の関係~</p> <p>④メディアが変える私たち? 私たちが変えるメディア? ~情報を読み解く力が社会を変える</p> <p>⑤「世界を動かすあなたのこだわり~多様な実践に学ぶ~</p> <p>⑥「私の思い」をカタチにする~気づき、学び、そして行動へ~</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟県中越沖地震 ・ミャンマーの反政府デモで日本人カメラマン死亡 ・世界同時株安 (サブプライムショック)
2008	<p>第22期 全体テーマ 「世界につながる私の足元」</p> <p>①さあはじめよう! 国際協力~国際協力・NGO入門~</p> <p>②気がつけばみんな“下流”? ~格差の構造を読み解く~</p> <p>③見えていますか? あなたのとなりの外国人 ~「多文化共生」を考える~</p> <p>④食からたどる地球環境~越境する食べ物ももたらすもの~</p> <p>⑤世界を変える多様なとりくみ~ユニークな実践に学ぶ~</p> <p>⑥あなたの学びを行動へ~アクションプラン発表~</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・G8洞爺湖サミットNGOフォーラム ・中国四川省大地震 ・ミャンマーサイクロン被害 ・公益法人制度改革 ・リーマンショック ・東京日比谷公園に「年越し派遣村」開設
2009	<p>第23期 全体テーマ 「続けること、変えること」</p> <p>①ようこそNGO大学へ~まずは知っておきたい国際協力のこと~</p> <p>②カネは天下のまわりもの?! ほんまに?? ~いまこそ学ぼう世界の経済~</p> <p>③流す人、流される人~情報を読み解く力が社会を変える~</p> <p>④とつてもええこと?“エコ”活動~エコ活動の表と裏~</p> <p>⑤いつでもどこからでもはじめられるよ~多様な実践に学ぶ~</p> <p>⑥私の学びを行動へ~アクションプラン発表~</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日経平均株価・バブル後最安値 ・国連気候変動サミット開催 ・厚生労働省が貧困率を初めて発表 (15.7%) ・「新しい公共」が国家戦略の柱に
2010	<p>第24期 全体テーマ 「これでいいの?」</p> <p>①世界で起きているモンダイと私~私の国際協力の見つけ方~</p> <p>②なぜ格差は広がるのか~グローバル経済のからくり~</p> <p>③世界の争いを読み解く~原因はひとつ? ~</p> <p>④力を持つ人・奪われる人~私はどこに? ~</p> <p>⑤こんなやり方もあり?! 私のスタイル見つけよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生物多様性条約第10回締結国会議 (於名古屋) ・ハイチ大地震 ・パキスタン大洪水 ・チリ大地震 ・チュニジア「ジャスミン革命」

	～多様な実践に学ぶ～ ⑥私の気づきを行動へ～つながる・広がる・私たちの“わ”～	
2011	第25期 全体テーマ 「まわりを変える？ 私が変わる？」 ①変わる？変える！私たちの暮らし ～エネルギーを切り口に、いま根本を見直す～ ②私が動くと社会がよくなる！～市民参加の可能性～ ③”脱”マスメディア～流されるな、自分で考えろ～ ④未来へつながる小さな村の大きな知恵～木頭村からの贈り物～ ⑤出会い、そして発信へ～映画『祝の島』の監督から学ぶ～ ⑥私たちが社会をつくる担い手だ！	<ul style="list-style-type: none"> ・チュニジア「ジャスミン革命」アラブの春 ・東日本大震災、福島第一原発事故(3月) ・反原発運動が全国で起きる ・南スーダン独立 ・シリア内戦勃発 ・タイ大洪水 ・ソマリア・イエメン大干ばつ ・トルコ地震
2012	第26期 全体テーマ 「ほっとけへん、わたしの幸せ地球の未来！」 ①ほっとけへん。わたしの幸せ、地球の未来！ ②え？食卓のおコメの大半が外国産に？ ～グローバル経済と私たちの未来～ ③自治は楽しい♪～脱“おまかせ民主主義”～ ④今が日本の分かれ道?!～貧困、格差社会からの脱却～ ⑤NGOとソーシャルビジネス、なにが違うの？ ～社会に参加する様々な選択肢～ ⑥スローでシンプルにいこう！～たのしく生活して社会を変える♪～	<ul style="list-style-type: none"> ・第6回太平洋・島サミット(於名護市) ・シリア内戦激化。日本人ジャーナリスト殺害。 ・世界人口が70億人を超える。 ・パキスタン。マララ・ユサフザイがタリバンとみられる男たちに銃撃される。
2013	第27期 全体テーマ 「あたりまえを疑え！」 ①あたりまえを疑え！！～社会を読み解く力を養う～ ②メディアの世界に何が起きている？ ～知るだけがニュースじゃない！～ ③憲法は誰のもの？誰のための改正？～暮らしがどうかわる？～ ④NGO/NPO、ソーシャルビジネスと私のイイ関係 ⑤携帯電話、ポテトチップス、自転車… ～身近な消費が引き起こす“乱開発”～ ⑥あなたの学びをどう活かす？ ～Be the Change! 変化の主体はあなた～	<ul style="list-style-type: none"> ・フィリピン台風被災 ・第5回アフリカ開発会議(於横浜) ・南太平洋・ソロモン諸島沖でマグニチュード(M)8.0の地震が発生 ・バングラデシュ・商業ビルが崩壊。死者1,127人。負傷者2,500人以上。(詳細→ダッカ近郊ビル崩落事故) ・ネルソン・マンデラ氏死去
2014	第28期 全体テーマ 「なんかへんだ！を掘り下げろ！！～あたりまえを疑え！」 ①なんかへんだ！を掘り下げろ！！ ～今の生活の疑問を見つめてみませんか？～ ②ほっとけない！日本の政治、私たちがすべきこと。 ③ボランティアで社会はよくなる？ ④ニッポンって民主主義の国？～沖縄を通して見る日本のカタチ～	<ul style="list-style-type: none"> ・「武器輸出三原則」の見直し閣議決定 ・「ODA大綱」改定 ・IS国家樹立宣言(イスラム国) ・シリア難民の増加 ・香港で雨傘革命が起きる ・チリ沖震源、M8.2の地震が発生 ・インドネシア・東ジャワ州のケルト山

	⑤どうすれば持続可能！？～経済成長からの途中下車～ ⑥みんなでこれからをつくろう！～おいしいは楽しい♪～	が噴火。住民約 20 万人が避難。
2015	第29期 全体テーマ 「スマートに社会改革」 ① N 大カフェ DJ 議員が語るまちづくり ～市政とファッション・カルチャーシーンをつなぐ ②内田樹 × SEALDs KANSAI～ぼくらの民主主義を考える～ ③世界を変える「理想の公式」～開発の現場と公平な未来～ ④経済成長は豊かさをもたらす?!～アベノミクスの功罪～ ⑤ヘイト・スピーチを通して考える日本社会 ⑥Ndaicafe スマートに社会変革！～食を変えたら未来が見える?～	・ネパール大地震(4月) ・欧州難民(アフリカ・シリア)危機 ・国連持続可能な開発サミット ・SDGs(持続可能な開発目標)採択 ・「安全保障関連法」成立 ・大阪都構想が住民投票で却下 ・ミャンマー総選挙。野党国民民主連盟が大勝利、政権交代。 ・ASEAN 経済共同体発足
2016	第30期 全体テーマ 「学びと行動」 ①いま、NGOを問う～国際協力NGOのこれまでとこれから～ ②「市民による学びの場」の来し方 行く末 ～関西NGO大学リユニオン～	・伊勢志摩サミット開催 ・オバマ大統領が広島を訪問 ・英、国民投票で EU 離脱へ ・バングラデシュでイスラム過激派によるテロ、日本人も巻き込まれる

【参考文献】

『関西NGO大学問合せ受け答えマニュアル』 1989年 関西国際協力協議会

「市民による学びの場の創造と運営～関西NGO大学の実践～」

『大学教育学会誌』第25巻 2003年 浜本裕子

『国際協力の担い手育成におけるNGO主催講座の役割と可能性～関西NGO大学の第三者評価～』

2005年 瀬良香織(関西NGO協議会)

『国際協力NGOの情報誌 シナジー vol.155』 2012年 国際協力NGOセンター(JANIC)

『平成史』 2012年 小熊英二編著 河出ブックス

『持続する情熱～青年海外協力隊50年の軌跡』 2016年 国際協力機構(JICA)

『NGOデータブック2016～数字で見る日本のNGO』 2016年 国際協力NGOセンター(JANIC)・外務省

『新・貿易ゲーム』 2021年 開発教育協会(DEAR) <http://www.dear.or.jp/books/book01/1149/>

【参照ウェブサイト】

関西NGO協議会 <https://kansaingo.net/index.html>

関西NGO大学 <http://ndai.net/>

NGO大学ブログ <http://ngodaigaku.seesaa.net/>

ひとまずの終わりに

藤野達也（初期運営委員、第8～25期校長）

ここまでお目通し、ありがとうございました。

はじめは国際協力に直接的にかかわる人材を育成することを意図した企画が、それぞれにとって、より日常的、継続的、総合的、根源的な考え、行動を生みだすきっかけづくりの場にと変化していきました。

今まで知らなかったことや人に出会って、刺激を受け、うなずいたり、首をかしげたり、深めたり。

国内外のありように、疑問をもち、自分とのつながりを考え、できることを探してみる。

自分が納得できる方向を探り、段取りをして、技術、能力が必要なら身につけて、動いてみる。
文句愚痴を言うだけ、理想を語るだけ、悲観する、あきらめる、誰かがしてくれるのを待つのではなく、

小さなことからでも、自分がしたくないことを減らし、したいことを増やしていく。

得ることのためばかりでなく、

勇気をもって、手放す、離れる、脱けることだっていいのかもしれない。

結果ばかりを期待せず、過程を楽しみながら、しぶとく気長に。

世の中を変えることはそう簡単にはいきませんが、
そこにどう対していくかは、それぞれに選べるし、変えていけます。

名もなく、静かに、おもしろおかしく、ときにちょっと危なくも。

職業、肩書きという見地からの評価のためでなく。

まだまだ達していなく途上でも、これからも。

始めたときの想い以上に、NGO大学が、企画側にも、参加者にも、
そのまわりの人たちにも、良くも悪くも(?)影響を及ぼしてきていることが、伝わればうれしく思います。

この一冊はN大30期の幕引きにあたってのもののはずなのですが、今の世の中の様子をみると、

N大的企ては、これからも必要な気が、実はしています。

形式的には、ひとまず幕を引きますが、N大の歴史と人のつながりは、これからも何かを
起こしていくことと思います。

最後に、N大を支え、かかわり、またこの一冊を
まとめるのに尽力して下さったすべての皆さんに、感謝いたします。

いつか、どこかで、また。

編集後記

■“人のつながり”が持つ力

関西NGO大学運営委員 荒川共生

私がNGO大学に参加者、運営委員として関わり、この冊子「30年のあゆみ」作成に携わって実感した、共通するキーワード、それは「人のつながり」です。

“30年”とひと口で言うけど、例えば、生まれた子どもが成人し、さらに30才になるまでの長い長い時間です。加えて年6回の連続講座。さらに、その各回が1泊2日という濃い内容です。「はじめに」の章でも書きましたが、この30年に実施した講座数は176回。呼び出した発題者は319人。参加者はのべ6908人（運営委員を含む）。NGO大学の30年。その実績、成果、資料、関わった人の学びや思いをまとめるのは大変な作業でした。

- ・過去の資料を関西NGO協議会事務局（大阪市）まで車で取りに行き、広島の実家まで運び込む。
- ・段ボール8箱に詰め込まれた過去のファイルを1ページずつめくり、参加者数や実施内容、実績を書き出す。
- ・過去ファイルから冊子に採用する資料～募集パンフ、メディア掲載資料、報告書、参加者リストなどを抽出。
- ・残すべき資料をスキャンしPDF変換、分類、整理。
- ・これらの資料を総合的に分析し、文章化。写真や表の作成・添付、レイアウト、完全原稿の作成を行う。

特に初期の頃の資料は、第1期から関わっていた藤野達也さん（元PHD協会スタッフ、元NGO大学校長）や和田みのりさん（修了生、元運営委員）が所有していた当時の資料がとても役に立ちました。

NGO大学の実績をまとめる作業は私ひとりで出来ることではありません。歴代のN大運営委員会や、修了生、事務局スタッフなど、多くの人のつながりがあってこそ、実現できたと確信しています。

この冊子を作り上げるにあたって、多くの関係者からの寄稿をいただきました。ありがとうございました。運営委員座談会（2021年5月）の記録をまとめてくださった山下奈美さん。元N大副校長の浜本裕子さんへのインタビューとその原稿作成を担った片岡法子さん、栗本知子さん。事務的な面で支えてくださった関西NGO協議会の高橋美和子事務局長にも感謝です。特に佐久間量子さん、田中綾さん、細かな原稿チェックや的確なアドバイスをしてくれた栗本さんの支えなしには冊子完成にこぎつけなかったでしょう。

この冊子の表紙デザインは、元運営委員の三浦弘志さんです。このデザインのキーワードも「つながり」です。地球上に存在している多様な課題は、複雑に絡み合っていることを表現しています。NGO大学では課題と自分との「つながりに気づく」ことが、はじめの一步という位置付けでした。そしてその課題を自分事として「学び」「知る」。さらに、課題の解決のために「行動」することの意味を考えました。私には微力かもしれないが、社会をより良くしていく「力」があるのです。課題とのつながりだけでなく、多様な人とのつながりも忘れてはいけません。ひとりの「微力」は、人とつながれば無限の可能性と力を持つこと。私がNGO大学で得た最大の学びです。

この「つながり」の力があれば、第31期も開催可能かも？

■アーカイブは民主主義の基礎

関西NGO大学運営委員 栗本知子

30年、互いに学び合い、成長し、よりよい社会の在り方を考えようとした多くの人たちの息遣いを感じる編集作業でした。N大を長く支えた藤野さんの生き様、夜中まで続いた交流会を思い起こす浜本さんの分析力…。アーカイブは民主主義の基礎です。膨大な資料を収集し残し、詳細にふりかえる作業を試みた荒川さんに拍手！

■“嬉しさ” “しんどさ” “やりがい” が入り混じる N 大

関西NGO大学運営委員 田中綾

なんとかN大の活動記録を形に残そうと動き出した冊子づくり企画。やりがいとしんどさの入り混じったN大が生活の一部だった日々を久々に再び少し味わうことができ、嬉しいようなしんどいような(笑)。改めてN大の凄さを実感しました。膨大な執筆編集や事務作業をしてくださった荒川さん、佐久間さんはじめ、これまでN大を支えてこられた皆様に感謝！

■もうひとつの“編集後記” ～つなぐということ～

関西NGO大学運営委員 佐久間量子

2017年の2月に30期のN大が終了してから早5年。活動記録がやっと形となり安堵の気持ちでいっぱいです。荒川さんから初めて原稿案が送られてきたときは、その分析力やまとめられた労力を尊敬するとともに、NGO大学30年の重みをずっしりと感じて震えるほどの嬉しさを感じました。

メールを遡ると、2017年に今後の活動方向性について話し合いをはじめ、2018年からはいくつかの試みを行い、2019年には冊子の最初の目次試案を検討し、2020年に「これ以上遅らせられん！」との差し迫った状況となり、冊子の作成開始と同時に、運営委員会の活動終了に伴って発生する撤収作業を行った奮闘の様子をなぞることができます。これらは主に第28-30期の運営委員が検討し、冊子の編集は荒川共生さんと栗本知子さん、事務手続きは田中綾さんと私が中心となって行いました。

原稿執筆をはじめ関わってくださったすべての方々に感謝いたします。と同時に、1泊2日の講座開催を長い間つないでいくために、他にも大切な役割を担ってくださった方々を紹介します。元運営委員の稲垣文拓さんは、講座運営に必須となる備品の購入にご尽力いただき、各期の記録のまとめを引き受けてくださった他、運営委員会が独立して主催団体である関西NGO協議会との関係が希薄だったころ、個人会員となって事務局とのつながりを切らないようにしてくださっていました。これはとても重要なことでした。「今期なら大丈夫」などと即時対応を必要とする受付と複雑きわまりない会計業務に携わってくださったみなさん、そのかわりがなければ講座は継続できませんでした。ウェブサイトの管理をくださった三好力さん、託児や介護などのお手伝いを引き受けてくださったみなさんにも心から御礼申し上げます。(特活)関西NGO協議会事務局長の高橋美和子さんには冊子完成まで伴走していただきありがとうございました。心強かったです。

新型コロナウイルスの影響が続く中、ふと、コロナ禍だったらN大はどんな形態で開催していたのか？何を講座のテーマとしていたか？対面開催できても交流会は難しいだろうなどと、思いを巡らしています。

そして、もう一度、冊子が完成してほっと胸をなでおろしていることをお伝えして、結びといたします。

【今後のつながり】

2021年5月、関西NGO協議会の総会において、運営委員が「関西NGO大学のあゆみ～“市民による学びの場”の30年～」と題して、これまでの活動を報告しました。その後、オンラインで同窓会が行われ、30名以上が参加。久しぶりの親交を楽しみました。これからもつながりを継続するしくみが必要ということで、当日のうちにFacebook上に「N大同窓会」(招待制)というグループが立ち上がりました。

<https://www.facebook.com/groups/ndaireunion>

今後も、ゆるやかな情報交換などつながりを継続していければと考えています。以下のメールアドレスにご連絡をいただいても結構です。周りにN大に参加、関わった方がおられましたら、どうぞお声がけください。

kansaingodaigaku2021@gmail.com



世界の今を知り、これからを考える講座

NGO
だいがく



印刷製本：有限会社 糺書房

この印刷物は
自然エネルギー(バイオマス発電78.6kWh)を
使用して印刷しました。



関西 NGO 大学のあゆみ

～「市民による学びの場」の30年～

編著者： 荒川共生（「N大のあゆみ」冊子制作責任者）

関西NGO大学運営委員会

発行元： 関西NGO大学運営委員会

発行日： 2022年3月31日

印刷：（有）糺書房

連絡先： 関西NGO大学運営委員会

Email kansaingodaigaku2021@gmail.com

（特活）関西NGO協議会

大阪市北区茶屋町 2-30